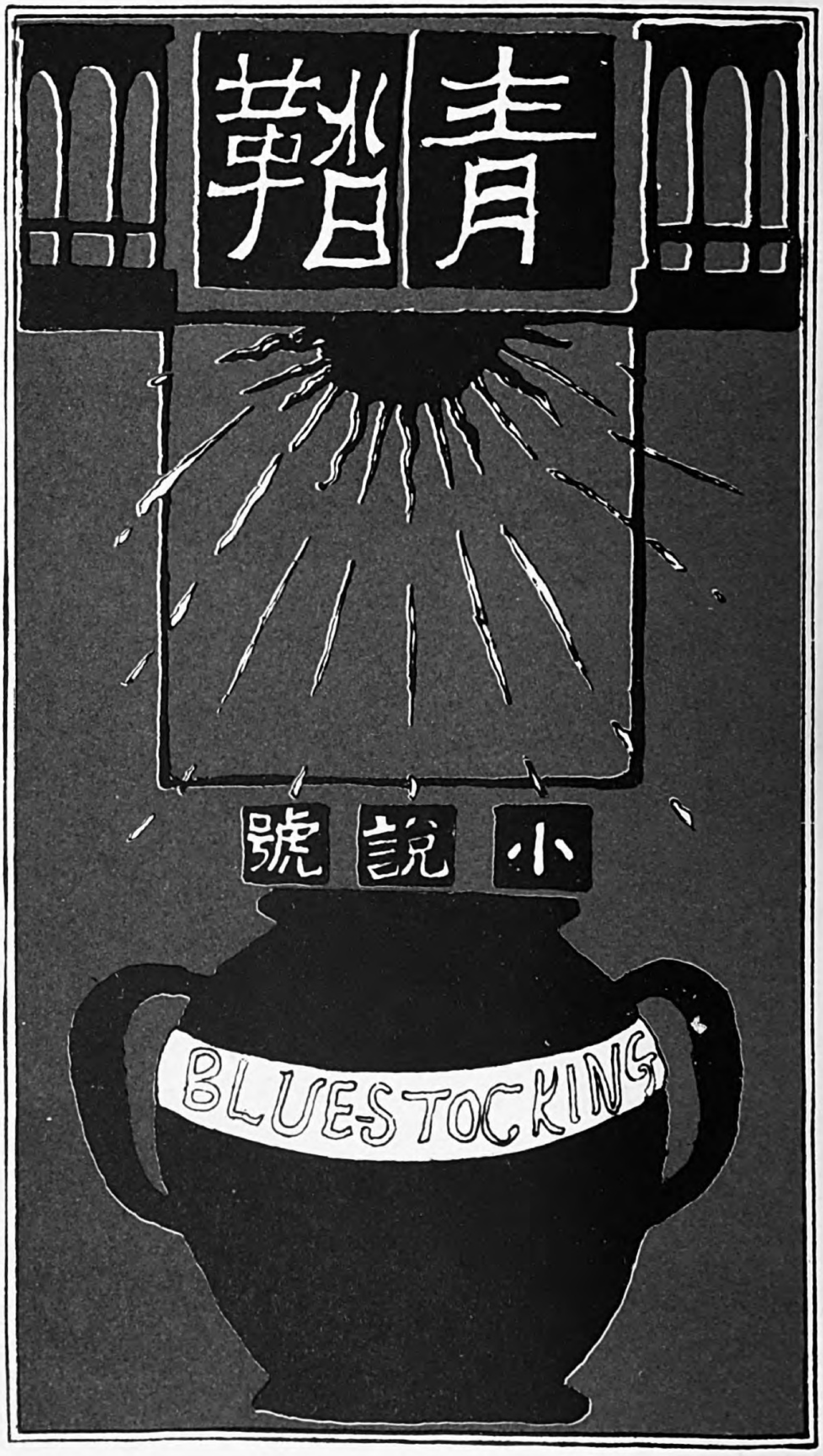


Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜

第二卷■第四號

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜 第二巻第四號目次

老……一……尾島菊
執着……九……加藤みどり
湖畔の夏……二〇……茅野雅
習作の一……三七……杉本正生
乙彌と兄……五八……林千歳
旅……六七……上田君
暗闘……八一……岩野清
タイピスト……九四……神崎恒
手紙……一〇二……荒木郁

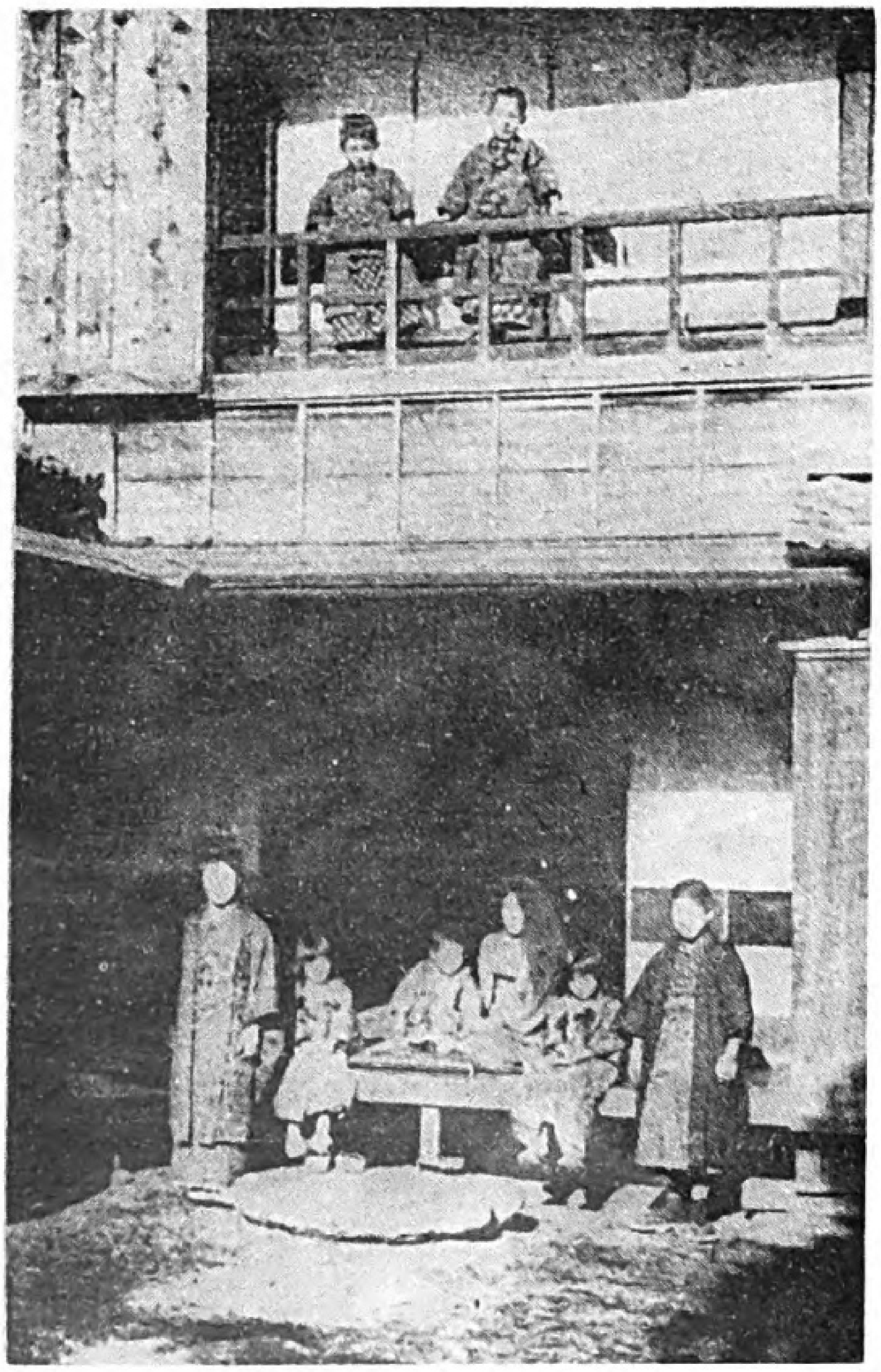
附錄

叔父ワーニャ（戯曲）……一〇七……瀨沼夏葉譯
窓より……一二三……らいてう
編輯室より……一二六……編輯係

口絵　最近の與謝野晶子氏と御家族
表紙絵　尾竹紅吉

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER



最近の與謝野晶子氏と御家族

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

畫窓より

我れ神を見、神を知るとき、
神我れを見、我れを知る。
見るものと　見らるゝものと、
知るものと　知らるゝものとは一なり。
神神を見、神を知る。

——らいでう——

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

老

尾島菊

塗土のぼろ〳〵した圍爐裏の中に、瘤だらけの大榾がブス〳〵と音を立てゝ怪しく燻つた。木脂臭い煙りが濛々と立上つてゐる。

お爺さんは縞目も分らぬほどに、それも僅一張羅の綿入を引かけた背中を寒さうにして、皮膚がざら〳〵した、垢で黒く黄ばんだ兩足を灰に觸れるまで突き出してゐる。そして咽せるやうな煤煙の臭ひのする榾火の煙を、フウ〳〵と吹きながら落ち凹んだ眼をしばたゝいてゐた。南から入る二月の薄らした太陽の光りがお爺さんの白髮頭を鈍く明るく照らしてゐる。

七十四年――それは隨分短くない生涯であつた。けれども今更何うしてそんな長い月日が經つたか、思ひ出すことの出來ないほど、お爺さんの過去には幾多の苦い經驗があつた。

他人はお爺さんの現在をすつかり耄碌して了つたと云ふ。然しお爺さん自身では少しも耄碌したとは思つてゐない。只自分の體が意識の通りに動かなくなつたことだけは確に自覺してゐる。が精神は決して耄碌したなどゝは思つてゐなかつた。だから自分が耄碌したと云ふ他人の蔭言が耳へ入ると、勃氣(むき)になつて、

「俺が耄碌したッ　生意氣べい吐くねえ、今時の若い者が幾ら威張りくさつてもな、俺だけの苦勞を積んだものが一人だつてあんめえ。」

と白髮頭を振り立てゝ敦圉いた。

お爺さんの考では、人間のライフの價値は、歡樂の憧憬よりは、パンを求める努力にあると信じてゐた。さうしてお爺さんは自分の額に皺の數が一つ殖える度毎に、他の人達より多くの智惠を得、功を積んだと自慢してゐたのであつた。

「汝等がなんぼ利いた風な事を吐かしくさつても、俺の目から見ればまだ乳臭い赤ん坊だ、人間は何でも苦勞をたあくさんにせん事にや物にやなんねえだよ。」

と自分がさも物になつてゐる積りで、村の背兄達にいつでも斯う云つて經驗と云ふ有難味を說いて聞かせた。

御維新の騷ぎ、上野の戰爭などは、いつも榾火の煙に包まれる何よりの話柄であつた。禁帝樣だの公方樣だのは、いつも齒の拔けた口から唾と一緒に飛び出す言葉であつた。

こんな風に村の若い者達に對するお爺さんのプライドは、いつか時代に對する反抗となつて了つた。村の者達も終ひに口答へして面白くもないお爺さんの自慢話をだら〳〵と長く聞いてゐるよりか、成るべく對手にならない方が悧巧だと考へて引退つた。

「昔はいくさと云つたが、今は戰爭と云ふだ。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と云ふお爺さん獨創の解釋をも、
『どつちも同じこんだんべい。』
と下らぬ時間を費して反抗する者もなくなつた。
斯うして村の者達から次第々々に離れて行くお爺さんは、家族の者からも「隱居」と云ふ名の下に、今の村端れの一軒家に體よく葬られて了つた。勝氣なお爺さんの反抗は益々募つて來た。
『若い者の世話にはなんねえだ。』
と干乾びた手足を無理に動かして、倅夫婦の世話まで强ひて斷つた。
飽くまで經驗の價値を尊重するお爺さんのプライドは、村の者と遠ざかつて行くと同時に、現代に超越して來た。が、お爺さんも矢張り人の中で死にたい人間であつた。世をも人をも罵倒して止むこと知らぬお爺さんの心の底は、つまり世からも人からも自分の價値を多く見られたいとする要求に過ぎなかつた。惡口吐き〳〵世間の人が戀しく懷かしいのであつた。
野良がへりの若い者や、學校歸りの娘子供が、此一軒家の前を通る度に話對手に呼び込まれたが、皆笑つて逃げて了ふ。實家の方へたま〳〵遊びに行つても、倅夫婦や孫達はお爺さんが期待するだけの對手には迚もなつてくれなかつた。
『又例のお株が始まつた。』
と云つて誰一人お爺さんの話に耳を貸す者もない。お爺さんの心はだん〳〵淋しい方へ淋しい方へ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と引込まれた。さうして遂には拗ねて〳〵、癖んで癖みぬいた、恐ろしい呪ひとなつて了つた。けれど、年と云ふ長いタイムの壓迫は容赦なく此離れた寂しい苦痛を、お爺さんの頭に沁み渡らせた。老の衰憊は痛いまでお爺さんの身體に迫つて來たのであつた。

　七十になつても八十になつても、決して他人の世話にはならないと思つた勝氣な、負けず嫌ひのお爺さんは、此寂寞と云ふ苦痛を堪へて此先孤獨で超然と死を待つてゐられるか否やと自ら疑るやうになつた。それでもまだ人が戀しいだの、孫等が可愛いだのと告白することが出來ないほど、お爺さんの一生に附纏ふ剛情我慢の性格が離れなかつた。

　斯うやつて村の者からは益々遠ざけられ、悴夫婦に疎まれ、孫に當てつけがましい頑意地な嫁の態度を見るにつけ、今更人の手に縋つて何の樂しみもなく生き永らへるよりは、早く死と云ふ最後に近づく方がましである、と只さへ老の暗い心が餘計に冷たい〳〵地の底へでも引摺り込まれて行くやうに感じた。然しさうした死を求めてからは隨分久しいものであつた。が、いよ〳〵死の刹那を想像すると、世からも人からも離れた衰への生活にも亦何となく名殘りが惜しまれる。故に自分から進んで生存の糸をポツリと斷つて了ふ氣は出なかつた。

『もうそろ〳〵お迎ひが來べいに……』

　時に思ひ出したやうに斯う云つては深い溜息を吐く、其言葉の裏、其溜息の中には、まだ生きたい、と云ふ強い執着が滲んでゐた。お爺さんは人戀しい、と云ふ一念に據なく死と云ふ最後の斷案を思う

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て見たのみである。

凄いほどに意地惡く削け立つた頰！　人間らしい温味の失せた黄色のドス黒い皮膚！　動く餘裕のないまでに落ち凹んだ眼！　筋の張つた骨ばかりの手足！　それでもお爺さんはなほ生の巷を徘徊しようか、思ひ切つて死の斷崖に飛び移らうかと、其の選擇に苦しんでゐた。

「あゝ。」

最後にはもう此世に倦み果てたやうな、懈るいやうな欠伸をしてぶる／＼と身顫ひをした。春とは云へどまだ山の村は、底寒い黄昏の風に撫でられて、音もなく暮れて行く。

「此模樣ぢや明日も天氣だんべい。」

獨り言ちて榾火をフウと吹くと、黑い灰がぽつと立つて、とろ／＼と消えかゝつてゐた火が、急に嚇々と燃え出す。お爺さんは傍にあつた鉈豆烟管を取り上げて、穢ない箱の中から臭い粉烟草を捻り出した。吸ふ度にジュッと心持の惡い脂下りの音がした。

「お爺さん……」

と呼んでペタ／＼と尻の切れた草履の足音が聞えた。

「お春坊か、何にしに來たゞ、まあ這入いんな。」

物憂げんに振り向く。

「お母が、お事に餅ゝ搗いたからつてよ。」

上り框に腰をかけた小さな女の兒は、風呂敷包を解きながらさう云つた。破目の入つた丼に牡丹餅が七つばかりあつた。
「牡丹餅けい、どうだ汝はもう喰つたか。」
と、寂しさうに微笑みながら一つ摘んだ。
「もう澤山喰つて來たゞ。」
とお春は風呂敷を丸めて、愛想もなく早や腰を上げてゐる。
「もう歸んのか、もつと遊んで行かねえか、オイお春坊……」
お爺さんは狼狽した。
「お母アが暗くなんねえ中に早く蹄つて來いつて云つたゞから。」
と云つた時に、お春の小さな體がもう半分戶の外にあつた。
「さうか。」
お爺さんの眼は險しく光つて、語尾が顫へた。さうして孫さへも自分に懷かないのは、嫁の故意に依るものだと思つて、あんな嫁の尻に敷かれてゐる悴が憎かつた。
「馬鹿野郞、意氣地なし奴が……」
刹那に突走つた一語と共に、ボロ〳〵と豆のやうな淚が痩せこけた頰に流れた。
「此牡丹餅にも毒が入つてゐべい。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お爺さんは丼ごとカチンと力一杯地上へ投げつけた。丼は二つに破れて牡丹餅はコロ〳〵と砂の上に舞つた。

お爺さんは俄により以上の寂寞の悲しさが犇々と身に迫るのを覺えた。

「あゝ。」

懐へ手を入れて、憊然（ぐつたり）と首を垂れた儘、何時までも〳〵灯を點けないで暮れて行く闇の中に消えた。

――四五――三――一六稿――

執着

加藤みどり

電燈の許に自分は美しいカードを手にして茫然(ぼんやり)と夢見るやうな眸をしてペンの跡鮮(あとあざや)かな文字を追つて居る――十九歳の春――薄い肉色の地に桂の冠が上部に浮き出て居るカードに小さい字て、しかも菫色のインクで……何時かは必ず君が我を信ずる時あるを明言す――是は永久に我心に信念と戀の光とを投ず――と云つたやうな文が交つて居る。兩肱を突いた机の上には前日妹達と郊外の散歩の時、摘むで來た白菫が、白粉の空瓶に植えられて置いてある。金文字の詩集や、字も幼い書きかけの原稿が左右に亂れて居る。顏も手も胸も、はた少し亂して坐つた兩膝も青春の血汐と暖かさうな肉とに滿ち滿ちて、心の中は靜かな春の汐のやうに微に波打つて居る。――、噫！其のカード今の良人と斯うした生活をするやうになつたのは其のカードに依るのである、初めて美しいカードを見ず知らずの青年から受取つた時、自分は只微に心を亂されたばかりで、唯藝術と云ふ美しい誘惑の名に魅せられて、三四日の後葉書で返しをした。然し彼の力ある文字が何だか唯一時の戯言とも思はれなく永久(いつまで)も心にくり返されたのも斯うした運命に立ち至る前兆であつたのか。

久子は此の頃の病氣の爲め面やつれのした眼を閉じて我子の無邪氣な寢顏の方に向いた儘、不圖此

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の様な事を思ひ出した。

憂苦の多い此の頃の生活に、荒んで行く心にはゆつくりと昔の若かたつた時代を思ひ浮べる暇もなかつたが、今日ゆくりなくも押入を片付て、昔の戀文の大きな包を開いて見て、つくづくと自分等夫婦の辿つて來た戀の人生が偲ばれた。

高尚な文字や、酔はしげな言葉や、美しいカードや、小さい名札形の桃色や、空色の封筒や、それ等がどんなに自分等の間に種々の夢や幻を作つたかを思ふと、遂には今のやうな運命に陥るのにと思はずも淋しい微笑を禁ぜられなかつた。

女が希望の多い歡樂の多い處女時代から、人の妻となり、母となつて來た其の間の變遷、肉體のみてはない心の種々と變つて來た有様を凝乎と考へるほど辛い事はない。殊に久子は處女時代に於て今の良人澤野から戀されても、それに充分耽溺して戀の歡樂を得る事は出來なかつた。寧ろ嫌つて居て、其の執着の深い男の手からどんなに逃れやうと悶いたか判らないほどであつた。それが、遂に澤野の妻となつてから、男と云ふ者の冷かさを悟つて女らしい情愛の生じた自分の心を如何に悲しんたてあらう。

結婚して四年――久子は果てしなく自分等二人の運命の跡を辿つて行く。

久子は自分に深い決心を以て手紙をよこす澤野の振舞を疑つた。男と云ふ者は斯うした輕率な戀をする事が出來るのであらうか？僅に畧會の會員として雑誌「畧」の紙上で名を知つたと云ふだけて一

生を通じて我總てを捧げるとまで戀を囁く事がよく出來る。と久子は寧ろその心が不思議で些しも信じなかつた。而して自分の心を誘惑する魔だと思つた。澤野から手紙を貰ふ前にも久子には斯うした經驗があるので、或時など女の名を騙つて來た青年さへあつて、その時思ふさま辱めて歸した事もあつた。だから久子は澤野に對しても極めて冷膽であつた。それが却つて澤野の心を燃やしたので、澤野は遂に面會を求めてよこした。

久子は其の日一人家に居た。弟妹は皆學校へ行つて婆やは實家へ用事があつて歸つた留守を靜かな座敷に讀書に耽つて居た。既う春も終りに近く狹い庭の樹々の葉も漸く繁茂つて來て、締めた障子に一杯に影を映して居る。偶々子供の聲が隣の軍人の家から聽えるばかり、山の手の晝はまことに靜かなものであつた。

突然格子戸の開く音がした。おや既う婆やが歸つたのか知らんと思ふ間もなく

『大月久子さんは此方ですか？』との太い男の聲。久子は郵便かと返事をせずに、締め切つた間の襖を開けて玄關に出た。

『郵便ですか。』と云ひ乍ら障子を開けて見ると、其處に車夫らしい男が立つて居た。

『私大月ですが……』

『若い男の方が外に待つて居ますよ。』

『エ？男の方?!』と久子は驚いた。車夫の其の言葉がぞんざいで何たが辱められたやうな氣がして久

子は稍腹が立つた。

『何て方てす?』と詰問するやうな嚴格な調子て聞いて見る。

『澤野つて云ひましたぜ』

久子は此の澤野と云ふ名を聽いて急に胸が躁いて來た。

久子は故郷を遠く隔れて修業中の弟妹と家を持つて婆やを一人雇つて質素な生活をして居た。一家の主人は久子て、年若の妹弟の監督者も久子てあつた。其の責任を思ふと久子は決して輕率な振舞は出來なかつたので、今迄とても專心自らを重むじて他人から後指さされるやうな事はして來なかつた。道德的な舊い習慣に育てあげられて來た久子は最も純潔と云ふ事を神のやうに尊むで守つて居た。然し其の頃の思潮――主に文學の――に自然主義が流行して少からず久子は其の主義に迷つて居たのてあつたが、唯それは文學の上に於てのみて、平素の行爲に於ては何の疑ひ惑ふところもなかつた。

然るに今久子は男の訪問を受けた。のみか自分を呼び出す男の振舞が餘りに卑怯のやうな氣がして直ぐとは出て行かなかつた。が然し久子は何となく心の平均を失つて我を忘れて車夫の後から下駄を突かけて出た。道を直ぐ曲ると其處の電信柱の蔭から若い男が出て來た。

『貴女久子さんてすか。』

久子は直ぐ其の男の見苦しい風姿が目にとまつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「はい。私久子ですが……丁度私一人ですからまあ御寄り下さいまし。」

久子の心は既に亂れて居た。今迄に幾度も澤野が手紙で訪問してもよいかと聞いてよこしたが、其の度に何とか口實を設けて斷つて居た。久子は澤野に對して一種の好奇心こそ持つて居たが、別に戀しいとは思はなかつた。相ひ見ずに唯詩的な交際をして居るのが久子の若い心には嬉しかつたので、互に一度相ひ會すれば、今迄の美しい詩的な幻が消えて終ふやうな氣がして居た。が澤野はどこ迄も面會を求めてよこした。それが久子に一種の恐怖を與へた。殊に其の熱烈な文章や、始りから或信念を持つて居る言葉などが何だか自分を永久に苦しめるやうな氣がして今のうちに其の手から逃れ度いと心に思つて居た。が遂に訪ねて來た。其の執着の力を久子は遂にどうするも出來なかつた。

人に見られてもするのを怖れるやうに久子は澤野を自分の座敷に招じ入れた。久子は今迄坐つて居た机の前に斜に坐つて客を大きな本箱の前に坐らせた。澤野は同じく心が亂れて居るやうに唯默つて頭を下げたのみ、お互に氣まり惡るさうに暫く默つて居た。

久子は云ひ度い事があつた。何故公然と訪ねて來なかつたか。自分を車夫をして呼び出させると云ふ事は女を辱めた振舞である。若し妹か婆やが居たらどうするの？何も文藝の友として交るに卑怯な手段をとらずとものことだ。と久子は凝乎と男の姿に目をとめた。

其の風姿！素袷に、それも縞目の判らないほどに穢れて垢付いた袴は紬縞でボロボロに破れて居る。髮を長く亂して丁度黑い帽子を冠つたやう、顏のみは白く眸は神經質に輝いて居た。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

久子は斯うした男の姿を見て何だか普通の男と違ふやうな氣がした。若い男が女の前に出てやうとするに、丁度女が男に見せん爲めに身を飾ると同じやうに、男も風姿を飾るものとのみ思つて居たのが、意外にも斯うした有樣をつきつけられて一層男の仕打が判らなくなつた。と共に何事かを企てて居るやうで怖ろしく感じた。

其の日は間もなく澤野は別れを告げた。がお互に始めての面會を永久に忘れる事は出來なかつた。

澤野は久子の家を出ると直ぐ自分の下宿に歸つて小形の洋罫紙へ今日の面會の感じを書いて送つた。久子は其の手紙に男が故意と見苦い風をして訪ねた理由を解した。と同時に戀に對し、自分に對して餘程普通の男と違つた思想を抱いた居るのも判つた。

それからは一層親しげな手紙をよこすやうになつた。が久子は何だか澤野が矢鱈怖ろしく、親切に云はれれば云はれるほど其の手から遠く逃れ度く思つた。又澤野は久子から嫌はれない迄も好かれて居ない事を悟つて居た。殊に自分が女としての久子の心を試す爲めに始めての面會の時襤褸を纏つて行つたのが矢張女の憧憬を破つたやうな氣がして、一種の不安を感じたやうなものの、澤野はどこ迄も久子に對して永遠の希望を持つて居たので、そのやうな心の不安は容易に打ち消して居た。如何しても久子を永久の戀人としなければならぬと心に決して居るので久子が何かと逃れれば逃れるほどつきまとつた。

久子は自分は男を戀する事は出來ぬ。心の自由は父と云ふもの、弟妹と云ふものの爲めに束縛され

て居る。世間を怖れるのもそれ故てある。自分が新時代の女性として理想的の生活を送り度いは山々てあるけれど、此の心の自由が許されぬのが悲しい。自分は斯うして何の歡樂もなく純潔を尊むて、處女時代を最も淋しく尼のやうに暮さなければならないのてある。と云ふやうな事を云つてやつたが、澤野はそのやうな言葉に耳をかさなかつた。而して又訪ねると云ふ、久子は全力をつくしてそれを避けやうとした。何だか怖ろしい人——と云ふ感じが久子を常に捕へて居た。殆ど毎日のやうに來る手紙を既う家内の者は皆知つて居た。婆やなど蔭て種々な事を弟妹に噂して居た。

遂に久子は自分が一度失戀した女てある。君を戀する價値のない女てあると澤野に云ひやつた。而して其の熱烈な戀を醒まさうとしたが、澤野は却つて同情してよこした。

久子は澤野が餘り手紙をよこしたり、訪ねても來まじき有樣なので、婆やの居る時や、弟妹の居る間は常に不安を感じて居た。姉と云ふ權威、主人としての權威と信任が澤野の爲めに傷けられはせぬか、さうてなくも女世帶の人目に立つのに、人に知られてはどのやうな噂を立てられるか知れぬと久子は唯々澤野を恐れた。

既う春も過ぎて六月の青葉は、何處にも快く茂つて來た。そろ〳〵ネルも暑くなつた頃、澤野は一葉の寫眞を送つてよこした。久子は心を蕩して其の包を妹の手から受取つたのみて本箱の上に載せた。『姉さん寫眞でせう。見せて頂戴な。』と妹はせかむだ、其の聲に弟も他の妹も皆集つて來て遂に封を破られた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『男の寫眞よ。』

『あら、若い男の人ね、』

『まあ怖い顔して居るわ。』

流石弟だけは一寸見て出て行つて終つた。

久子はどうしやうもなかつた。

『姉さん知つて居るの、此の人を。』

『暗會の會員なのよ。』と久子は漸くに答へた。でも年はも行かぬ妹達は無邪氣であつた。直ぐ寫眞の事など忘れて遊んで居た。久子はその寫眞をそつと見て其の神經質な、何處かに意志の强いところのある何事も思ひ込んだ事は仕遂げずにはおかぬと云つたやうな男の面影に一層怖れを抱いた。

『此の様なものは返してしまをう。何の爲めに送つてよこしたのか。』と腹立たしくもなつて、その儘一度は本箱の抽斗の奥へ投げ入れたが、久子には思ひ切つてそれを送り返す力もなかつた。

久子は澤野を嫌つて居ても、戀を戀して居る乙女であつた。殊に若い女は詩に憧れ、戀を讃美して居たので、斯うして澤野の夢のやうな戀の囁きを聽き美しい詩を作る男の文を見るのが樂しくない事はなかつた。

白地を著る頃迄に澤野は二度久子を訪ねた。其の時久子が長編小説を書いて居て、それを借りて歸つた事もあつた。

久子には其の頃故郷の父の方から結婚の話が持ち上つて居た。東京の知人からも一二度其の話を持ちこまれたが、久子は少しも耳をかさなかつた。然し自分の運命を知つて居る久子は遂には人の妻になるのをまぬかれぬ事も悟つて居るので、何となく處女時代の終極が來たやうなうち淋しさを感じて、一室にのみ閉じ籠つて居た。而して澤野から來る手紙をも見る力もなく、總ての風習を破つて自由の天地に出やうと云ふやうな心も失せて、運命の神の前に首垂れて居るやうで一日一日と暑い夏の日を送つた。

　久子は幼くて母に別れてから一方ならぬ父の苦心を知り、賴のない弟妹の哀れさをも感じて居るので、自分一人の爲めのみを考へるわけには行かなかつた。故に自分は心にもない結婚をするべき運命を持つ身ならば、今のうちに斷然澤野と絶交しやうと決心した。而して其の意味を通じた。が澤野は全く其の頃、戀に狂つて居る青年であつた。斯く迄に自分を嫌つて避ける女を遂に呪はずには居られなかつた。君は妖姫だと云ひ、既に斷然思ひ斷つとも云つてよこした。がそれはほんの其折々の事で、相ひ變らず手紙で何かと怖ろしい自暴、自棄のやうな事を云つてよこしたかと思ふと、優しい言を云つたり、殆ど其の手紙を見ると澤野の心が煮え立つて居るやうに思はれた。

　澤野は遂に堪へられず久子に郊外の散歩を求めて來た。久子は最早男の執念深い手から逃れる事は出來ないと思つて、唯返事も出さず、手紙をもなるべく見まいとして居たが、何だか自分は澤野の爲めに迫害されるやうな氣がして、その狂へる男を怖れて夜など外出もしないやうにして居た。もとよ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

り共に散歩しやうなど思ひもよらなかつた。

夏の半ばの八月の始め、今迄ひそんで居た結婚の話が急に持ち上つた。父の友人が媒となつて久子は何時か知らぬ間に上野の繪畫展覽會で見合ひまでして居た。相手は××大學の生徒で、來年が卒業との事であつたが、久子は別にそれをどうしやうとも考へなかつた。運命の神の前に首垂れた女――と云ふ感じを自覺して、淋しい悲しい日を送つて居たので、其の話に熱注して居る知人に一さいを任して置いた。

妹二人は歸省した。間もなく父から急に歸れと云つて來た。丁度脚氣の氣味もあつたので、久子は故鄕へ歸る事に決して、その留守居に故鄕から叔母が來る事になつた。

久子は澤野から逃れる事が出來るやうに思つて、大方話の進むだ結婚の事を通じ、且故鄕へ歸るから最早御目にもかかるまい、交通もしまい、と悲しい文を書いて送つて其の儘故鄕へ歸つてしまつた。

久子は此處まで思ひ出を追つて來て今更のやうに人の運命の夢なるに驚いた。其の時きりで澤野と絕交したら如何であつたらう××大學の△△氏と結婚したら今はこんなになつて居るであらう? あゝ何事も定る因緣だと眸を閉ざして又も思ひを辿つた。

子供の寢息は微にして、平和に夢見て居る。鳶がヒヨロヒヨロと鳴くのが何だか春らしく、雀が二三羽鳴き交はして居る。電車が嵐のやうに過ぎて行つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

久子の結婚の話は餘りに長引いたので、それに種々父親の考へとも違つた事が生じて思はしく進まなかつた。

久子は平和な田舎に歸つて來て心が落ちつくと同時に「自分」と云ふ者を考へて來た。此の儘犠牲となつて何のなす事もなくて死んで了ふのがいかにも惜しい。生れ甲斐がない。學問した甲斐が無い。どうしても自己を發展させて立たねばならぬ。自分に人間としての天職があるなら其の天職を全ふせねばならぬ。自分は唯狹い「女」と云ふ名、娘、或は姉と云ふ名に縛られて此の儘朽ち果つべきてはない！と考へ直した時、自覺の光は久子の心に滿ち滿ちた。遂に久子は自分の心を父に打ちあけて、強いて結婚せよとなら、少しでも自分の理想に近い良人を持たせて呉れと賴むだ。幸に父は承諾して兎に角お前の知つて居る先生に賴むで置くがよいと云ふ事になつた。

久子は稍希望を抱いた九月の中旬頃東京に歸つて見ると、又澤野から手紙が來て居た。忘れて居た不安が又生じた。久子は決して澤野と結婚しやうとは思はなかつたので、其の手紙を見ると一度逃れた身が、又追ひかけられて居るやうな氣がして、それでも其の手紙を開いて見た。

澤野は戀の煩悶をやらん爲めに大切の書籍を金子に替へて佐渡に迄漂泊して行つた。而して小さい島に海の音を聽き乍ら泣かんとした。ところへ東京から附箋がついて久子の手紙が來た。開いて見ると絕壁に立つた自分を突き落すやうな悲しい手紙であつた。其の時全く失望して一人夕暮の海濱を逍遙つて唯神に久子の未來の幸福を祈つた。今迄自分がどこ迄もつき纏つたのを悔いたが、それは唯々

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

久子を戀する餘りて決して惡い考へを持つて居たのではなかつた。失戀の苦痛を泣き乍ら自分は久子の爲めに唯祝福を神に祈つた。暫く佐渡に漂泊ふて東京へ歸つて來たのは八月の末て、早速久子の家の樣子を見に行つたが、久子が居ない筈だのに名札も家も其の儘になつて居る。それなら久子は故鄕へ歸りはせなかつたのか、自分を欺く爲めの手段だつたのかと今迄久子を信じ、同情よせて居たが全く呪はずに居られなくなつた。何故君は左樣まで逃れやうとするのか自分は何處迄も君を追ひまわす、と云ふやうな事を長々と書いてあつた。

久子は始め佐渡に漂ふて、自分の結婚の知らせて受けて、黃昏の海邊に自分の爲めに幸福を祈つて悲しい戀の死を泣いて吳れた男の心に思はずも涙ぐむだが、最後に至つて餘りに疑ひ深い男の心を憎くまずに居られなかつた。

それから二月後十月の末頃、突然に澤野の手紙を持つて友人だと云ふ某雜誌の記者が來た。而して眞面目に澤野の戀を語り二人の未來の幸福を誓つて結婚を奬めた。久子は此の熱心な言葉も、澤野の有樣をも聞いて今迄にない同情の念が湧いて、話に依つては結婚してもいいやうな氣になつた。

斯うした感しが遂に口火となつて二人の運命は定められたのであつた。

久子はホッと吐息をして目を開いた。遂に澤野の妻となつて以來の苦しい生活——戀の墓場たる結婚に依つて男の情は時と共に冷えて行き、女の情は妻として穩かに燃えて來て、果ては今度は逃れる

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

事の出來ない生の執着となつて了つた。澤野は夢のやうな若い世界から實世間へ突き出されて其の妻を携へて世に立つに如何に苦しいかを悟つては煩悶、懊惱、さんざん久子を苦しめ、共に泣いて來た。時としては一度手に捕へた女を突き放さうとも試みたが、丁度手に着いた飴と同じやうなもので、今にどうしやうもないのである。久子も一度「自己」を悟つた心に妻と云ふ枷にはめられて苦しんで居た今迄が馬鹿らしくなると、立つて女の意地を貫かうかと思ふ時もあるが、それも今迄に斷然たる所置も出來なかつたのであつた。

　子供はパッチリと眸を開いた。而して其の黒い眸を動かして居たと思ふと、母の顔を見て半ば起き上つた。

　時計を見ると三時過ぎ。外は暖かさうに日が照つて小鳥が頻りに鳴いて居る。久子は寢起のいい我子を脊負つて外に出た。

　ああ春だ。既うすぐ春が來るのだ。と暖い光を眞面に浴びて田の畦の方へ足を向けた。子供は脊中で喜々と喜んで居る。

　不圖久子の心に若々しい血汐が上つた。未だ澤野と結婚しない前、唯父の許諾を得て自由に交際の出來た間はよく二人で東京の郊外を散歩したものであつた。その頃は氣も若かつたし、文學に對しても充分な憧憬を持つて居たし、殊に自然に對しては幼い頃から最も醉つて居た。彼の武藏野の何とも云へない大きな清い自然――それを久子はいかに憧れたであらう。初春の暖い空氣の帳に包まれた愛

の感じを深く深く味つた。其の感じが今も今久子の心に甦つた。自然に對しても心から酔ふ事が出來なくなつた心を悲しんで居たが、今矢鱈心が空の雲のやうにふわふわして來て、胸が時めいて來た。

霞がこんもりと四方の山を包むで居る。百姓家の藁葺の屋根の彼方から咲きかけた梅の枝が見えて居る。小雀が頻りと其の枝で鳴いてゐる、俥の轍がころぶやうに過ぎて行くと、其の後から牛の眠いやうな鳴き聲が緩かに消えて行く。

久子は斯うした感じを永久も心にしつかと抱いて居たいやうな氣がする。せめて良人の歸るまで、而して斯うした自然に對し、又生に對しての若やかな心を持つて今夜月下を逍遙して見度い。夜の梅見もよからう。行く。必ず今夜梅見に行かう。良人と共に、而して彼の頃のやうに西洋料理でも食べ、紫の酒でも飲むで見やう。

田の畦を渡つて清い小川の岸に出て我子に若芽の出た川柳の枝を折つて持たせた。而して茫然水の流れを追つて居た。小さい川魚が草の蔭にチラチラして居る。畦には既う若芽が出かかつて居る。

久子は夕飯を濟まして外に出た。七日頃の月が軟い光を投げて居る。風はそよともなく、平和な夜である。久子は良人の歸るのを心待ちに待つたが八時になつても未だ歸らない、漸く九時少し前に歸つて來た。

「御飯は？」と聞いて見ると、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「食べた。」と云つて直ぐ行火に這入つてしまふ。
「まあ今夜は御馳走があるのに、」と恨めしさうに云つて久子は我子を抱いた儘矢張行火にあたる。
久子は今迄思つて居た事を云はうとしたが、疲れたやうな、冷淡な良人の有様を見ると急に心のときめきも消えてしまつた。同時に常も良人に向つて感ずる不安が興る。
常も歸つて來ると子供が起きて居ると何とか言葉をかける良人が今宵は默つて、顔を掛蒲團に埋めてしまつた。
「寢やうよ。」
「貴郎は歸つて來れば寢やうよね。」と久子は淋しく微笑する。
「家へ歸れば寢るより他ないさ。」
「でも……」
久子は不平がつい口迄ついて出た。何故家庭の樂しみを計らないのか。歸れば面白くない顔ばかりして居る。とそれからそれと不平が幾つとなく頭を上げて來る。
「貴郎、坊やを見て下さらねば蒲團も敷けないわ。」
「捨てて置け!」
「まあ酷い。」
「お前は一體意久地がないよ。」

久子は眸を見張つた。
「何故？」
「獨立する位の覺悟がないからさ。子供にかまけてばかり居るんじやあないか。」
「覺悟はちやんとあります。さうなる時がくれば……」
「女記者になれと云ふのに、やうもなれないて。」
「でも女記者になるにはよく〳〵考へねばなりませんわ。獨立しやうとなれば、唯自分自身が力てすからね、前途もよく考へた上てないと、」
「意志が弱いんだよ。」
「でも貴郎は何の爲めに女記者となれと仰しやるの。」
「修養の爲めさ。」
「その修養が眞當に修養になればいいてすけれどね。」
「お前は世間を知らないから駄目だよ。今書いて居る長編を見たつてさうだ。」
久子は此の良人の言葉を聽いて、口惜しさうに口を結んだ。唇は震へて居る。
「女記者の口があるんだ。お前の決心一つてどうてもなる。」
「子供をどうするの。」
「子供などどうてもなるさ。問題はお前の意志一つだ。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「それなら貴郎は私を離緣する氣なんですね。」

「離緣しなくつともお互に活動すればいゝじやあないか。」

「駄目、駄目、又弊害が出て來るわ。男つて者は女に對して、無理な要求ばかりするんだから。一方男性的たれ、一方女性的たれ、外に出て活動した上に家の中では從來の女と同じやうな事を要求するんですもの。全く無理だわ。一つの性を備へて居る者が、どうして兩性の特質、職分を兼ねられるものですか。」

「兎に角もつと活動的でなければ駄目だよ。何が出來るものか。」

斯う云はれると久子は全身の血が沸き立つほど口惜しい。誰がこのやうにした？青春の氣も何も消えて唯殘るは深い痛苦のみである。理想を追ひながら端から破つて行くのは誰である？妻と云ふ者、母と云ふ者として人一培の要求をし、其の上尚ほ獨身の女に對して有つやうな理想を求めて、それが滿足出來ないとて朝に晩に責める、あんまり慘酷だと久子は既う目に一抔淚を浮べた。

「でも私は何も女記者にならなくつとも修養の道はあると思ふわ。私には又私の理想もあるんですから。それに貴郎が私に何處迄も修養せよと仰しやるんなら斷然夫婦の關係を斷つて下さい。左樣せねば私人の妻としての活動はどんな事しても自由に出來ませんから。」

澤野は久子の此の言葉を聽いて默つてしまつた。

久子は失望と怨恨の眸を良人の顔に凝乎と注いだ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

すると暫の間思つて居た昔の事が不圖心に浮ぶ。

怖ろしい執着！二人の間には今迄とても幾度も刖れるやうにまで至つたのに今だに斯うして居るのも目に見えぬ執着の力が二人を放さないのである。而して種々と苦しめて居るのであると感じた。

——完——

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

湖畔の夏

茅野雅

「姉さん。」と云つて、豊ちやんがいきなり、肩の處へしがみついた。男らしい、張りのある涼しい眼、もみあげの處など兄さんの道さんそつくりである。姉の千代ちやんは嬉しさと、恥しさとが、こんがらがつたと云ふふうに、默つて紅いリボンの掛けてある頭をさげた。ここの婆やは、裏口から箒をもつたまま出て來た。

「やれやれお孃樣、舟でござんせんでな。」といふ。

「いいえ、停車場で聞いたらね、當時で、船はあるまいと云ひましたから、車で。」

「それはまあ。」

婆やは箒を、側の樅の木の枝にたてかけた。そうして、襷をはづし乍ら、時候の挨拶をしはじめる。無口な、夏子は、頭ばかりさげてゐた。去年、見た時と寸分變つた處もない。眼のぐるりの皺の寄り具合、頰肉のそげた處、少しまへ屈みになつて、膝のあたりに、手を置いた、枯木のやうな姿勢が、どう見ても彫刻のやうに思れる。夏子は千代田草履を脱ぎながら、

「お叔母樣は。」

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

とたづねた。
「それが、あなた樣。けふおこしになるちうて。」とまた話が長くなりさうなので、豊ちやんは、夏子の手を、ぐいぐいと力まかせに引張つた。
「母ちやんは、爺やと新家へ行つたんだい。さあ姉さん。」と急き立てて、玄關の側の小座敷を通りぬけて、長い廊下を右に曲つた二つ目の座敷へ飛び込んだ。千代ちやんも、夏子の糸で編んだ、袋をもつて、つづいて入つて來た。
此部屋は、豊ちやんと、千代ちやんと、の遊び場にきめられてあつた部屋である。あけはなした、縁側の欄干を透いて湖の水が紺青色に光つてゐる。長い暑くるしい汽車や車にゆられて來た夏子は、つと息をついて、縁側を脊にして坐つた。床の間にはどこか間延のした顔の一尺位の京人形が、硝子箱に入つてゐる。その横に、博多人形や、伊豆倉人形の額に、疵のあるのなどが、少し列を亂して並んでゐる。壁際に寄せてある机には、カシメヤのオリブ色の布がかかつて、其上に春日塗の硯箱が置かれてゐるのを眺めてゐた。
「此の机も、硯箱も、兄さんから今度いただいたの。」と千代ちやんが話す。
「そうしてね、兄さんから奇麗な貝も貰つたの。」
机のひきだしから、いつやら夏子が、藤色の縮緬の切で張つてやつた、箱をだした、千鳥の形の蓋をとると、小さいやさしい貝殼が八分目程入つてゐる。底に敷いた靑い絹が、草の葉のやうに食み出

してゐる。千代ちやんは白い小さい指先きで、一寸貝殻に觸つてにつこりする。豊ちやんは横からうらやましさうに、

『僕も鎌倉のお土産に澤山（たんと）貰つたんだけれど。』と云つてゐる。

夏子は、此話の中にも云ひしらぬさびしさを感じた。その兄さんも叔母さんと一所に新家へ行つたのであらうか。けふ來るのは知つて居て下さる筈だのに、何故待つてゐて下さらなかつた。それとも、いつかの話の事ではなからうかと思ふさへ胸がふたがるやうにおもはれて『兄さんは』と問ひかけた時、

『姉ちやんにもあげるつて、兄さんが貝殻をとつてあるよ。』

豊ちやんが云つた。夏子の云はうとしたことは、喉の中で消えて了つた。

婆やが何時の間にか運んで置いた、可なり大きな袋の中から、着更への浴衣を出して、其の序に豊ちやんの土産の玩具の望遠鏡を出した。豊ちやんはいきなり箱を開けて、

『姉さんこれはなあに。』と云ふ。

『其は遠眼鏡ですよ。』と云つて、玉の處をくるんであつた紙を取つて渡してやつた。

やあ、嬉しいな。僕二階から湖を見やう。爺やの船がくるかも知れない。』聲の終らないにもう飛び出した。

婆やがお茶を入て來て、又叔母さんの話をする。今日はあなた様がお來しになるといふので、一寸

買物をしに町へ行つて歸途通路だから新家へも廻るつて、最う遲くてもお歸る筈。『新家には道夫樣がおゐてるから。』と湖をすかし見ながら、婆やは斯うつけたした。

湯に入つて居ると、豐ちやんが驅けつて來て、

『姉さん、姉さん、來たよ。望遠鏡で見てゐると、能く見える。』

と云ふ。

『さう一所に行きませうお待ちなさいよ。』

『ああ一寸先きへ行つて待てるよ。』と云乍ら、足音は遠くなつて消えて了つた。夏子も急いでお湯から出て、裏の木戸口に立つた。足許から湖の水が續いて、ひたひたと寄せる浪が、生ひ茂つた、葦の根がたに低い音を立てて消えてゆく。小さい魚が、時々ひらり、ひらりと、四五寸程も飛び上る。夏子は、まぶしさうに手をかざし乍ら、沖合を眺めた。船は三艘計り見えてゐたが、何れが爺やの船とも分らなかつた。黑い板塀に添うて溝萩の花が、たよたよと咲いてゐる。夏子はそれを毟つては、秋らしい程澄んだ水に投げすてた。一いニふ三いと小さい花を數へ乍ら、何んとなく寂しい心になつた。あの船の近づくのが嬉しいやうでもあり、どこやらにまた春の夜の夢の消える時のやうな、儚さがしみてゐた。

賑かな夕食がすむと、叔母さんは林檎をむき始め乍ら話はじめる。

『これは未だ少し早いのだけれど新家で道夫がもつて行けつてすすめるものだから貰つて來ました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

夏ちやんは好きてせう。』夏子は恥しさうに笑つてゐた。

『母ちやん僕の方がもつといいのだよ。』

『はいはい』と叔母さんは笑つてゐる。

『そうら又慾張り。』と千代ちやんは聲を出して笑ふ。

そこへ小作の娘のお由と云ふのが緣先きから、

『今晩は。』といふ。透してみると小脇に笊のやうなものをかかへてゐる。

『昨日は又無理なお願ひをして有難うござんした。お蔭さんで桑を買ひましてなあ。』と云つて大きな白瓜を五六本、黑光のする程拭きこんだ緣の上へ並べる。叔母さんは坐つたままで、

『ああお由さんか、そんな心配をしなければ可いにねえ、一服お茶でも飲むでおいて。』

『有難うござんすい。道夫様はお變りもござんせんかい。お馴れんことて、お弱りでござんせう。』

『ええ、今日も一寸行つて見て來たが、別條も無いやうだよ。』

『それはまあ、何よりてござんすい。それでは、おやすみなさんし。』とお辭儀をして出て行つた。それからお由の家の話になる。彦作といふお由の父親が頑固者で、お由の妹のお粂といふのの婿と喧嘩をした揚句、嫌がる娘を無理に取戻して來た。それがもとであらうか去年の夏頃から、お粂は少し氣が變になつた。別に取留めのないことを云ふのでもないが、花さへ見れば手折つて髮に挿すといふ。親兄弟にも一日中默つてることが多い。それて居て小聲に何か歌のやうなものを始終歌つてゐる。氣

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

が向きさへすれば、仕事は人並にするのだといふ。夏子はそんな話を聞き乍ら何となく道さんの身の上や、自分のことやを思つてゐた。併し道さんのことは一言も云ひ出さなかつた。叔母さんも一言も話さない。

此晩は前に道さんの部屋であつた、次の間で千代ちやんと、豊ちやんの間に狹まつて寢た。

次の朝早く夏子は起きた。少し青みを帶びた、腫れぼつたいやうな、眼をしながら、二人の兒供を伴れて、湖水の周圍を散歩した。澤瀉に似て淡紫のものはかなさゝうな水草が一面に咲いて、小さい時から見馴れた景色ではあるが、今朝は殊に身に泌みてなつかしく思はれた。

漸く親を見わける程の、稚い時に母は思ひかけぬ、災難で世を去つたので、兄弟もない夏子は叔母の手に、七歲迄育てられた。斯う云ふ具合で道夫とは、兄妹のやうにもし、夏の休暇等には、涼しくもある處からこの叔母の家で暮す事が多かつた。其れに道夫が東京へ出て居た折も、夏子の家にゐたのであつた。併しそれは二年程で、病氣のために道夫はとうとう學校を止めて、又湖畔の人となつたのである。

夏子は煙るやうな髮の毛を手で撫で乍ら、色色の事が思ひつづけられた。豊ちやんはいつものやうに、出るだけの聲で唱歌を謠つてゐた。

簡單な朝飯もすんで、叔母は針箱を出して、小供の浴衣の肩上げをしてゐる。衣桁にかけてあつた、叔母の單衣をたたみ乍ら、夏子は東京の評をしたり近頃父が酒量の多くなつた話をしてゐた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「姉さん、僕と一所に新家に行かないの」と豊ちやんが飛び込んで來た。
「さあどうしませうかしら。」
「夏ちやん、行つてお出だたら何う。買物しながら爺やも町へ行くと云つてたから。今からでもお晝飯には歸れますよ、そうして道夫も、あんたに一度きておくれつて。」
と、叔母さんもすすめる、道さんの名の出ることは昨日から、幾度もあるけれども氣になることがあるので此方からは何にも聞かなかつた。伯母さんも云ひそうにしては、また思返したやうに默つて了ふのである。夏子は暫く叔母さんの顏色を見て考へたが、とうどう行くことに決めた。
裏の木戸から、石段を三つ四つ降りると、船が横づけになつて居る。爺やは最う棹を持つて居た。船の中には別に二人居た。一人は近所の百姓の女房らしく、一人は三十格好の役場にでも勤めて居さうな男である。夏子の顏を見ると丁寧に挨拶をした。
「誠に御厄介でござんすい。お邪魔様でなんし。」
豊ちやんは、舳の方に坐る。外の二人は艫の方にゐた。夏子は豊ちやんに向き合つて坐を占めた。
千代ちやんは木戸口に立て人達を見送つた。
「あのね、豊ちやん昨日、母ちやんから賴んで置いた、お手本を兄さんに貰つて來て頂戴よ。」
「あすの七夕には僕も書くんだ。」
「忘れては嫌。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「あゝ。」

考へて見ると、今日は八月五日である、此邊の年中行事は、正月の外は凡て一月後れてある。去年の七夕には、道さんも一所であつたと夏子は思つてゐた。

舟が最う出やうとする所へ、一人の女が小走りに庭口の方から急いで來た。右の手に淺い桶のやうなものを持つてゐる。目の荒い網の中に、硝子の金魚入を十許り入れたのを左にさげてゐる。右手の荷物をそつと左手に持換へて、其手で姉さん冠にして居る白い手拭を取つた。

「誠にお氣の毒でござんすがなん、今其處で聞きますと、お家さんで、舟を町の方へお出しなさるちうて、何うかお邪魔さんでもなん、一所に連れて行つて頂き度いものでなん」といふ。

爺やが、「さあ乘んなさろ。」と承知すると、きりきりと、脚絆でかためた足を舟緣にかける。これは町から此邊へかけて賣り歩く金魚屋の女である。豊ちやんは手桶の中を頻りに覗き込む。大きいのや小さいのや混ぜて七八十の金魚がひらひらと泳いでいる。

今日は晴れて、風もない。町を懐に抱いて居る山山が、くつきりと黒く映る。水は靜で油を流したやうだ。時時水鳥が飛び立つ。金魚賣りの女は豊ちやんの氣に入りさうな昔話を聞かせて居る。役場の男と女房とは村中の誰彼の噂をして居つた。

「なあ、お爺さん、おうちの道夫様は新家でお嫁さんを貰ふつて云ふのは、眞(ほんと)のことかいなん。」と女房が大聲でいふ。爺やは向ふの山の肩の處からむくむく頭を出して居る、白い雲を見つめたまゝ、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

を押してゐる。

『さうさなあ、私も確かな事は知らんてなあ。』

此話はこれで終つた。夏子は耳を押へたい樣な氣がした。善い事でも惡い事でも道さんのことを人が話してゐるのを聞きたくない。是丈けのことを聞いたのが、心に汚點を打たれれやうて、厭な氣持になつた。夏子は舟の中て今にも涙の零れさうな、瞳を開けてぢつと金魚桶を見てゐた。ギイギイと櫨のなる度に、身體が微に動く、耳の下をころころと水の流れる音が、魂を遠い空に流して行くやうだ。舟を上つて、十町許りゆくと、新家に着く。戸を開けると桑の匂がぷんとする。薄暗い廣土間には桑の葉が一杯に廣げてある。二階も下も蠶の棚が並んでゐて、蠶の桑を喰ふ音がむりむりとしてゐる。人人は皆眞黑になつて働いて居る。棚から籠を降して、蠶尻を變へるもの、新しく桑をやるもの、蠶糞を庭に運び出すもの、全く戰爭のやうである。女連は大概白い手拭を姉さんかぶりにして、細帶を卷つけてゐる。夏子は、人人に、それ〲挨拶を濟せて、土間をずつと奧庭に通つた。ここには小さい池がある。池の周圍には月見草が一ぱいに咲いて居る。厩には馬もゐない。桑の運送に使はれて居るのであらう。其側に蠶糞が堆高く積んである。其に日があたつて、むれるので蒸し暑い臭氣がして堪らない。道さんは山へ桑摘みに行つて晝過てなければ歸らないと云ふ。豊ちやんは、つまらなさうな顏をして『姉さん歸らう。』と云ひ出した。手には最前金魚屋の女から貰つた硝子の玉を持つてゐる。新家の叔母さんは急がしい中て茶を入てくだすつた。林檎も取つてくだすつた。道さんが昨夜寫

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

して置いてくれた七夕の古歌集も出して貰つた。夏子が道さんのお土產にとおもつて持つて來た絽ざしの名刺入は衿の間に入つたまゝ又湖を渡つた。

草葉に置いた白露を集めて、七夕の星に捧げる歌をかくために、千代ちやんはギアマンの小さい、コップを持つて露を集めに行く。夏子も後からついて行た。丘には秋草が澤山咲いてゐる。桔梗、なでしこ、女郎花、男郎花、山百合、松蟲草、野菊、金蓮花、まだ名を知らぬ花が澤山ある。千代ちやんは下にコップをあてがつて葉をゆする。小さい露が小さい露と集つて大きな粒になつてころりと落ちる。明神の森まで來た時には最うコップに半分も溜つた。

此森には大きな楓がある。靑靑した葉が朝露を振つてそよそよと搖いてゐる。夏子はその下葉をむしつて噛んて見た。うす甘い、そこはかとない愛が心をひきしめる。啄木鳥がすぐ近くの木の下で、こつこつ云はせてゐる、夏子は藁草履の尻のべたべたと音を立てるのを氣にし乍ら、そつと側に寄つて見る。靑い翼を行儀よく二枚背に重ねて、腹這ふ樣に、樹の幹に喰ついて赤い頭をもたげては、こつこつと打つ。其音が遠く湖の眞中から來るやうに思れた。その音を聞きながら、夏子は身も心も、湖の底に引きこまれるやうな心持ちになつて、涙かほろほろと、零れて來た。自分の運命と云ふものが、明かに豫感されたのてある

――完――

習作の一

杉本正生

岡崎の美術館へ文展が來たと言ふ二日目で秋江はふと行つて見る氣になつて、秋江のつねて別に覺悟も何も爲ないでぶらぶら河べりを歩くやうな心持ちで出掛けたのである。それでも這入つて見ると、一つ一つの作品に對しては踊るやうな胸を押へきれなかつたのもあるし、寂しくつてほろほろ泣き出したく感じたのもある。

休憩室で喉を潤はした時は、空になつて行かうともする近來の淋しい腦に快よい逆上を感じてゐた。秋江は其處で知人のいろいろに逢つた。日本畫の偉い人、圖案派の人、而して遂々一番終いには、同志社の專門部を今年出たといふ岸にふと逢つたのである。

『まあ、岸さん。』

から秋江は、岸の青年盛りを見せるやうな背高い肩の邊りに眼を迯らせて、

『隨分お久濶てしたわねえ。』

さも追憶を感じてゐる様な眼をして言ふ。

『えゝ。でもお宿を詳しく知る事が出來ないものですから。』

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

然う言ふ岸の言葉を聞くと此方からも今日までの疎遠に對して何事をか辨解しなければならない樣な氣もして、而して其長い二年を隨分貴男を思つて苦しみました、といふ意味も表はしたかつた。でもさうした簡略な言葉は直ぐは胸に浮びはせぬ。

「一緒に參りませうか。」

さう岸は言つて、秋江に讓るやうな歩調りを見せながら日本畫の方へ導いた。

岸も何時か優美に變つて行く人であつた。些と振り向く襟頸の邊りも、男子らしい肉體の發育が秋江の眼になつかしく映つた。二年以前の學生らしい、若々しい印象を破られる樣な氣が秋江には少なからず珍らしい。

若い二人、然うした意味から二人は畫について言ひ會はうと思ふ樣な事をも、生眞面目な眼で紛らさねばならなかつた。岸は羽織の襟先きを下に摺らせるほどに腰を僂めて、精細な筆の一線をも見逃がさぬ人のやうに見て廻つた。

岸は若いに似ず、沈靜な深い眼を有つてゐる人で、三年のむかしから、此人の批評の方にたけてゐる人だと秋江は信じてゐるものだから、今日も恁う力強い言葉を撰んでは、非難してゐるのが秋江には微笑まれる。

二人は公然としたふりの中に人の眼を偸むやうな心持ちを懷いて外に出た。

已う午後も三時を過ぎてゐる。冬を迎へやうとする東山の裾の町、努力を秘めてゐるやうな中に、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

冷え冷えしい一種の浮は寒むい流れが漲つた京都の晩秋、そうした心持ちが二人に犇と逼るやうに覺えて、輕るく口を利かうとはされなかつた。
『卒業なすつて見ると、何うですか。』
已う二人は大極殿の前道に來てゐる。
日光を收めた雲の影が、大殿の青い家根に差かゝつて、寒さに冷たくなつてゐるやうな朱の柱が靜かに古びを待つてゐるやうに思へる。
『卒業しても、同じ事ですね。』
岸は夫れ以上言ふのを厭ふやうにして、夫れでも其面長な優美な顏には微笑でもゐる。
『此儘宅へ祓居て下さいな。』
乞ふ人のやうに秋江は言つて見た。
『お宅へですか。さうだなあ。』
秋江はスカーフを掻き合せる手にふと岸の袂に觸れた。薩摩絣の羽織は、寒い風を受けて冷たくなつてゐる。夫れでも男の側といふ樣な感じが其觸れた指先きから身內の總てへ傳つて行くやうに、秋江は女らしく俯いてゐた。
『京都にも氣の利いたカフエーがあると好んですがね。』
岸は何事をも感ぜぬらしく恁麼事を言つて居る。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『何處かへ行つて見ませうか。』

秋江はさも思ひきつたらしく眼をあげて恁う言つた。おそれ、さうしたものは已う秋江にはない。岸も顧る間もない樣に、行つて見やうといふやうな輕い氣分を見せてゐた。

二人の登つた坂には、已う冬らしい木の葉がちりちり舞つてゐて、御支度所と書いた家の中の透かされて見えるのも淋しい。古い威嚴を垂れてゐるやうな智恩院の山門の前をも二人は無言で通つた。

能動的な變遷の縦いた公園の掛茶屋だとか、昔の俤も止めてゐぬ料理屋のやうなものを岸はさも感じた人のやうに、寥しいといふ。

岸は大谷道を過ぎて翠水亭の枯々しい門の中に秋江をともなつた。

『おいでやす。』

恁う二人連れ、といふ事を普通の意味の粋に解してゐる仲居、其前では岸は態と平然として輕い口を仲居には見せてゐるけれど、秋江は成可く顏を見られぬ位置に身を座はらせたり、さうしてはゐながら、絶えずから女らしい何の價値もない不安に襲はれてゐる事を自から嘲笑つても見なければならない。

『何でも好ですから。』

岸は仲居に誂へてから安心した樣に秋江の方へ向つて悠然として坐を崩した。

『此麼處へ貴女と來たのは初めてです。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

岸はふと、斷れては續く秋江との交際の形を、追憶の中から拔き出して見るやうに言ひ出だす。

「本當にねえ。」

恁う秋江は言つて、寒い處を歩いて來た俄の温みを額に感じてゐるらしく、左の手て撫てて見た。金の指輪、それが女の匂をさせるやうに岸の心を惹かうとする。

「何故あんなに御無沙汰したものですか。」

秋江はまた、極、心の平調を保ち乍ら恁うして岸と逢へるといふ事が、今の二人の内容的な生活が爲すわざとは思はないで、恰も過去の敎訓的な周圍に囚はれてでもゐたやうに感じられて、而して夫れが過去の自分に對して憫むやうな嘲るやうな心持にもなれる。

只何と言ふ譯もなく過去の戀と言ふ樣なものがあまりに醇化されてゐたやうに思へば思はれもする。美しい空想に深い信念を立ててゐたとも言へば言はれもする。

「惡い意味ぢやなかつたんですがね。」

岸も少なくとも、單純であつたと言ふ事が無價値にも思はれ、愚かしくも思へたのだらふと秋江は會心らしい笑を見せた。

あの時と秋江はふと思ひ出した。川端通の暗い夜、自分を誘ひ出した岸が、何處か恁う底痒いやうな擧動を見せ乍ら、

「此まゝ、何處かへ旅行したい。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

から焔ゆる人の言ふ樣な事を言つて困らせたのを思ひ出させた。
「最後迄許す、夫れは貴女の最初の意思を遂げて行くやうなものです。」
恁う又、あの時言ひ出した岸は、あの時代の尤も高潮になつた時であつたと思ひ出す事が出來る。肉を逼る男を、何うして拂ひきれたものか、拂はれてゐる男の方も、それでも付き纏ふてゐる女を捕へ限らふと爲なかつたのは何故だらう。あの時分の消息は、已う心の内には朧ろになつてゐる。
而して男の要求を充たしもせずして單純な戀は隨分長く續いたものである。其内双方の氣分は引く紐のたるむやうな形であつた事もある。嚴正な家庭の爲に只僅かの對話さへも許されぬ機が二人を遠けるみちともなつた。
「あの後、私は何うなつてゐたと思つてゐらつしやいます。」
恁う言つて、別れてからの苦い感情を言はうとする順序を作つた。
「さうですね。」
岸は品の好い口元に淋しく笑つて、考へ及ぼす樣な眼付をした。でも續いて何も語らうとは爲ない内に、仲居の運んで來た汁物が二人の話を妨げるもの丶樣に並べられて行く。
少時は無慾の人のやうに箸を動かせた。
「此れから京都もお寒いのね。」
「ええ、冷えて行きますね。旅行でも爲ますか。南國とでも言ふ方へ。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

二人は無性に笑ふ樣な氣になつた。

『此れから何うなさいます。』

秋江はふと又眞面目な方へ話しを轉じた。お召の端折りを氣にし乍ら、辷り氣味なのを直して見たりなぞして、熱心に岸の方を見た。ふと此時、殆先刻から、自分許りが質問の側になつてゐる事に氣が付くと、夫れ丈け其裏に男の虛然とした、氣分なり態度なりが仄見えて自分が淋しい、低い。

『何うて、さうですね。洋行する迄の事ですか。』

『ぢや洋行に決めて被居やる。』

『えゝ』

『ぢや近い内にでも爲さるんですか。』

『解りませんね。』

恁う、深く考へやうとする爲か、遂ぞ斷定して言ひ限らぬのは此人の癖でもあつた。夫れが奏え限らなくつて嫌だ。此方を愚かに扱つてゐるともひがんでは見ぬけれど、專門上の事に係ると隨分獨斷な放縱な口をきくくせにと思ふと、二人の戀が進みもせず、而も斷ればなれもせず今日又恁うして逢ふと言ふ樣な形である事が殆男の調子に連れた結果のやうに思はれて、二人の戀は男の方のもので、自分とは係りのない樣な底冷たいなさけない感じがしもする。

『して見ると、女の方が直覺ですわね。』

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

不圖から言つて見やうと思つたが、あまりに出し拔けなのが自分から先づ笑へた。
「三年間には何も得るものがない樣なものでしたわ。私しは。」
ふと、岸の口吻らしくまねて言つたが、矢張り自分の言葉であつた。
「僕の方は。さうですね卒業しましたね。」
皮肉な眼が此時ふと笑つてゐた。
短かい日が、已う夕暮れを叫んで來た。
灯が燈ると、卓の上は小さな光りが色々に流れそめた。丸い小鉢は柔かな丸い影をも入れてゐた。
間もなくみなに成つて行く食器から離れた心は、何時までも茲には置かしめぬ樣な心持ちを與へた。
秋江はふと、今日の會合が何時か無價値であつたやうに、さも浮つ寂しい心持に返つて行くのを覺えた。三年の以前から、岸とはいつも恁うした何事でもない、そのくせ充ちきつたものゝやうに此れ以上一歩をも加減するを許さぬやうな形で過ぎて行く事を覺えしめた。
ついぞ一度でもとろける樣な微笑みに、或は女らしい伸伸しい安愉な快い氣持ちになつた事の少ないのを思はずにはゐられない。
して見ると、最後まで逃れてかぬ戀は、恁うした男から受ける氣分に對して、自から破り進む事がならないとも言ふ事が出來る。
秋江は寂しい、とよりもいやに重ぐるしい解けぬ男が一種の謎でもあるかの樣に、否寧ろ恁うして

間を三年ほども置いて、逢つて見ると今まで知らなかつた點、例へば男の性格のやうな大きな點までも恁う明斷と解せられぬまでも少なくとも心に頷く處は少なくはない。

『何うしますか。今から。』

岸は初めて秋江に求めるやうに恁う言つて

『兎も角出て見ませうね。』

自分から先きに立つて室を出た。秋江は態と沈靜に構へて、小鏡などを出して見て白い顏のあぶらを拭き取つて見た。

悠然らしく粧つて下りて見ると、岸は口笛を吹きながら夕寒い暗の中にぶらりとして待つてゐる。

二人は言ひ合はす樣に公園の中を肩を擦れ合ふほどにして歩いた。

ふと、

『貴女は他人と結婚する氣になつて見た事はありますか。』

恁う岸の言ひ出した事がふと胸に浮ぶ。

此言葉が然し可笑しい。岸の樣なたちの人の言葉だから不思議ではないやうなものゝ。

恁うした、男を讀むやうな考をいだき乍ら、それが今現在では何等戀の障りとはなつてゐず。却つて何も彼もさき破つても男に向つて進んでゐるのは事實である。

『是れから又、成可くお手紙頂き度いですわねえ。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

恁う岸の袂に倚り添ひ乍ら、秋江は囁くやうに媚をつけて言つて見たけれど、此れが、ふと此まゝ何事をも起さず別れて仕舞ふ二人ぢやないのかと思へても來て、うら寂しい。

「一度宅へも被入して見て下さいな。」

追つかけるやうに、恁う縛ぎをつけて置く言葉も撰んだ。

「はあ。」

憂へぬ人のやうに岸は極簡明に取扱つてゐる事を示した。

つと秋江は倚り添ふ様にし見た。

岸も應じるやうな調子に其手を握り緊めてゐた。

初々しい鼓動が、少時く續いた。

秋江は湧き上がる様に語ひ度い言葉をも、男の無言を破らうとするのは然し苦しい。

公園の後は雑木林のやうになつてゐるので、道も茲は已に深い暗で明晰とはしない。中天を照らすほどの灯が、川を中にした下京の夜の繁榮を誇るやうに此山の上からは見渡す事が出來る。

何處かで柳の流しがきこえる。

晩秋のうすら寒さをも厭はぬほどの戀中らしい二人連れは、此方の二人に對してさへ避ける様にしてゐるのも見受けられる。其影の女のしなやかさを失はぬのを見ても、花見小路に近い此そゞろ歩きを撰んだ人達だと思はれて二人には妙にさうした人影が美しく哀れに見える。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

風はさらさらさせてゐて木と木の梢を渡る。裾一つ拂はぬ靜かな深い秋の夜である。
二人の歩は已う何時となく夜櫻の近くを廻つてゐたのである。一本の此櫻の爲めにあるアーク燈は、寂しい公園の夜を凄くもの深く見せてゐる。玆では、秋江の方では握つてゐやうとした手が離れてゐた。
ふと自分の方から、已う二人の最後の形を需めてゐるといふ事が覺れた樣に氣が付いた。退く事も、否む事も出來なくなつてゐる。二年の間の苦い感情は、其飢えを一時に癒さうとする樣に。
『何の方角を行きます。』
岸は立止まる樣にして聞いた。
『あら。』
秋江は態う慣れ慣れしく言つて、
『お送りしても好んですよ。』
かう、恍さうに俯いて言つた。
『然し、八時には教會に集る用がありますから。』
其時始めてのやうに、此人は信徒とよりも研究の方に屬してゐる人だつた事を思ひ出した。
『ぢや、教會までお送りしても好いんですは私の方は。』
『そんな必要もないですから。ぢや已う少し歩いて俥でも見て上げませう。』

生眞面目な言葉を、何うにも柔かくして見せる事は、岸には出來ない相談であつた。

然し恁うした人ではあつたが、以前の秋江なら柔かさを包みこむ男の心が、女を遠く避けでもする樣に思はれたものである。

「あの、お手紙をね。」

少し歩いてからさう言ふと、岸は已う俥を認めてゐた。

怨む樣な、自らを笑ふ樣な、悲しい心持ちを味ひ乍ら、別れて俥に乘つた。秋江は已う岸を振り返らふとも爲なかつた。其人の影を見るに耐えなかつたから。

俥の上の身の搖ぎを感じて、ぼつと後に心を奪はれてゐたのに氣がつくと、岸の呼んで呉れた此俥は護謨輪ではなかつた。

今日から又、憧がれに奪はれる心の空になつて行く寂しみと、擽ぐられるやうな物足りぬ遣る瀬なさとに、嗚、苦しむ事であらう。何事をもなかつた昨日を葬る樣なさうしたものが腹立たしい。不安と胸苦しさが今から想像されて來た。

最後まで行かなければ止まぬ心が、岸に比べて何れほど愚かしく、厭はしいか知れないのである。

秋江は自らを何う嘲つていゝか解らなかつた。

小春の極清快な日が四五日續いた。

秋江はふと自分から訪ねて見やうといふ氣が昨夜から止みがたく續いゐる。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

然し折々は忘れたやうに、思ひ續けた反動の倦氣が總て身體の周圍の印象まで朧氣につつみ込めやうとも爲る。その心持ちも決して長くは續かないで、又元のいらいらしい心持ちに返る。

『岸さん。』

から口の内で、闇に叫ぶ人のやうに、狂ふた人のやうに叫んで見る。から總身を無茶苦茶に掻き毟つて了ひ度いやうに、可笑しい手つきを爲ながら敷布の上を轉げ廻る事もある。冷たい鏡の前に坐つて、取亂した自分の顏を映しては、愚かしい眼付をしてはそれを眺めてゐる事も爲た。

『お母さん、私は迚ももの にはなれませんわねえ。』

恁う遠廻しに、母にでも聞いて貰つて、愛相の盡きるまで、自分を罵倒して見度い。恁ういふ事も思つた。

『胃が痛んで御飯が頂けないのよ。』

然う言つて、お給仕をする女中の前を憚るやうな時は、さもしさに惜しんだやうな涙が眼に滲じむ事も知つた。

野分けらしい風の音だとか、忘れられたやうに物干場にかゝつてゐる竿竹、其長い容が身をふるわせた。

此癈風にして、ヒステリーになつた人の事を考へ及ぼすと、畏怖て胸を閉されて了ふ。

誰人か來て、思ふ儘に愛想づかしを言つて罵倒して呉れたら、恁う思ふと、内あける友の乏しさが

染々なさけなくなつても來る。
「兄弟中で、せめてお汝だけでも記帳面な人にならなどもならん。」
かうした祖母の聲が今一度きき度い。
何も彼も忘れて了ふ樣な處へ旅行でも爲て見たらば、さう云ふ考が、遂々苦悶の中から救ふやうに現はれた。
然し岸にも無斷で行く、そんな事は迚も出來たわけでもなかつた。
一度逢つて見て、言ふ事が出來たら今の苦しい事情をも告げて、淋しい言葉を取り交して微笑で別れて行かう。
かう最後の考が付いてから、頻りと岸の許を訪ねて見る氣になつたのである。
岸には母がなくて、嚴父と同棲してゐたんだけれど、仕事の都合から勝手氣儘な處を撰では下宿もし、他人の家族に混つて棲みもしてゐるんである。
今は小北野の西洋人の家に寄偶してゐるので、訪ねやうと思ふと、電車の便はない上に方角も迎つて行くには少なからず困難であつた。
家人の許しを得て、家を出る際には、かう希望を有つ人のやうに無止みと急がれるやうな心持になつてゐるのが自ら可笑しい。
北野神社までは電車に委せて、夫れからは訊き訊き歩て見る考で決心してゐた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

電車の中でも、目まぐるしい活動の中に生きてゐるやうな人を見ると、羨しい氣もされて、愼ましげな極京都式の娘の容子までが安樂な世界に眠つてゐる人のやうで、つねは馬鹿馬鹿しい樣な他人の話までが妙に頭が下げられて見える。

『氣が弱い。』

かう叱るやうに自らを顧ると、宗教に這入つて見やうか知ら、といふやうな浮き雲のやうなむらむらしい考も出て來て、何處まで自分は輕薄だらふといふ反感も又心にうつる。

複線になつてから、電車の乘り心地は殆東京と區別は付かなくなつた。下りる人にも上る人にも、歳の暮れに迎へらるる樣な目まぐるしい氣分が現はれて、秋江は物のために動く人が今日ほど尙く見えた事はなかつた。

北野の終點に來ると、迚も方角を訪ね歩く勇氣がなくなつて、煩さくつき纏ふ車夫を幸ひに俥で行く事にした。

洛北の冬枯れ、犯しがたいから神々しいやうな邊りの情景が、本當の古い京都を見るやうに貴い。何時の世になつても、玆ばかりの靜謐は破る事が出來ないといふ風に、品の佳い茅屋の村落はつゞいてゐる。

岸に逢はずとも、玆いら邊をぶらぶら歩いただけに來た甲斐がある樣に思はれて、少なからず慰めを覺えそめた。

番地が明かでないため、只西洋人の別莊とだけで土地の人と見れば聞いて歩いた。
車夫もあまり慣れぬ土地と見えて、小徑を只むやみに行ける處まで行かうといふ風に走るのみで、いつか村の名さへ分らずなつてゐる。
分らず仕舞になつてもと、已う岸に逢ふ必要もない樣に思はれて來た。心の弛が現れた。
稻を刈つた後の黑い田が際限なく續いて、常盤樹の綠ぶかい森が、其處にも茲にもそばだつてゐる。
俥は遂々方角を誤まつてゐた、引返してまた行くには又元々の困難を續けねばならぬ。
『此まゝ北野邊りで遊んで行かうと思ふから已う引返して下さい。』
かう車夫に言ふと、車夫はさも氣の毒げにそれでも未練に何うの彼うのと道すじを考へてあゝ行けば近いのかう行けば捷徑だのといふ。
『本當に好から。』
然しさうはいふものの、逢ひ度うはあつた。
『ぢや已う一度出かけて見て、此度駄目なら止しませう。』
『へえ。此度は大丈夫です。』
かう又俥が搖ぎ出した。
ふと向方から同じ畦を傳つて來る人が、妙に岸らしく見えてならない。今まで收まつてゐた胸は、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

又あはたゞしくなり出した。
今日は洋服姿の、細長い優美な姿はうそにも見紛ふ事が出來なかつた。
俥の近寄らぬ先きに、先づ下りた。車夫が握棒を上げた頃、岸は微笑を充たせて一心に此方を見つめながら近寄つて來る。
『やあ。何うしました。』
さうしたかけ聲が、秋江の顏を紅らめるほど力づよくきこえた。
『僕ても訪ねるつもりでしたか。』
常に似ずいそいそしいのに、秋江は先を越されて何も口には出されなかつた。恁したきまり惡さをば豫期してはゐなかつたから。
『皆悉り方角をば取違へちまいましてね。』
『さうでしたか。』
『でも大層好い處てす。』
貴郎にお目にかゝらず、歸つて了つたかも知れませんでした。——から口の中で言つて見た。
『何しろそこいらを歩いて見ませう。』
かう秋江の來た方の道を歩き出して、
『今日ね、臨時會が有りましてね。僕が身替りに行く處です。或は歸途にお寄りしてと思つてゐまし

た。」

恁う言ふ道の中て、恁うした場所て、秋江は思ひ設けぬものだから何う言つて、今日の訪問の次第を話したものか分らなかつた。

折々岸は秋江の艶々しい束髪を脇眼らしく視ながら、

「お手紙を頂けるかと思つてゐました。」

つねの岸に似ぬほど、此うした要求らしい事を口に出した。

「私の方でも然う思つてゐました。」

恁う二人は眼を見會はすと、行き詰つたやうに言葉が續かなかつた。

家に居る時のやうな、息苦しい悶えは忘れたやうになつてゐるけれど、又後日の煩ひを醸す様な取亂した、何處までも岸に縋つて見度いやうな心持ちが今盛に身にもえる。

過日の會合から見れば、病む人のやうに萎れて見える事は岸にも解つてゐるらしい。つねの様に似ず、岸から頻りと言葉を出す側になつてるのもそれだ。恁う憫むやうに。それも秋江にはなさけない。

二人の歩は、いつか知らぬ森の側の小徑を傳つてゐる。人通りも極寂しい。冬のやうな寒い風が背を打つ様に吹く。いつか下げた手の觸れるほど近づいて歩いてゐる。

「西洋人の家が嫌でね、何處か行つて見やうと思つてます。」

岸は極、心の隔てぬ様に俯き乍ら中音で話して行く。

『私も我家が嫌になりました。』
『妙ですね。』
『旅行しやうかと思つてます。』
『貴女も。』
『えゝ。何だか……。』
『何時もさう考へる人ですか。』
『いゝえ。』
かう讀むやうな岸の眼を覗返して、
『貴郎にお目にかゝつてから、そんな事を考へるやうになりました。』
『旅行でもしなきや苦しくつてゐられませんから。』
岸は此二つの言葉をきき捨たまゝて無言でゐる。
秋江はまた、不安が覗きかけたやうに思つた。
寧ろ、此う苦しい心のまゝを慥面もなくさらけ出して見やうかとも思つて見た。
『先づ何處へ行きます。』
岸は少し經てから言ひ出した。よく考へてゐた人のやうに。
『何處ですか、定つてません。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

岸は淋しさうに笑ひ乍ら、

『困りましたね。』

といふ。

秋江は愚かに扱はれたやうにさつと顔を紅くした。

森も盡きて、直ぐ又籔の後ろを通らなければならぬ。秋江は並ぶ事を止して、成可く後方から尾いて歩いた。岸は譲るやうに身を傾けて歩いた。

『此邊は冬が早く來ます。』

已うそんな事に答へる餘裕が秋江にはなかつた。

岸は又無言にならなければならぬ心細さを又しても後方に遲れやうとする秋江の足許をふり返つた。

『貴郎は已う、私が貴郎を思ひ斷つて了つた方を好となさいますか。』

秋江は突然から言ひ出して見やうと思つてはそれがならぬ。

籔も已う盡き樣と思つた頃、

『あなたは今から直ぐお歸宅りてせうね。』

と岸はふり返つて、

『えゝ。何うするか解りません。』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『困りましたね。會が終めばお訪ねしやうと思つてましたが。』

秋江は思ひきつたやうに、

『何か御用があつて？』

といふと、岸は少なからず驚いたやうに口を噤んだが、それを取りつくらふ様に、

『さうですね、用と言つて。』

秋江はもう、媚びるといふ事も一種の耐えがたいわざの一つであつた。

『廣い通りに來て電車にもま近くなつた頃、秋江はふと、

『少し急ぐ樣な心持がしますから、失禮致しますわ。』

何うにもなれ、といつた風に强て岸と別れて歩き出した。

泣き出しさうな心持ちを抑へてとぼとぼ歩いてゆく後姿を、憫に見送られてゐる事を意識し乍ら、今にも呼び止めて呉れはせぬだらうかなどと、淋しい事を賴み乍ら歩いた。

別れるとき、岸の驚きがほに立止つた眼が然し悲しく眼にちらつく。

——完——

——習作の——

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

乙彌と兄

林　千歳

「あゝ疲勞れた」と餘程疲勞れたらしい顏付て、細長い男はノッソリ妹の部屋へ這入つて來た。
部屋の内は殆ど物の見別けさへも付かない暗さなのに燈火も點かず、火鉢の中に掘り出された火だけが暗い中をポッチリ赤く色彩つて居た。此の室の内には誰れも居ないのかと思つて居た男は右手に丁度、木兎の眼のやうな窓が暗い内にポカンと開け放たれてある。窓には男に背を向けて立つた妹の半身の輪廓がハッキリと黑く描き出されて居たのに氣がついた。
男は何の考へもなく、其黑い半身にヅカヅカ近寄つた。けれども其黑い半身は身動きもしない、故意とか、それとも知らないのか、呼吸もないかと思はれる迄に靜止して居る。
細長い男は黑い半身の後に立つてつまらないやうな淋しさが負ひ被されるやうに沸き起つた。と同時にたゞ脚にまかせて何處かを歩いて來やうかとも思つた。そして默つて襖子の方へ引かへさうとした時、今朝男が乙彌といふ女の部室を出かけやうとした時の、
「私も出かけます」と女の言つた味のない聲がふつと浮んで來る。
「何處へ？」と聞いたが其れには答へなかつた。そして其返答の代りに全て別の事を話した。男が重

ねて、
「え？ 何處へ行くの？」少し執拗く云つて見たが、それでも女は何も云はぬ。やがて女は今迄着て居た着物を脫ぎにかゝつた。

紫色の勝つた光澤のいゝ柔かい着物は衣紋棹からはづされた。解き散されて、とぐろを卷いた友禪の帶を凝視て居た男は、今迄直ぐにも出掛けねばならないと思つて居た用事も、「もう何うでもいゝ」といふやうな氣になつて急に厭な沈んだ氣持にふさがれた。

たゞ處在なさに女の着物の掛つて居た傍にある長方形の姿見の前に立つて見た。そして不圖ネクピンを刺し直さうと思つた。

鏡の中に男は自分の背廣を着た姿と、つまらなさうな少しも動きのない顏色とを見つめて、何物かに威壓を受けて居るやうな姿だとつくづく思はれた。

同じ長方形の平面な中に女は頻りと後向きの儘お太鼓をたゝいて居た。帶の紫陽花の大きな模樣は白茶色の上に獨り華やかに寫つて見えた。

「此女の象徵でゝもあるやうだ。」男は焦心つたいまぎれに鏡の內のお太鼓の紫陽花を見てから思つた。女は向き直つた。帶の間に時計を入れやうとして又止して鏡の面に近づいた。

男はじつとして居る譯に行かなかつた。

「お參詣に行くの？」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「いゝえ」
「稽古に行く？」
女の琴の稽古に行く事を思ひだした男は必つとそれに相違ないと思つた。
「いゝえ」
男は「いゝえ」といふ言葉より外に知らないやうな女の返事に、急に勃然とした氣持になつた。
「貴郎だつてお出かけの時に何處へつて明瞭とおつしやつたことはないわ」女は返事はせずに斯様風に勝手なことを云つた。
男は其儘今朝は此室からすぐに他へ出かけた。
朝の事を薄暗い中で突立つた儘考へて居た時、不意に室内がパッと明るくなつた。と同時に一度に部屋の内の物の形が眼に入つた。
「兄さん今日は早いのね。」電氣のねじを拈つた妹は斯ういつて眼を眩むばかり明るい内で正面に顔を見た。
男は電氣の下に輝く若い女の瞳を見て瞬間の間に乙彌といふ女を一寸思つた。
「もう御飯が出來た時分だよお前も彼室へ行かないか？」
「私？　もうさつき食へちまつたわ」
男は素氣ない妹の言葉を何處か歳の割に小供つぽい乙彌に似た處があると思ひ乍ら獨りで夕飯に茶

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の室の方へ行つた。
妹は火鉢の傍にメリンスの座蒲團を持つて來て、それから思ひ付いたやうに机の引出しから細い編針と玉のやうに卷いた團子程の絹絲の紅い毬とを持出して座つた。
まだ何になるとも見分けの付かない程の編みかけの物を丁寧に手の掌に延して見て居たが直に編みさしの處に編棒を突き刺して目まぐるしいやうに指先を働かし初めた。
眞紅な絹絲の毬は時々コロ／＼と疊の上に轉がつてはまた、チリ／＼と膝近く動いて來た。
「兄さんの好きだといふ乙彌つてどんな女かしら」妹はかう思つて何んだか一寸會つて見たいやうな氣がした。年頃な女かしら。それともまた自分達のやうな若い女かしらとも考へた。そして新橋に居ると聞いたけれど……、新橋邊りなら自分なんかにも、美しいと見えないやうな女ではあるまい。妹はたゞ自分の兄の……といふことが美しくあらねばならぬといふ條件をたゞ強くさせた。
紅い玉は時々一二尺離れた邊りへ投出された。
妹は、よく何々倶樂部、何々畫報といつたやうた雜誌の口繪に寫眞版に刷られた樣々な姿が浮んだ。
さういつた社會の女達がよくする——強いて作つたやうな——嬌を含んだ表情の幾つかの顏が此間何心もなく書肆の店頭で繰りあけて見た時の記憶から呼び出された。そして其れ等の何處かに必つと其乙彌といふ女の顏も載つて居るに違いないと獨りて定めて見た。
一つ二つ編み目を間違いて了つたのでバラ／＼と絲を解いた時、又畫はがきの美人を思ひ出した。

流行のやうに街の店頭を飾つて居る二三の美しい女達を思ひ出して自分の知つて居る限りの名を思ひ出して見たけれども乙彌といふ名は思ひ出せない。――彼れも――彼れも――と一人一人の名を辿つて行くと、何れも何龍とか何葉とか何子、何吉、何勇……そんな名前ばかりであつた。斯う思つて來た妹は何んだか急に其乙彌といふ人が醜い女ででもあるやうに思はれてならなかつた。

不圖、何時だつたか兄の机の上に丸髷の女が六分ばかり顔を此方へ向けて立つた姿の畫はがきがあつたことを思ひ出した。

少し神經質なやうな面長な、何方かといへば淋しい處のある顏は兄の好きさうな女だとも思はれた。兄は必つと自分の妻君になつて丸髷に結はせた時の事を思つて彼れをわざわざ買つて來たのではないかとも考へられた。

けれども自分の兄に聞いた時に靜江とかいふ藝妓だと敎へた。ひよつとすると兄は眞實の名を敎へるのが極りが惡かつたのでわざと彼麼、嘘つぱちの名を造へたのかも知れぬとも思つた。

襖子がスーと開いた。其處には和服に着更へて褞袍を引掛けた兄が半身を中に入れて立つた。妹は一寸何のことはなしに微笑まれた。

「今日の新聞は何處だね」

「報知なら此處にあるけど他のは彼方よ。私探して來て上げませうか」

妹は口で斯樣ことを云ひながら、編物の手は止めやうともしなかつた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「此處になければいゝ――後で見やう」斯ういつて兄は珍らしく妹の傍の火鉢にあたり込んだ。妹はそれでも手を止めやうとはしなかつた。
「お前始終何か編んだりしてるやうだが、一つとして出來上つたものを見たことがないな」
「兄さんなんかに見せたつて何にもならない。」
獨り言のやうに斯ういつて顏の見えない程屈みこんで目まぐるしいやうに指先を動かして居た。そして樣々の事を考へて見て獨りでホヽと小さい聲を出して笑ひこけたりした。兄は何にも考へないといふ風で唯煙草を吹かし乍ら其無邪氣な樣子を見守つて居た。
不圖、妹は、
「兄さん！　兄さんだつたら何ういふ風な、顏立の人を美人だと思つて？」
「何故さ？」
「何故でも、よどんな人をさ美人だと……」
「男かい、女かい、」
「そりや、勿論女の人の事だわ、いやだ男の美人なんてホ……」
「然し男だつて立派な人があるぜ女より美れいな人もあるよ。」
「だけど美人なんて言はないわ」
「成程さうかな、ては美男子かな。」

「そんな事どうでもいゝわ、私はね兄さんなら何んな女の人を美人だと思ふかつて聞いたのよ。よ、どんな女を好きだと思つて？」

「けれどお前好きだといふのと單に美人といふのは違ふぜ。」

そりや然うねだから美人、だと思はないでも好きだと思ふやうな女はまあどんな風なひと？」

「そんな事いつたつて駄目だよ、其人として好きな位なら美人と見えるだろうからね。」

「其處に兄さんは居るのかい？　手紙が來てますよ」襖子の外で聲がしたので、平常腰の重い兄さんは煙草に火を付てヒョイと立つた。妹が何か云はうとして居る間にはもう煙だけ背後にのこして出て行つて了つた。

いろ〳〵な事をいつて居た間に、甘く逃げられて了つたので「惜しいことをした」と思つた。

別の室では、

「ハッハッハッハ、」大きな兄の笑ひ聲がしたので妹は自分を笑はれたやうに思はれた。

妹は、もし自分と兄とが許嫁であつたと假りにしたら、乙彌といふ女などをどんなに思へるものかしら　兄さんに對してもどんな氣持なものかしら、」斯う思つて考へて見たが、どうといつて見當のつけやうもなかつた。

翌日妹は學校へ行つた。そして遊步時間に妹は斯んな話題を持ち出した。

「ねえ貴方達どう思つて藝妓なんて絶對にいやなものだと思つて？」
其處に居合した多數の女學生達は皆、あんまりいゝ顏はしなかつた。そして、「何故そんなことお仰るの！」と云つたやうな眼をして默つて顏を見合せて居る。

「私ね普通に思ふ程いけない、いやなものだとは思はないわだけど……」

「あんな無敎育なものを？」

「卑しい女だとお思ひなさらなくつて？」

居合す人達の疑問の種となつた。妹の思つて居たことは、自分で言つてはならないことを口にして了つたやうで極り惡い氣がした。

「でもね私藝妓に少し品を付けて、低い程度でもいゝから中等敎育をさせたら、私、まづ普通の女學生などより人の妻となつても必つと家の切り廻しがうまいだろうと思ふのそれに美れいていゝわ。」

「でも私あんな卑しいものいやだわねえ。」

「えゝさうだわ私だつて……」

妹はなんとなく厭な氣がした。自分の兄さんの妻君をでも惡く言はれて居るやうで、悲しいやうな氣持になつた。

乙彌といふ女も皆んなに卑しめられる一人だと思ふと、妹は一刻も早く兄をも其女をも說いて敎育もさせ品位もつけて卑しめられぬ丈にしなければならないやうに思はれ出した。

妹は今日、晩に兄と話す時があつたら然ういふやうな事を仄めかして見たいとも思つた。

妹は昨夜(きのふ)の編物の紅い毬を轉がしながら兄の歸宅を心まちにまつた。夕飯すぎから時計が十も十一も打つ頃まで、編物にも倦んで火鉢の火をかき廻しながら待つた。

手炙りの火が兎の眼のやうに小さくなつてしまつても兄の靴音は玄關に聞えなかつた。

妹は、

「兄さんはどうしてかう遲くまで用務があるのか?」と考へた。

——完——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

旅

上田君

一

汽車の三里は夢の樣に早かつた。關ヶ原、關ヶ原と驛夫が呼んでゆく聲に窓から首さし出した人々は、不破の關へ三丁、笹尾山へ二十町、黑血川へ十八丁などゝ何處の驛にでも見る道案內の立札が、いち早く眼についた。「若此處は古戰場なんだね、臨時下車は出來ない驛なんかしら」と一人の學生が驛夫を呼び止めて何か話し出した。かうした人々を後にしてゆき子は今古跡の地をふむ稚い誇りに充されながら、丁度誕生過ぎの男の子を重げに抱いて夫の健次のあとから汽車を下りた。曇つた窓がらすや、ヒヾのは入つたペンキ塗のベンチ、柱に掛つて居る八角時計も、如何にも淋しい田舍の停車場らしく、のる人も降る人も數へる許り少なかつた。

それは八月の薄曇りのした暑い午後で、ゆく町の木や家の陰影はピッタリと白い砂地に吸ひ込まれて、はく息も苦し氣に見えた。山越への三里餘りをわざ／＼迎ひに出て來た二臺の人力車には、どれにもやせた茶色の洋犬が勢よく先引きして、時々鳴き乍らあえぎあえぎするのが、かつてない平安な心に歸つて初めて夫の家へ連れられてゆくゆき子には、何となく不安な思ひであつた。屋並わるく軒の低

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

い家ばかり並んだ一筋町の眞中には、小さい淺いながれが有つて所々に鍋や、茶椀や、魚籠などが浸して有つた。ひどくしやがんで鍋か何かを洗つて居た女が、轍の音にフト手をやめて上眼してゆき子を見た。辻々に迫る濃いみどりの山々に威嚇せられて、丁度怪獸に追はれた蛇が、疲れ切つて眠つた様な細長く淋しい關ヶ原は町であつた。氷と赤く染めぬいた小旗が幾つもたつて居る茶屋らしい店の角から折れて、車は山の麓地を上つたり下つたりして進んでいつた。重なる山の頂きに忽然と聳えて居た伊吹の山も進むに従つて姿をかくしいつても／＼茂つた木々の若葉の匂ひが、如何にも山邊の夏を思はせた。其の内車はヤヽ平坦な街道へ出て、大きな×川の急流に添つてさかのぼつた。其處には處々に水田もあつて暑い眞夏も知らぬ様に、田の草取る人々の笠が動いて居た。輕い雪だるまのお菓子をしやぶつて、おとなしく母に抱かれて居た男の子は揺られ心地のこゝろよさにやがて靜かに眠つて了つた。ゆき子はフトおしめの事を思ひ出した。汽車から降りた時行李の中から出す筈で居たのをすつかり忘れて了つたので、袂から手拭とハンカチを取り出して難儀してねた子の下に敷いて用心した。夫の前の小さい行李の中は大部分小供のおしめでつまつて居た。かうしたおしめの行李を前にのせた、まだ學生の夫の眞面目なうしろ姿を眺めると、ゆき子はそゝられる様なおかしさが涌いて、來て、こらへても／＼暫らく口が結べなかつた。

　長く普通の山と川と平凡な景色にあいた頃兼ねて面白いと夫から聞いて居た山合ひの山道にさしかゝつた。それは山と山との間を流れる×川の大きい谷にそつて山腹を切り開いた絶壁の涯道だつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

もう此の山には初秋の氣が滿ちて居た。山萩や眞葛のつるが丈の低い雜木にからんで紅の小花を見せて居る涯の下には、紺碧の激流がうづを卷いてながれた。右手に見上げる山のふくらみにはうつぎの花がコンモリと白く咲いて、芒の中に蟲の音もした。川をへだてた向ふの山のみどりの中には桔梗の花の紫が點々と、炭やき小屋が處々に淋しく立つて居た。上つたり下つたり其の上烈しく九曲して居る此の山道は、恐らくゆく人の離れにても汗と力を費やした人の力を思はせる迄、危險に近い山谷に長くつゞいた。フト振り返るうしろが丁度山の出ばつた鼻の處で、一めに涯下の激流が眺められたり、ゆく細道が俄かに前の山に遮ぎられて、思ひがけないはるか向ふの重なる山腹に又白い涯道を見つけたり、どうしても支那の繪にある山と道だつた。ある處は杉の並木がズツと涯の側に長くつゞいて谷川の流れは音ばかりしか聞えない事も有つた。ピツシリ鈴なりして居る山栗が、スツカリ谷の方へさし出て居るのを、取る人もなく、とれもしないのが面白かつた。たまに出て來る人や荷車などゝすれ違ふたび／＼にゆき子はいつもハラ／＼した。山腹が急に入り込んで又急に出て居る烈しい彎曲のくの字になつた山道では、雜草の谷をへだてたすぐ前を夫の車の斜にゆくのが眺められた。かういふ時何時も夫の眸とハタと出合つて、其のたび／＼に何がなしにゆき子は笑らはずには居られなかつた。俄かに急な坂路になつた處で、向ふからスタ／＼昇つて來た若者はフイと健次を見て丁寧に頭をさげた。やがて坂路を下りつくすと、其の水源の向ふの山へ遠く×川を殘して右折した人力車は、漸く見え出した村の方へ這入つていつた。ゆき子は帶の間から懷中かゞみを取り出してあたりに氣を配りつゝ、みだ

れた髮をかき上げたり、はけだた着物の衿を合せなどした。そして山の人々の純な頭に入る初めての自分の印象が何となく氣つかはれ出した。

二

夫の家へ落ちついて家の人々と互になつかしみのある言葉を取りかはした頃には、開け放つた座敷からすだれ越しに仰がれる山もくろづんで、黄昏の山氣が冷え〳〵と邊りに迫つて居た。

實業に從事して居る相續の兄は、もう以前から他國へ出て久しう家には居なかつた。年とつた母と姉との大きい家に、昨日來た許りだといふ今は他家へいつて居る弟も居て、思ひかけなく人々を喜ばせた。弟は去年あつた時とはズッと青年らしくなつて居て、髮なども奇麗にわけ、少しちゞらせた先が廣い額をかくしたので可愛ゆくなつたとゆき子は思つた。

「マア、此のおぢ樣を忘れたの。」といつてゆき子は妙にはにかむ男の子の頭へ手をおくと、「もう僕もおぢさんと言はれる樣になつちまつたんだから。まだ二十二なんですよ。」と弟は戲談らしくいつて淋し相に笑つた。「マア此の人はもうお父さんの癖にといふ眼つきして母や姉は面白相に笑つた。×町の中學に居る頃或る教師に望まれて其の家の人となつた弟は、去年高等學校へは入つた秋はもう若い父だつた。「僕の前途は閉になつた。然しかうした事實をどうする事も出來ない。」と家庭の人々が此の若い父に對する考への變つていつた事を、ゆき子の許へ憤慨してよこしたりした。

時々ブーンと蚊の耳元をかすめるのが不思議な程、日中の暑さに引きかへて山の夜の夏は涼しかつ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

た。ほの暗い光りのながれる竹らんふの元て、やがて親しい夕餉のまとゐは開らかれた。健次は有りし日を思ひだす様に、山ごゑの谷川てとれた焼きたてのアマゴの味を珍らしかつた。甘い銘酒の壺を膝の上に置いたまゝ、母は只嬉れし相に變つた人々の事を話しつゞけた。夫の様子や母の笑顔、眼のあたり見る血縁の微妙な力が自然に人々の心の奥の琴線をふるはす様て、ゆき子はわけもなく柔かい温かいなつかしい氣分になつていつたが、どうしてか胸ぶくれがして食慾が無くなり、心盡しの品々の料理にも思ふ様に手のつけられないのが本意なかつた。

食後人々はかはる〴〵お湯には入つた。夫の次きにゆき子が進められて男の子の着物をぬがせ様として居ると「坊ちやんはあとで一度私が入れさせて頂きます」といつて、そばに居た姉は男の子を抱いて勝手の方へつれていつた。姉は近頃十年も連れそつて居た夫の家から、小供を殘して歸つた不幸な人て、まだ三十になるかならずだのにもう藍がちのおみな浴衣を着て、つめた前髮の束髮が淋しかつた。

持つて來た行李の中の派手な浴衣と着かへてらか、ゆき子は裏口の方にある湯殿の中へは入つていつた。たてこめた湯氣の中から輕く藥の香が鼻に來て、丸い湯桶の中には藥草の包みが湯にふくらんて浮いて居た。ボッと夢の様な豆ランプの灯をじつと眺め乍ら、ゆき子は身體を洗ふでもなく湯船のふちに背をもたせて、深くゆるく息しては思ひきり山の匂ひを味はうとした。

其の夜ゆき子は何時迄もねつかれなかつた。行燈の薄い光りが黄色く流れて、少し黴くさい蚊帳の

匂ひも何となく物語りめく夜であつた。機織蟲がつい近くで透きとほる様に鳴いて居た。

あくる朝まだ涼しい内に、ゆき子は夫に連れられて夫の家の墓地が有る所有の山へのぼつていつた。露にぬれる着物の裾をまくし上げて姉もあとから百日草の赤いのと、線香とを持つて追つて來た少しのぼつた處の谷合ひに添つた山の原に、父の墓とまだ二つ先祖の石碑が建つて居た。火をつけた線香を赤い花のかたへに立てゝ夫の後にひざまづくと、ゆき子はしんみりした情調になつていつて。生涯をかうした邊鄙な山間に終つて、此の淋しい山の原に埋められてゆく人々が如何にも幸福の様でもあり、又いたましい様にも考へられた。香の煙は谷の方へ靡いては／＼消えていつた。

歸りには二三軒親戚を挨拶に廻つた。どの家でも其處の主婦と初めての長い挨拶をしながら、ゆき子は勝手の方で娘や小供のコソ／＼と騒く音を靜かにきいて居た。どの障子にも襖にも光る大きい眼がある様でまぶしかつた。一番しまひにいつたお寺には門がなかつた。

ゆき子はゆつたりした山の生活が珍らしくなつかしかつた。見るもの聞くもの一つ／＼に驚異の眼を見張つては、得心のいく迄夫にきゝ／＼して興がつた。あふ人々や來る人々の中には何處やら元始的な匂ひがあつた。男の人の多くは丁度いのちのある名工があらぼりした彫刻の様に、其のキビ／＼と粗雑な大きい身體の中には熱い血が脈々と流れて居た。手や足なども威嚇に大きく、聲も馬鹿に太かつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「お母樣はあなたを何處のお部屋でお產なすつたせう」と、ゆき子はある話の途中でフト夫にこんな事を聞いたりした。餘り聞き聞きする內に、知るといふ事より聞く事に興か移つていつて思はず調子付いたりするので、「うるさいねえ」としまゐに建次は逃げ支度する眞似などもした。

ゆき子は嘗て新らしく家族の一人になつた夫から、事々(ことごと)にきかれた日の有つた事を思ひ出た。そして今迄思ひもよらなかつた復讐の淡い快感が、フイとゆき子の胸に美しく泡立つた。

田舍によくある九間作りの此の家はお寺の樣にだゞ廣かつた。煙筒のない臺所の大黑柱や板敷は煙やすゝて黑づんで、障子の紙が狐色に上の方だけこげて居た。一番奥の佛間にはすばらしく大きな佛壇が何時も開らかれて光つて居た。近頃引き取つた姉の荷であらう縫紋を染め拔いた空色のゆたんが掛つたまゝて、簞笥や長持がいくつも薄暗い中の間に並んで居た。金蒔繪のした衣桁の前には朱ぬりの大きい鏡臺も見えた。かうしたいたましい品々を、なつかしい夢の跡でも追ふ氣分で眼のあたり眺め乍ら、何時迄も何も言はずに過すのが姉を見るたびにゆき子は氣になつた。何か一言云ひたいと思ひわづらつて居た靜かな晝食後に、姉は自分から身の不運を語り出した。簞笥の引出しから四五枚の寫眞を取出して來て、昔を偲ぶ樣に別れた二人の小供の事や、落ち付かない今の自分の身の上などを一所にして嘆いた。如何にも愚痴つぽく姑息な言葉も尤の樣に思はれて、ゆき子は自分の男の子に引きあてホロリとして了つた。しまいに「これは子供のでゝ親でございます」といつて渡した手札形の男の半身像を、ゆき子は何といつて下に置うかとマゴ〳〵して、じつと長く持つて居た。

寫眞を片付けにいつた歸りに、姉は今迄の濕つた話と取りかへる積りで、いくつも手際よく出來たぬい入れの袋と其の下繪などを持つて來て見せた。それは紫縮緬の地に靜御前や葛の葉や、どれも昔物語にある人々が黄や青や赤の鹿の子や、けば〳〵しい金襴の切れなどの、こちたい幼稚な彩色をつぎ合せて芝居がゝりに誇張してぬはれて有つた。もう一二度は使用したらしい少し穢ぢみた一升ぶくろのお染と久松とを指して「此の人達の顏はもう先に健さんが書いてくれたんです」といつて姉はわらつた。

「此の邊では屹度嫁入りの時にかういふぬい入れの米袋をいくつも揃へて持つて參ります。」と姉は言ひ〳〵、また一つ〳〵丁寧に紙に包んでから、少し穢のついた指の先をはらつた。ゆき子はフイと鏡の樣に姉の心を見た氣がして「早く今度は御安氣なおうちへね。矢張り女は男の付きものですから」と、無雜作に心にもない事を言つて了つて、ゆき子はあとが淋しかつた。

母は幼ない孫の男の子を珍らしがつて、おんでは〳〵近所の家を自慢氣に見せて歩いた。

「見ておくんなされ、健次のは男でなあ」

「マア能く健樣に似てお居なさる」などゝ、憚りのない大きい聲がよく家迄も、聞えたりした。ゆき子は忘れて居たおしめや、小さい着物の事などが氣になり出して「もう早くお暇いたしませうねえ」と小聲で夫に囁いた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

三

次の夜は直ぐ東の分家のおばの家へ呼ばれていつた。新らしい自然薯のとろゝ汁が摺鉢のまゝ持ち出されて青のりの香が高かつた。人々は遠慮なくかへ〱してすゝつた。酒のいかぬ健次は一杯の盃をもてあまし乍ら、丁度今病氣で×町の病院へ這入つて居る、話相手の從兄の居ない事を淋しがつた。年取つた叔父は昨夜珍らしく電報のは入つた騒ぎを話したりした。「てつきり倅からぢやと思ひこんで了ふてな。こりやしまつたと狼狽てたんぢあ眼鏡をかけて讀うとしても眼はポツトする、耳はなる、サクヤダ〱何ちうことだかさつぱりぢあ傍に居た佐助を叱りとばして讀せて見ると、昨夜男子安産とお藥からぢあつた。叔父は白髯の口を大きく開けて笑つた。叔父はもう可成り醉つて居た。どうしてかうしろの方だけ髪を削つて了つて切りさげにして居る叔母は、田舍の女には珍らしく犯しがたい剛直な風があつた。夫の亡き父の妹だときく此の叔母から、ゆき子は父を忍ばうとつとめてもなぜか近より難かつた。

何時からか夕立雨が降り出して、歸りは一本の雨傘に二人はよりそつて歩いた。健次の持つブラ提灯が、丸く黄色く暗をよけて足下許りを明るくした。「つかえるぢあなえか。」と突然屹驚する程耳元で夫の聲がするとゆき子はフイと心がはしやいて來て、此のまゝ默つて歩いては居られなくなつた。

「私ね、あれんばかりの御酒に醉つちまゐましたの、ほんとに醉つちまつた。」と如何にも仰山にいつて夫を見た。

「ホーラこんなに動氣がするんですのよ」と今度は胸に手を當てたがまだ物たりない氣がして「こんなに醉つたのは私初めてなの、頂かなきあよかつた。」とさも苦し氣にいつて立ち止つた。

「ぢあ、傘を持つてやろうか。」

「いゝえ、よろしいの、大丈夫よ」と言つて了ふと、今迄美しう心を彩つて居た色彩の膜が俄かに煙の樣にスーッとはげ出したので、ゆき子は默つて夫の手を握つた。

玄關から靜かに上つてゆくと勝手の方へは近所の人々が四五人風呂貰ひに來て居て、母や姉を相手に高話して居た。

「ヤー次郎さんが來てる。」と健次は幼な馴染の友の聲をきゝつけて急いでいつた。母を慕うに疲れて了つて大きい蚊張の中に一人淋しうねて居る男の子を覗いてから、ゆき子は座敷の方へは入つていつた。そこには弟が一人ランプを椽ばたへ持ち出して、イプセン全集の一卷をよんで居た。

「ヤ大變な雨でお困りでしたでせう。」といつて眼鏡の上から姉を見た。

障子から斜に流れ出るランプの光りに、庭の木立の近い幹ばかりが朧ろに透けて、烈しく降る雨の脚が銀色に細く光つて居た。丁度開らかれて居るボルクマンの上に眼を落すと、ゆき子は「面白いんですか。」と口まで出かけた言葉をフト止めて弟の眼鏡を見た。

「餘程おちかいんですか」

「何です？」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「お眼なのよ」
「イャア僕のは遠眼なんです」
「あら、初めて伺つたのね。遠眼なんて何だか少し老人みたいぢあ有りませんか。」
「エ、然し僕にはふさはしいでせう。姉さんさう思ひませんか。此の眼鏡は全く僕のシンボル見たいですね」
「うそばつかし。然し若い人にも遠眼は隨分あるんでせう。」
「どうですか、ありとすれば僕みたいに青春の燃ゆる時なしに枯れて了つた樣な奴許りでせう。」
「マァあなたは一人で極めて了つて入らつしやる。まだお若いわ、坊ちやんだわ。これからぢあ有りませんか。心の眼のあくのはこれからぢあ有りませんか。」といふと、ゆき子は姉らしい氣になつて來た。
「私などお母さんに成つた癖に氣許りは若いんですよ。まだ先がズッと長い氣がしてるんですわ。今からそんな事仰しやるのは罪よ。お美しい花子さんはまだお十八でせう。」とゆき子が少し戲談らしく言ふと「僕は全く小供から一足飛びに大人になつた。」と獨言の樣にいつて弟はくづして居た膝を合せた。弟を見るたびにゆき子は何時も、誰れにも理解せられず家庭の人々から離れてゆく若い苦みを、新らしく得た一人の姉に繋がうとするあせり心、其れが水晶の樣にはつきりと冷かに、それでいたましく眺められた。「そりやだめよ誠さん、誰れだつて一人ぢあ有りませんか、誰れだつて一人ぢあ有り

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ませんか。」とゆき子は大きい聲でいつて了ひたかつた。

二人の話がとだへると、入り代り來る風呂の客がまだ勝手の方で賑かなのに、又何處からか伊勢音頭見たいな唄や、笑ひ聲などが聞え出した。

「何處でせう？」とゆき子は笑顔で弟を見て、それから椽先へ出て見ると何時の間にやら雨はやんで、重たい暗の中から酒にでも醉つたらしい上つ調子な太い聲や、唄などが手に取る樣に流れて來る。耳をすまして居た弟は、「アヽ今夜は炭燒の入札だと見える」といつて敷居の上にのび上つて見たが何も見えないので「彼處の垣迄行くと見えるんですがね。」と幼い頃を思ひ出した。

やがて二人は庭下駄はいて、雨上りの木の間を露にぬれ乍ら深く這入つていつた。「コヽから／＼と小言でいふ弟の肩に摑つて杉の生垣の間から覗くと濃黑な暗の中に少し離れた隣家の家の中が繪の樣に浮いて居た。座敷や臺所の界ひの襖をあけ放つて、其處こゝに四五人づゝかたまつては、一升德利を前に置いて面白相に唄つたり、戯談言ひ合つたり、中には何か議論がましい事を言ひなどして盛に呑んで居る。屈强な山の人達のいつわらぬ醉心地が黄色い光りの中に漂つて見えた。

「大分醉つて來ましたね、好いほど醉はせてから入札せるんです。スルト馬鹿に大きい氣になつてウンと張り込むんぢあ相ですよ。酒のない時はすつかりだめだと聞いてます、今夜のあの調子ぢあ屹度甘くゆくでせう。ハーヽ、世は酒なる哉ですね。」

「ホヽ、あなたはいけないくせに。然し面白いぢあ有りませんか。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「イヤ僕近頃其の味をおぼえたんですよ。」と弟は元氣にいつて又垣から覗いた。

四

例の二疋の洋犬がキャン／＼とかたみに鳴いて、山のあしたの靜かな空氣をゆるかした。何時もこうした犬の鳴き聲て人々の出入を知る山の家々ては、今朝も道傍の家の女達は急いて障子を細めに開けいたづら盛りの小供達は周章て馳け出して來て、恥し相に其れて居て遠慮なく人力車のわきに輪を作つた。

「もうお乳は召し上らないでもよろしいの。」などゝ玄關を下る迄、ゆき子は何か小言て夫にいつて見たかつた。

「お母樣どうぞお身體をお大事に。」

「坊ちやん又來てな。」と可愛いがつて貰つた祖母に頭をなでられて、車の上の母に抱かれた男の子は二歯の口を綻ばせて笑つた。

ほんに山家は何もなうてなと、母や叔母か心配し乍ら新聞紙て手頃の荷物にこさへてくれた百合根や江戸豆や、山の芋などの包みを、大事に人力車のけ込みに入れて、なつかしみのある山の人々に別れを告げたのはまだ朝が早かつた。家の後へ廻つた辻でも畑へゆく女や男がじつとさぐる眼つきして立つて居た。「ヤー嫁さんぢあ。健次さんの嫁さんぢあ。」と小供が面白氣に騒いだ。亂れた髮した三十位の女が丁寧にお辭儀したので、あはてゝゆき子は思ひきり親しげに笑つて頭をさげた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「十一時に發車るぢあて急がつしえ。」と健次をのせた前の車夫に聲かけて、二臺の車は澄んだ涼しい空氣を切つて、勢よくガラッ／＼と滑つてゆく。風をふくんで猫背に見えた車夫の白いシャツの眞中から、次第／＼に汗がしみ出て、やがて日に燒けた肌が見え透ける程ピッタリとぬれた肌にすい付いていつた。日は大分高く暑くなつた。

來た時とは反對にゆく山の涯道は又新らしく面白かつた。杉の木立の茂つた中で可愛好い鳥の鳴き聲もきいた。岩の上から咲き亂れて居る萩の下に尻つぽが光る紫て頭の方が銀色した、とかげが這つて居たりした。十四許りの赤い帶した山の娘の、薪をのせた大きい車と生憎崖が草ばかりの細道でゆき合つた時、ゆき子はしつかと男の子を抱えて息もつめた。すれ違つてからも暫らくゆき子は、もしあの時に落ちたらとそれからそれへ考へられて恐ろしく美しい幻を追つて居た。

驛へついた時にはもう發車迄五分しかなかつた。車夫が酒手の禮を云ひ／＼流れる汗をふきながら行李を受付の窓まで運ぶと、夫はゆき子から男の子を抱き取つて改札口の方へ歩いていつた。

屋根もないプラットホームの白くほこりの掛つた腰かけに、搖られ心地の身體を落ち付けると見るともなく眼を射るレールの白い光り、襞を重ねて迫る山々を背景にして往來する驛夫の疲れた面や、田舍の人々の話して居るゆるい調子などが何となく輕い倦怠と、旅の終りのわびしさとを起させる。フイと夫に抱かれて居る男の子を眺めた時、ゆき子の心は夫に縋り付きたい程どうにも頼りなかつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「私うちへ歸るのは嫌やになつちやつた。」と突然からいつてゆき子は夫の傍へよつていつた。

「何處かへ連れてつて下さいませんか。ねお願ひですから。」と如何にも熱心に訴へる樣な言葉を健次は驚いて、「大變うちへ歸りたかつたんぢあないか。」と聞きたゞす樣にいつた。

「いゝえ、うちなんかへ歸りたくないんです。」

「ぢや　何處へ行かうといふんだ。」夫の大きい眸が動いた。

「あちらのあなたのお家(うち)へ。ね好いでせう、一寸で好いから、ほんとに一日でもようござんすから。」

「それならもつと早く何故(なぜ)話さない、今更遲いぢあないか」と早口にいつて「僕の家、K市へゆこうと云ふんだな、下宿へなぞ赤ん坊を連れ込まれちあたまらない。」と遂には戯談にして了つた。

ゆき子は默つて夫のかほをじつと見て居た。たまらなく淋しい呆氣ない、つまらない氣になつてやがて眼をふせて吐息をした。己れの凡べてを夫の胸に投げ出して初めて得た心の平安、それを又みす〳〵こわされてゆかねばならぬ自分の運命が、今じつとかうして居られない程ゆき子の心をいらだゝせた。

けはしい傾斜の山路から、轟々と踏む足をふるわせて汽車は下つて來た。

――完――

暗闘

岩野清

一

『御免なさい。』

玄關の次の間の書齋に、文藝雜誌をみてゐた君子は、この聲をきいて、一寸首をかしげた。

『誰でせう、聞きなれない聲ですね。』と側に机をならべてゐる良人に小聲でかういつた。うつ伏しになつてしきりに筆をはこんでゐた良人は、

『うむ』と、うなつたのか、返事したのか曖昧にかう云つて、矢ッ張り一生懸命に書いてゐる。君子は、それでもまだ誰だらうと考へてゐるやうな顔をして茶の間から客間を通つて玄關の障子をあけた。

『あなたは誰樣ですり・』と云ひながらついぞ見た事のない人だと心で思つてゐた。

細かい格子縞の黒つぽいセルのコートを着た、丈の高い二十四五の廂髮の女がそこにゐた。

『田村はゐますか?』

コートの女は棒の樣に立つたまゝかう云つた。が、其せまい額の下に底光りのする青白い目が、

『留守の筈はない。』と云つてゐる樣にみえた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『何て失禮な人だらう。女のくせに人の良人を呼びすてにするなんて――』と、君子は心にむッとした。

『あなたの、お名前は?』詰問する様な調子でいつた。

『あたしは、清水です。』

女の氣を張つてゐる樣子が呼吸のせまつてゐるので分つた。

『清水!』と君子は心で今一遍繰り返してふと氣がついた。

それは丁度三四日前に、良人がもと詩人仲間であつた榊原良明と云ふ人の宅へいつた時、例の女が此間突然やつて來てね。君にかした物を返してもらつてくれと、賴んでいつた。と友人から聞いた通りを君子に話して『いづれ此家へやつてくるだらうよ。』と良人が云つたのを思ひだした。

田村には君子と一緒になる前に長年連れ添つた年上の妻があつた。父親が老て下宿屋をしてゐた。其父親が亡くなつてしまつたので長子に生れた彼は自然其家を引つぐ事になつた。

彼は下宿營業を其老妻にまかして自分は自分の思索や文藝生活を續けてゐた。清水お鳥は其下宿にゐたのであつたが、田村といつか關係が出來てしまつた。お鳥と老妻との間にはお定まりの嫉妬喧嘩があつた上句元々老妻をきらつてゐた田村は家と妻とをすてゝお鳥と一年ばかり住んでゐた。君子と一緒になつたのは、つい三月ばかり前である。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『あ、これが例のお島さんか。』と君子は好奇心も手傳つてぢッと其女の顏を見入つた。

『左樣ですか。』と、君子は初めて得心がいつたやうにうなづいて、『一寸お待ち下さいまし。』から女に答へておいて、急ぎ足で書齋に引かへした。

『淸水がまゐりましたよ。』

『えッ？』

『どうします？』君子は良人の驚いてあげた顏を見ながら、自分も急に不安な心持になつて胸をどき〱させた。近い玄關にきこえてはと、憚るやうに小聲でいつた。

『ゐると云つたのか？』これも同じ樣に不安らしい目をした。

『えゝ。』

『ぢやァ仕方がない。座敷へ上げて置いてくれ。』

玄關へ返つて、

『どうぞお上り下さい。』

君子はかう云つて置いて、座敷へ案内した。

女は玄關でこそ〱コートをぬいて、やがて、座敷の敷居ぎはにおづ〱座つた。

『さあ、御遠慮なくお敷きなさいまし。』

座敷團を、堅くなつてゐる女の方へ押しやつた君子は始めてまともに女と對した。噂にきいてゐた程色も白くはない。それにあの目鼻立のこせこせした顔はどう見ても可愛氣がない。貧相な女だ。こんな女をいい氣になつて愛してゐたのかと思ふと良人の女に溺してゐたさもしい心が嘲つてやりたい氣がした。

君子は心で、こんな事を考へながら、

『よくいらつしやいました。』と、改めて挨拶して、『只今、書き物をしてをりますから――』

君子が火鉢に火を入れたり、茶をばこんだりする間、女は伏し目になつて、

『どうぞおかまひなく。』などゝ時々いつた。女は、迷惑さうに縮こまりながら、折々ぬすむ様に君子の丸髷姿を物珍らしさうにみたり、左右に書籍のぎつしりつまつた大きな書棚や、曾て芝の田村の家で見覺えのある達磨のかけじを見た。

お鳥は自分が田村と暮した時分のみしめなありさまと引くらべてみた。せめて小さい家でもいいから一軒の家の主婦になつて暮したかつた。だから度々田村にも其事を云つたけれど、『家なんぞ持つと却て厄介だよ。それに二人てのん氣に出て歩かれなくなる。』なんて云つて、とう〳〵肩身のせまい二階貸ばかりしつゞけた。そんな事を云つた癖にあの女とはこんな門構の家になんぞ這入つて――と羨やましくもあつた。

君子は立居の間に、これまで、お鳥について良人から聞いた色々な話しが思ひ出された。良人の弟をだまさうとした事、少しの動機で良人の友人と私通した事。

『食ふためには、どんな男にでも、肉體を弄ばせる女。』と云ふ輕蔑した心が起つた。

二

『どうした。』男は自分の座蒲團に坐つて、お鳥の方に目をむけた。

彼は今、目のまへにゐる女の姿をみると去年の末盛岡で別れるまでの、二人の履んできたさま〴〵の道が思ひ出された。見覺えのある被布、みなれた顔、考へ込む時に出る額の皺をみると、其色のさめた被布のおほつてゐる下の白いふつくらした肌まで見えるやうな氣がした。憎いやうな、懐かしいやうな、とりまぜた感じが胸にわいた。

『早く、あの婆ァを離縁して、あたいを女房にしてくれ。』とあまりやかましくお鳥に迫まられるのがうるさくなつて、友人の佐藤に頼んで、お鳥に別れ話しをさせた。すると其佐藤にだまされて、とう〳〵やけまぎれに關係してしまつた。さうなると自分も殘り惜しくなつて、またお鳥の所へいつて、

『どつちにつく?』といつたら、

『お前につく。』とお鳥は答へた。それから又一時お互に熱くなつた當時の甘い夢が思ひ出された。

『あの羽二重の肌を、今はどんな男が自由にしてゐるだらう?』と嫉ましい様な氣がした。

『あの病氣はもう直つたのかしら。あんな青黒い色をしてゐる所を見ると、まだなほり切らないのか

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

もしれない。』
　こんな事も思つた。
『一緒になるつていつてた男はどうした』『札幌から一緒に歸つて來る時にお鳥がのろけ半分に云つてゐたのを思ひ出して、其後どうなつたか知りたかつたのでかう彼はいつた。
『ふむ、そんな事をいふ必要はない。それよりも、お前が樺太にいくとき質に入れたあたいの着物を返してもらふ。』
『返すことは返すさ。然し今すぐと云ふ譯にはいかない。』
『東京へ歸りさへすれば、いくらでも融通はきくといつてたぢやないか。』
　わざと隣室の茶の間に坐をはづしてゐた君子はこんな問答をきいて、
『なんて不作法な口をきく女だらう。』どうせ相手にするには足りない女だとは思ひながら、自分の良人に對して無禮な口ぶりをきくと、憎くもなつた。
『心配しないでもいゝさ。返してやるよ。』彼の聲はなだめるやうであつた。
『お前の云ふことなどあてにならん。今すぐ返へせ、すぐ返へしたらいゝぢやないか。』
『…………』
『何日返すんだ。』
『今月の末に返してやる。』

『そんな事をいつて、ごまかすつもりだらう。誰がだまされるもんか。今返せ、返さなければいつまでもこゝにゐてやる。』

『そんな無理をいつたつて、今金がないんだ、噓なんぞつくものか。おれが返すと云つたら返してやらアね。』

『そんなら證文をかけ、口でいつた事などはだめだ。』

『證文なんて書かなくッたつて確かだよ。不安心だと思つたら、お前がとりに來りやアいいぢやないか。』

『どうせこつちから別れてやつたんだから、お前なんぞに未練はない。只貸したものさへとり返へせば、誰が二度とお前のとこへなんぞ來るもんか。』

『こつちから別れてやつた。』といつたお鳥の言葉を、君子は隣室で冷笑してゐた。盛岡で田村においてきぼりにされて、後からお鳥が知人から汽車賃を貸りて上野ステーションについた時、田村に電報て、スグコイと打つてよこした。田村は其二三日前お鳥がまだ田村の家に下宿してゐると思つて、お鳥の兄から田村の宅へ電報が届いてゐた。それを彼が何心なく明けてみると、お鳥が又外の男と一緒になる約束でもあるらしい意味がよめたので、もう世話をしてやる義務はない、と思つたからそれつきり行かなかつた。と君子は良人から聞いてゐた。それが本當なら、お鳥から切れたのではない。彼から捨てられたのだ。それを近頃一緒になつた私だから知るまいと思つて私の前に體裁を作るつもり

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

てあんな事をいふのだらう。

「いゝ氣な女だ。」とお鳥の淺はかなみえを笑つた。君子はそれにつれて、今迄良人から聞いてゐたお鳥の性行を心て批評した。驛場の馬でも乘りかへるやうに、男から男に移つてゆくお鳥の無恥をいやしむ心が深くなつた。

あの唐もろこしのやうに赤い毛、こせ／＼した目鼻立、年寄じみた額の皺、あの顏で一つぱし容色自慢だつたのかと、吹き出したい位おかしくなつた。

隣室では、お鳥が、

「證文を書け、證文を書け。」としきりに言ひ張つてゐた。

「君さん。」彼は隣室から呼びかけて、「私の印形と筆をもつてきて下さい。」と命じた。

お鳥は、田村が君子に對して丁寧な物言ひぶりを聞くと、自分を羨やましがらせるために、わざと田村が見せつけぶりをするのだらうとも思へた。然し田村の平生を知つてゐる彼女は彼が女に甘い男だと云ふことも分つてゐた。自分と一緒にゐた時でも、よく原稿を書きながら、側に寢てゐる自分の方へにこ／＼笑ひながら首を突き出して、「鳥ちやん」などゝ云ひながら顏をおッつけたり、手を握つたり、人がいやがるのを面白がつて煙草の烟をふつかけたりしたつけ、今でもその通りあの女を可愛がつてゐるんだらう。と妬ましい氣もした。

君子は印形と硯箱を彼の側にもつて行つて默つて置いた。良人がどんな證文をかくか見るつもりて

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

其所に坐つた。お鳥は君子が這入つて來るのを見ると、わざと顏をそむけて南の椽側の方を見てゐた。座敷團もしかず、汲んで出した茶も埃の浮いた儘冷えてゐた。

『これでいゝだらう。』彼は書いた紙へ印形をおしてお鳥の方へ押しやつた。そして君子の方へ目を遣つて苦笑した。

お鳥は、君子がゐるので窮屈さうに右の手を延ばして、其書付をとつて讀んだ。

『ふむ。』とお鳥は鼻で云つて其證文を被布の前をあけて帶の間にはさんだ。

とう〳〵書かしてやつた。これで大丈夫だと安心したやうな顏をした。

もし田村が強く出て、返さないとでも云つたら、から云つておどかしてやらう。と道々考へてきたが、案外先の出方がおとなしかつたので、張合ぬけの仕たやうな感じもした。

三

『寫眞の方はどうした。』彼はこれで一段落ついた、と延々しい顏をして、近頃のお鳥の生活をさぐつてみるつもりでから云つた。

『そんな事はどうでもいい。』お前なんぞに何も打明る必要はない、と云ふやうな口ぶりであつた。

『もうすつかり技術は覺えたのか？』

『うむ。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『ぢやア獨りでも寫眞が寫せるのか。』

『さうさ。』とお鳥は胸をつき出して、『覺えたといへば、獨りで寫せるに極まつてゐる。』

彼はお鳥のかうした傲慢な態度を、人に吠えついた犬が、ステッキでおどかされて、恐れて遠くへにげながら、まだ虚勢をみせるために一層聲高く吠えてゐるのを見るやうに、笑止でもあり、哀れにも思つた。

『さうか、それは結構だ。』とおだやかに微笑しながら、『おれも、夏にでもなつたら、もう一度北海道に遊びにゆくつもりだ。』

『行くがいゝさ。垢だらけの着物をきて友達の家でも食ひつぶしてゐたらいゝだらう。』

君子はこんな、みぐびつたお鳥の言ひ草をきくと、『何だ自分のなりを見ろ。自分は食へないから、あつちの男、こつちの男と娼妓のやうに肉を賣つて生活してゐたんぢやアないか。』と罵つてやりたいやうに腹が立つた。

それを咎めもせず相變らずにや〳〵してゐる良人の無關心な顏を見ると、自分に裏切られたやうな氣がして反感を起さずにはゐられなくなつた。

一旦、友人にたのんで別ればなしを持ち出しておきながら、それが動機で其友人と關係してしまつた女が殘り惜しくなつて、又のめのめとお鳥と關係したと云ふ意地きたない男の心が淺ましくなつた。

二人が他人に話せないやうな惡病にとりつかれて、女は男を恨み、男は女を死んでしまへとまで呪

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ひながら、矢ッ張り妖婦の肌を忘れられなかつたと云ふぢやアないか。

『二人の間には、獸性の血が共通してゐるんだ。そして腐つた惡血のにほひをお互に忘れられないんだ。』

君子がかう思つて良人の顔をみると牝のにほひを追つて狂奔してゐるさかりのついた牡犬のやうに見えた。

又お鳥の方を見ると、多少安心もしたので先刻までの氣の張りもゆるんだために、筋肉の働らきのとまつた死人の顔のやうに、皮膚がだらけて、青黒い毒々しい色をしてゐた。

『腐つた肉塊だ。』と、君子は心で冷たい笑ひをもよほした。が、其腐つた肉塊を抱いてゐた男が良人だ。と氣が付くと、良人の肉體にも、赤黒い毒血が流れてゐるのだらうと思つて興ざめてしまつた。

君子は硯箱を取上げて急いで座敷を出た。

四

お鳥が立上る氣配がしたので、再び座敷に行くと、お鳥は立かけた腰を下ろして、

『お邪魔いたしました。』と案外おだやかな挨拶をした。

『まあい丶だらう。ゆつくり遊んでいつたらどうだ。』と、良人の引きとめるやうな口ぶりにも、君子はもう前の様に興奮しなかつた。

『どういたしまして、又お遊びにいらつしやい。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

自分の心で何とも思つてゐない事を見せるつもりで微笑しながらお愛想を云つた。

玄關でお鳥がコートを着てゐると、君子と一所に立上つて來た良人は、

『まだそのコートを持つてゐたのか。』とお鳥に云ひかけた。

彼は昨年、札幌の呉服屋でお鳥がセルの單物をコートに縫ひ直ほさせたのを思ひ出したのである。君子もそれを聞いて、其コートに目を付けた。『手切れ金のつもりで、お鳥を三越へつれて行つて、單帶や、セルの單物をこしらへてやつた。』と良人が云つたのはこれか、どうりであの色のやけた牡丹色メリンスの被布や、洗ひざらした瓦斯織の着物には過ぎてゐると思つたが、と心でうなづいた。

お鳥はそれには答へないで、さつさと下駄をはいた。お前なんぞにもう口もきいてやるもんかと云ふやうに口を堅く結んだ顔で、上目に冷たく彼をにらんでおいて、わざと君子の方に向つて默禮した。

『又いらつしやいまし。』

尻尾を卷いて逃げてゆく宿なし犬の、淋しい姿をあはれむやうな心で君子は女を見送つた。

——をはり——

タイピスト

神崎　恒

龍子は仕立おろしらしい大島お召のコートを着て手にマッフを篏めて居た。半襟も過日のと違つた黒地に細かく蔦の葉を縫ひ潰したのが掛つて居る。さう云ふものが一目で郁枝の注意を惹いた。

「先日は失禮。」

事務室の入口でざつとした挨拶を交した二人は、室内から視線を避けて壁際に一寸立止まつた。龍子は、何となく落付かない様に、

「貴女今お忙しいのぢやなくつて？」

と郁枝の顏を見た。

「いゝえ。ちつとも。」

「ほんたう？　お邪魔しちや惡いわ。」

「全く閑散なんですよ。火鉢にばかり當つて居るのでこんな赤い顏して、」

郁枝は笑つて頬を兩手で抑へた。皮膚の少し荒れた指には、久しく龍子の眼にも慣れたルビーの指環が不相變篏まつて居る。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「若しよろしければ其邊少し歩きませうかお話があるのよ。」

「どうせ閑散てすから休憩室へ行つてもようござんすわ。」

贅澤な家具が有樂座の舞臺面の樣に、種々の意匠を凝らして並べてある間を、二人はそろそろ歩いた。天井の明取り（あかりとり）から落ちる光線を斜めに受けた三階の賣場は、花模樣なぞを織つたテーブルクロースが、浮き上つた樣に鮮やかに見える一面と、滑かな光澤に富んだマホガニー製の戸棚等が、只黑ずんだ陰影の樣に見える一面とに自然と分れて居た。その暗い方の一隅にはストーヴの火が盛んに燃えて洋服を着た血色の勝れない店員が二三人、あたりながら此方を見て居た。

「御覽なさいな、先達の晩のコートの樣ぢやありませんか、」

と郁枝は西洋人向きのキモノが澤山衣桁に懸つて居る中の一つを指さした。近く歩みよつた龍子は其の壁羽二重の袂の先きに手を觸れながら、空色地に寫生風の藤の花を肩から袖へ一面に刺繍した華やかな模樣を暫く見上げ見下ろした。つい此間帝劇のコミックオペラの時逢つた何處かの令孃が、丁度此の通りのコートを着て居て、滿堂の視線を集めて居たことは、まだお互ひの記憶に新らしかつた。

暫くして龍子が、

「あのお孃さんのはも少し地が青味がゝつて居た樣でしたのね。」

と云つた。

「えゝ、これは少し色が冴え過ぎてます。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「貴女には此の方が却つて似合ふかも知れない。」

「まあ飛んだことを！」と郁枝は羽織の袖で輕く龍子の背中を打つ眞似して、「それよりか龍子さんなんぞがお召しにならうものならきつと評判ですわ。閨秀畫家の新意匠ですもの。」

「ほゝゝ、こんなお婆さんが貴女それこそお笑ひ草ですわ。」

龍子は靜かに打消して笑つた。郁枝より四つか五つ上の龍子は、もうそろ〳〵三十に手の屆く年だが、白粉氣の少ない顏は艶々しい好い色をして居て、少しも老嬢らしい陰氣な影がない。丈の高い肉付の締つた立派なスタイルは洋裝がさぞ似合ふだらうと思はれた。龍子は三年間佛蘭西に畫を學んで一昨年の暮歸朝したのである。

「あゝ云ふ服裝は帝劇でなければ見られませんのね、でも龍子さんはあまり御賛成なさらないでせう？」

「さうですねえ、一寸面白いと思ひましたけど何方かと云へば、純粹の日本風が好きですね。」

「彼地(あちら)へいらしつて見飽きなすつたからでせう。」

キモノの棚の前をぶら〳〵しながらそんな話をして居る間は、郁枝も何だかのび〳〵した氣持だつたが、ふと横手の大きな姿見の中を見ると、頭の先きから足の先きまでスッキリと整つた龍子とならんで、娘でもなし女學生でもない職業(プロフエツシヨナル)的な女に共通の一種の型に篏まつた自分の姿があり〳〵映つて居るのに、我れにもなく情ない氣がした。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「階下へ行つて見ませうか？」
と龍子を促すと、「えゝ」と頷いた。階段の上で郁枝が思出した様に、
「龍子さんお話とおつしやつたのは？」
と訊くと、龍子は笑つて無言のまゝ立止まつた。丁度下からドヤ〳〵上つて來た小供づれの女をやり過ごして、郁枝の傍へ顔をよせながら囁く様に、
「やつぱしいつもの用なのよ。」
「芝居？」
「えゝさうでせうと思つたわ、」
と顔見合せて莞爾した。休憩室へはいつて安樂椅子に腰を下ろすと、龍子は懐から歌舞伎座の切符を一枚出して、水難救濟會の慈善興行で無理に押付けられたのだから、御迷惑でも是非一所に行つて下さいと云つて郁枝に渡した。郁枝は行くとも行かないとも云はず切符を掌に載せたまゝ一寸考へた。
「三日の中どれでも御都合のいゝ日にね、今度は二長町の連中ですからつまらなくつて御いやでせうけど……いゝでせう、」
「でも戴いちや濟まないわ、」
郁枝はまだ決しかねて居る。
「そんなことあなた、貴女も隨分義理堅いのね。いらしつて頂戴よ構はないから、」

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「えゝ有難うございます、おやお伴いたしますわ。」
郁枝の快い返事を聞いて龍子は初めて安心した樣な顏した。それから暫く芝居の噂に時を移したが、郁枝が其中畫を見せて貰ひに行きたいと云ふと、龍子は手を振つて今新らしくアトリヱを建てゝる最中だから、一枚も描いたのがないと云つた。このアトリヱを新築すると云ふ事が郁枝には心を掻き亂す樣に羨しく響いた。
「まあそれや結構ですわね。いづれなんでせう此の秋の展覽會には御傑作が出るのでせうね。私も樂しみですわ。」
「どうですかわかりませんよ、私は氣が向かなければ何時迄も抛つときますから。よく兄や姉が笑ふのですよ。お前の畫は皆な半出來ばかりだつて。」
「其代りちやんとお出來になるのは會心の御作ばかりでせう。」
「いゝえどう致しまして。」
龍子は頭を振つて快活に笑つた。郁枝も一所に輕い微笑を見せはしたが、心の中は妙に奇々して居た。
「畫はなくつてもいゝでせう、お遊びにいらつしやいな。此節段々お料理が巧くなりましたから一つ腕を振つて貴女に御馳走しますわ。」
「えゝ、いづれ其内にね。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「きつと？　貴女は其内々々つてなか〳〵いらつしやらないのですもの。」
郁枝の形式的の返事に慊らない樣な語氣で龍子は呟いたが、郁枝は只無意味な微笑を湛へるに過ぎなかつた。
「貴女は生活と云ふ事をどう考へていらつしやる？」
　ふとそんな言葉が口許迄出かゝつた郁枝は、何物かを知らうとする眞面目な眼付きで龍子の顏をぢつと見たが、あまりかけ離れた問題を持出すのが、如何にも自分の押詰つた切ない心持を見透かされる樣な氣がしてよした。洋行歸りと云ふのを看板に別段世間に名を賣らうと云ふ心もなく、親や兄弟に畫室を建てゝ貰つて勝手な時に勝手な畫を書いてそれですまして居られる龍子は、一體どんな心持て毎日を送つて居るのだらう、郁枝は龍子を見る度びにそれを聞いて見やうと思はない事はなかつた。けれども昔お孃樣同士の交際に始まつた二人の間には、どうしてもお互ひに自分自身を投げ出して批判し合ふ程の深みが出來ないのである。龍子は今でもお孃樣時代の交際を續けて居る。郁枝もそれに對しては、昔の生活の名殘を止めた贅澤な服裝をして歌舞伎座の棧敷に坐つて居る時の心持で居なければならなかつた。
　暫くして龍子はもう歸ると云ひ出した。郁枝も見送りがてら一所に室を出たが、きらびやかに陳列された長襦袢や丸帶よりも、賣場の混雜の中に計らず見出した新橋の靜江の姿に、二人はわざ〳〵下りかけた階段を中途で引返して來た。銀杏返しに結つて年增風のくすんだ服裝をした靜江は、〇番賣

場のはづれの椅子にかけて、飽くまで凄艶な素顔を此方へ向けて居る。
「好い顔ですね。何處も批難するところがありません。」
暫く凝視めた後で龍子はホッとした様に斯う呟いた。
「私も大好き。」
郁枝も恍惚と眼を睜つて居たが、忽ち心は靜江の上を放れて外へ飛んで行つた。
「龍子さん、靜江は自分の美を自覺してるでせうね。」
「え？」龍子は不審相に「それやさうでせうとも。」
「あの人はそれを何と思つてるでせう。きつと自分が人に優れて美しく生れたのを滿足に思ふでせうね。自分の爲めに澤山の人が生命や財産を惜氣もなく擲つて呉れると云ふ事を考へたら、自分が美と云ふ大きな力を持つて居ると云ふ滿足を感じないで居られないと私は思ひますけど――」
「さうねえ。でもあの人になつて見たら案外美しいのが仕合でないかも知れませんわ。」
「えゝ、ですけれども其の幸不幸は兎に角として、美と云ふ大きな武器を持つて生れたと云ふ事が人間として生甲斐のあることぢやないでせうか？　丁度天才が尊いのと同じ意味で――」
郁枝は熱心に云ひかけた言葉を切つて龍子が何か云ふかと待つて居たが、やがて自分から打消す様な調子で、
「まあね、私が靜江でしたら思切つてあばれて見ますわ。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「ほゝゝ大變な事になつたのね。」

龍子は深くも心に留めない樣に笑つた。郁枝は其ののび／＼した聲を聞いて何だか自分と遠く距たつた世界に住んで居る人の樣な氣がした。總ての秀でた美しい大きいものに對する度に、郁枝は一種の壓迫される樣な感じと自己の貧弱を嘲る奇々した感じとが、我れ知らず湧き上るのを抑へ切れない。力ある人の力に充ちた生活――それは常に郁枝の憧憬の的であつた。あらゆるものゝ上に高く自己を築き上げやうとする努力――それは絕えず郁枝を刺戟して止まなかつた。

「あゝ靜江！」

郁枝は思はず溜息を吐いた。龍子は聞きとがめて「えゝ」と郁枝の顏を見た。郁枝は無言のまゝ視線を床に落した。

「斯うして日を送る人もある。」

龍子を出口迄送つて引返した郁枝は、懶い步みを三階へ運びながらさう思つて足をとどめた。手に一片の布を持つた小使は、それを揮發油に浸しては階段の金具を絕えず拭いて居る。拭いては踏まれ拭いては踏まれ引つきりなしに上り下りする人の足の間に身を屈めたまゝ終日塵を吸つて居る此の男の蒼白い顏――郁枝はこれまで強者の生活ばかり見た眼をこゝへ轉じた。この店の中だけでも樣樣の人が樣々の生活をして居る――さう考へると周圍を視る眼が自ら和らいで行く樣な氣がした。

手紙

荒木郁

冬の夕暮時、私は北向の四疊半でこの手紙を認めます。この字を御覽になつたら私の手が奈何に震へてゐるかゞお分りになるでせう。そして落着いてゐないといふことが……。眞個に私はこの手紙を書く爲めに幾日を費したか知れません。たゞもう書き始めると妙に戰れて思ふことが入り亂れて、おまけに、貴方の姿や、あの優しい初心な動作(これが私には不思議な誘惑なのです)などが幻のやうに浮んで來て、最後の袂別の日に被有つた――もうお互に會ひますまい――といふ慘めな言葉迄が耳の側へちよつくのですもの。

けれど今日はどんなことがあつても、この手紙はお送りしなけりやならない。

お別れしてから既う半年近くになりますのね、その間お便りをしなかつたといふことを思ふと、私、怖ろしいやうな氣がします。まああの長い間よく我慢が出來たものだと思つてね。だが秀夫さん、鳥渡考へて御覽なさいませ。私は今迄のやうに貴方へお便りしないで、夫一人に仕へてゐた方がよいものだかつて。

世の中には隨分上つ面な形式的な事許り多いのですがその中でも、夫婦の關係位妙ちきりんなもの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

はありません。愛を至極便利な機械かなんぞのやうに取扱ふのです。それを手際よく扱ふものが貞婦とか賢夫人とか云ふ名前を貰ふことが出來るのです。貴方は未だこの結婚とか夫婦とかいふ窮窟な境地にお住みになつたことがないから御承知ありますまい、だから、私は是非お話をしなければならないと思ひます。それは私達二人がこれから造る世界、情人の幸福を、認める爲めに、又、さうせねばならぬといふことを貴方に知つて頂きたい爲めに、私はかきます。

　夫はいつもにこ〳〵して私に必要なものを與へてくれます——髮飾だの指輪だの甘しいものだの、それから朝めさめた時には長い接吻だのを——けれど私は一度も心を貰つたことはありません。又、夫も私の心を觸らうともしません。唯々私の笑顔と甘へたやうな振り（これも實は男の空想が造り出すのです）だけを見ればそれでよいのです。で、私も夫の襟にからみついた手の先で着物の塵を落したり、ほころびの絲を結んだりするのです。而して、貴方の首の邊りや、始めて貴方の紅い唇に觸れたよるの樂さを思つて夫の首を抱きしめるのです。

　それから、一日の中、ふら〳〵と門口まで出て見る時は、夫の歸りを待つのぢやなくつて、萬一か貴方に遇ひはしまいか、といふ望の爲めに、長い時間ボツンと空を熟視て、そつと貴方の御名を呼ぶのです。小砂雜りの冷めたい風が私の前をそつけない顏して素通りして了ひます。通り掛りの人達は疑り深い眼をして——此の寒いのにお前は何をしてゐるのだ——と云はない許りにぢろ〳〵振り返りながら行きます。それから、又或る人は妙な種類の女とでも思ふのか幾度も〳〵私の前を行き戻りし

て、その上句に向ふの電信柱の蔭によつて口笛を吹くのです。私はそれ等の人々の爲すさまを氣に止めながらも倘ほ家にはいつて了ふ氣にはならず、小供の時に習ひ覺へたつばめの歌を唱ふのです。あのつばめの歌は貴方も御承知な筈てしたわね。て、それ等の莫迦氣た人達の中にどうかすると脊の高い人や、貴方に酷似な姿の人を見出します。兎も角二十四五歳の卑しからぬ青年を見る度に私の胸は躍るのです。心臟は唯烈しく何かの叫を發します。故何だか知りませんが心を靜にしやうとしても靜まりません。そして眼前を通る人々はどれも〳〵貴方てなけりやならないと迄思ひ込むのです。

私の部屋は臺所に近い汚ない四疊半です。だが、北向きの窓は低くつて、裏口へ續いてゐる前の小庭には大人が自由に隠れることの出來るやうな叢があります。水道の水がポタ〳〵と時折思ひ出したやうにたれる音が手に取るやうに聞える頃には、もう近所の話聲も、高調子な女の笑聲も靜つて了ふので、私は『この部屋には今私獨りきりだ、夫は眠つて居る、女中も高鳴だ、こんな夜にはどんな事でも出來る、萬一も貴方が來なされば、私の座布團の上に座らせて、久し振りで若い貴方の膝によりかゝることが出來る。そして右の手を貴方の首にからませて、唇と唇とをつけて……幸福な時をつくることが出來る』と考へます。斯んなことを思ふ夜刄蟲が障子と雨戸との間に這入つて逍場を失つてか、ぢたばたやつてゐました、私はその音をそれと氣附かずに、袂てそつと戸を押へて障子を開けました。それから硯の水を敷居にたらすと雨戸は音もなく開かるぢやありませんか。』まあその開いた時の氣持、ちよつと想像して見て下さひな。

貴方にはお分りになるでせう。女の優しい「ねすみ」の氣持が……
青ざめた月が私のしぐさを蔑むやうにギロッとした眼で私の顔を愧しい程覗くぢやありませんか、莫迦にされたやうで悔しいのですがそれでも……私は誰も居ない庭へ寢衣のまゝ降り立つて叢の中をこつそり探して見るのです。こんな時にはもう身も心も總べてが貴方のあらぬ影に左右されてゐるのです。

私はこれ迄書いてほつとしました。私の家庭はこの通り、けれど夫婦の關係といふものはこれでも無事に濟んでゆくのです。私も貞婦の一人なのです。けれど私自身はそんな言葉は頂きたくない。それよりも、人間なら人間らしく眞面目な戀に確り抱かれてゐたい。例へそれが恐ろしい罪惡の名の下に支配される行爲でも……ふるへて僞りの日を送るよりも、形式はどうあらうとも心と心とをふれ合ふことの出來る生活に這入りたい。

私達は會つてもよいのです。來月の始からは丁度夫も不在です。

秀夫さん。あの部屋にゆきませう。彼處は貴方の家からも、又私の家からも近くてよい。歸りたくなつたら直ぐにも歸れる。貴方だつてよもやあの部屋をお厭だとは仰有いますまい。小さなガラス窓に集つてくる眠つたやうな草原や海、一體に薄暗い一色のなかからあの曉方の青白い星が輝いてゐたぢやありませんか。その時貴方は『忍足に歩いてゐる二人の道しるべのやうだ』って仰有つたわね、眞個にあの部屋は私達に相應しい。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私は始めての夜のことは何もかも覺えてゐます。曉方の星は戀の道しるべ……貴方は例も甘いことを仰有るのね、あの星を見ながら抱き合つた二人は他人に聞かれては愧しいやうな話を長い〳〵間語合つたのでしたわ、海の波迄が樂しさうに、ほがらかな歌を唱つて、斷へずくちづけをその岸に向けてゐたぢやありませんか。それにも增して幸福な二人は忘れられない紀念をつくつたのですわ。

秀夫さんよ。直ぐに返事を下さい。『吉』といふ一字と日時とを……

五日と經たない中に、紅い貴方の唇にふれることが出來ませう。その夜には、屹度私の言葉を一聲もお聞にならない中にこの小さな額に下さるものがおありでせう……

——一九一二・三・二六——

附錄

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

四月五日（第一金曜日）より開始

青鞜研究會

社員外の婦人にも聽講を許します。（事務所の方へ御申込下さい）

本會への出席者は極めて眞面目な熱心なものでなくてはならぬ。本會は決して面白いものではない。諸嬢を喜ばさむが爲めに開くものではない。だから豫め御覺悟を願ひます。

モーパッサンの短篇（金曜日）　生田長江氏

ダンテの神曲又は
メーターリング
トルストイ
エマーソン
以上諸大家の書中（火曜日）　阿部次郎氏

毎週火金の二回、午後三時より五時迄
本郷區駒込蓬萊町萬年山（勝林寺）
會費一ケ月金五拾錢
なほ委しくは事務所の方へ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

脚本 叔父ワーニャ（承前）

瀬沼夏葉譯

第二幕

一

セレブリャコフ家の食堂。時は夜半。折々響く夜番の拍子木の音。セレブリャコフは開放せる窓の下なる長椅子により、とろ〳〵と居眠してゐる。其側に夫人のエレナ・アンドレエウナも矢張、椅子に倚つたまゝ居眠をしてゐる。

セレブリャコフ（ふと眼を覺して）誰だ其處にゐるのは？　ソーニャお前か？

エレナ・アウドレエナ。いゝえ、私。

セレブリャコフ。あゝリヨーノチカ（エレナの名を優しく呼ぶ）か……何とも堪えられん痛だ！

エレナ・アンドレエウナ。貴方お足の毛布が落ちましたよ（彼は夫の足に毛布を取上げて掛ける）ねえ、貴方、窓を私閉めませう。

セレブリャコフ。いや、息苦しいからさうして置いてくれ……あゝ今とろ〳〵として夢を見た、左の足が人の足であつた夢を。所が酷い痛で眼が覺めた。こりや足痛風と云ふよりや寧ろ僂麻質斯なのだらう。時に今何時か？

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

エレナ・アンドレエウナ。十二時二十分です。(間)

セレブリャコフ。朝になつたら、圖書室を探してくれ、多分俺の所にバチュシコフ集が有つたと思つたから。

エレナ・アンドレエウナ。はあ?

セレブリャコフ。朝になつたら、バチュシコフ集を探してくれと云ふのだ、何んでも俺の所に有つたと思ふから。だが奈何して還麽に呼吸が苦しいのだらう?

エレナ・アンドレエウナ。お疲れなのです。二晩もお眠みにならんのですもの。

セレブリャコフ。ツルゲエネフは足痛風から、心臓神經痛になつたと云ふことだが、俺もさうでなくつてくれゝばいゝが、年の寄ほど厭な、悪むべきものはない、え、厄介な! 恁う年を取つて來ると、自分ながら厭になつて了ふ、だからお前樣方皆が厭がるのも無理はない、見るのも厭だらう。

エレナ・アンドレエウナ。貴方は何ですのねえ、何んだか貴方のお年を取つたのは、私共が悪くでもあるやうに有仰いますが……

セレブリャコフ。お前に第一に俺は厭だらう。

(エレナ・アンドレエウナは椅子か少し遠へ離す。)

セレブリャコフ。無論お前に一番厭さ。俺も其程に馬鹿でもないからよく解つてゐる。お前はまだ年は

若し、壯健だし、綺麗だし、生活を欲してゐる。然るに俺はもう老人だ、殆ど屍も同然だ。何うして之が俺にだつて解らんことがある。そりや勿論今まで俺も生きてゐたのは、馬鹿なことであつたのだ。だが、まあ待ちなさい、其中に俺もお前方皆を自由にさせてあげるから、さう何時までも何時までも皆を引張り附けては置かん意だ。

エレナ●アンドレエウナ。困つて了ふ、どうぞもうお止め下さいましと云ふのに貴方。

セレブリャコフ。さうして見ると何だね。皆は俺の爲に困つたり、退屈したりして、たゞくさ〳〵してゐるのだ、俺の爲に。さうして俺ばかりが一人、生活を樂んで滿足してゐる、と。まあ然う云ふのだね

エレナ●アンドレエウナ。もう澤山々々！貴方はさうしてたゞ私をお苛めなさるのです！

セレブリャコフ。さうだ、俺は皆を苦しめてゐる。

エレナ●アレドンエウナ。(眼に涙を湛へて)可加減になさつて下さい。ぢや貴方は私に何うしろと有仰るのです？

セレブリャコフ。何うせんでも可い。

エレナ●アンドレエウナ。それぢやもうお止め下さい。ほんとうにお願で御座います。

セレブリャコフ。然し不思議ぢやないか、若しイワン●ペトロキチか、或はあのお婆人のマリヤ●ワシリエウナが―何か言へば人は何でもなく聞くが、若し俺が何か一言でも云はうもんなら、それがお

前方には皆自分の身の不幸を感じさせる種となる。多分俺の聲までもいやなのだらう。然し假に俺はさういやなものだとして、又利己主義なものとして、又專制なものであるとしてだ、だがこの老年に死じて、多少の利己主義は許してもらふ權利は無いものであらうか、或は之に當らんと云ふのか。俺は聞きたいんだが、この老年を安んずる人々の親切を敢て自分に受ける權利は無いんだらうか？

エレナ・アンドレエウナ。ですが誰も貴方の權利を何う恁う申しちや居りませんわ。（窓の戸が風にばたくと搖れ動く）おや、風が出て來ました、どれ窓の戸を閉めませう。（窓を閉る）今にも雨が落ちて來さうな空だこと。誰も貴方の權利をどうかう申しはしませんよ、貴方。

（間。）（庭園より夜番の拍子木の音がして、靜に歌を歌ふ聲がする。）

セレブリャコフ。全て一生の間、學業に從事して、書齋に親み、講座に慣れ、名望ある同僚の中に立つてゐたものが、俄にふと這麼穴の中に落ち込んで了つて、毎日々々愚な人間計りを見て、下らん話ばかりを聞くなんてえのは…俺はまだ生の望を有つてゐる。成功を倚んでゐる。名聲のやかましく揚らんことを希つてゐる。所が此所は全て流罪にでもされたやうな所で、たゞもう、屢、前のことを悲んで追懷し、他人の成功を指を喰へて見てゐるのだ。さうして徒に死を怖れてゐるのだ…あゝ到底堪えられん！到底到底！それだのに猶其上、此所ぢや俺の老年に對しても些とも寛みを與へんと云ふのだ。

エレナ●アンドレエウナ。まあ、我慢なすつて少しの間お待ちなさい、もう五年と六年經つ中には、直に私も年を取りますわ。

(ソーニヤ登場)

ソーニヤ。お父様、貴方御自分でドクトル、アストロフ様をお招びになつて置きながら、彼の方が折角お出になればもう見てお貰ひなさらんのですね、そりや宜しくありませんわ。だつて譯もなく人様に御迷惑を掛けるのですもの……

セレブリャコフ。お前のアストロフなんぞ俺に何が入るものか? 彼が醫學に於ての知識は、俺が天文學に於けると同じやうなものだらう。

ソーニヤ。だつてお父様の足痛風の爲に、此所へ醫科大學の全部をお取り寄せになると云ふことも出來ませんわ。

セレブリャコフ。何でも可い、だか俺りや那麼半狂人と話をするのも厭だ。

ソーニヤ。そりやお父様の御勝手よ。(椅子に掛る)私どちらだつてかまやしません。

セレブリャコフ。今何時だ?

エレナ●アンドレエウナ。十二時過ぎです。

セレブリャコフ。息苦しい……ソーニヤ机の上の水藥を此方へくれ!

ソーニヤ。はい、只今。(水藥を取つて渡す。)

セレブリャコフ。(じり〳〵して)えゝ、これぢやない、物を頼むことも出來ん！

ソーニヤ。あら、お願ひですから、どうぞ駄々を有仰らないで下さい。或は他の方には其れがお氣に入るかも知れませんが、私は御免ですわ。さうしてさう〳〵、もう恁うしてゐられなかつたのだ、明日は早く起きて草を刈らなけりやならないだもの。

(ヲイニツキイ寢卷を引掛けて、手に蠟燭を持つて登場)

ヲイニツキイ。外方は夕立が來る計りの空だ(電閃く。)おゝそら〳〵！ヘレン(エレナの名を佛語で呼ぶ)様、ソーニヤ、もう行つてお眠みなさい、此度は我輩が交代しませう。

セレブリャコフ。(吃驚して。)いゝや、いゝや！私を此所に此の人と殘さんでくれ、此の人は又何かと俺にやかましく並べるだらう、

ヲイニツキイ。だが此の人等にも眠ませなけりやならんでせう。もう二晩も眠りませんぞ。

セレブリャコフ。構はんから早く行つて寢みなさい。さうして貴方も行つて可いです、いや、どうも有難う。まあ、願うからどうぞ舊の我々の友誼に免じて行つて下さい。後に又話しませう。

ヲイニツキイ。(冷笑しながら)舊の我々の友誼……舊の……

ソーニヤ。もうお默りなさいよ、ソアニヤ叔父様。

セレブリャコフ。(夫人に。)おいよ　お前俺を彼の人と此所に殘さんでくれ、彼の人は又俺に喰つて掛るだらう。

ヲイニツキイ。何と云ふことだ！　可笑くなつて了ふ。

（マリナ蝋燭を手にして登場）

ソーニヤ。乳母や、お前お寢みな、もう晩いのよ。

マリナ。まだサモワルも据へつぱなしだもの、お孃様寢る譯にも行きませんや。

セレブリャコフ。うむ、皆寢ることも出來ないで疲れ切つて居のに、俺ばつかりが愘うして樂をして居るのだ。

マリナ。（セレブリャコフの傍に行き優しき物こして。）奈何なさいましたね旦那様。痛みますかね、私も足首がずきずきしてなあどうも。（毛布を主人に掛けてやる。）もう貴方様もこの病氣を久しいこつたゞねえ、ソーニヤ様の先のお亡くなりだつたお母様の、あのウェラ・ペトロウナ奥様がよく終夜お寢みなさらず、氣を揉み揉みなされたゞが……ほんにたあ、何と先の奥様は貴方様を大切になさりましたゞか知んねえでしたゞ（間。）年寄てえものは、まるでな、小供見たやうなもんで誰にかいたはつてもらいてえもんさ、所がはあ、年寄なんざあ人に誰にも嫌はれものさ。（セレブリャコフの肩に接吻する。）さあ、お床の方へ參りませうよ、なあ、さあさあ檀那様。私貴方様に菩提樹を煎んじて上げませう、おみ足を温ためて上げませうよ、さうして神様にお祈りを上げて、お痛みのちつとも早く治るやうにお頼み申しますだ。さあさあ。

セレブリャコフ。（深く感動して）あゝ行かう、さあ、マリナ。

マリナ。どうも私も足首がずき／＼して堪らねえだ。（ソーニャと右方からセレブリャコフを抱えて連れ行く。）の先ウェラ・ペトロウナ奥様は、始終何か氣をお揉みなさつてばかりお出だつた。さうして泣いてお出だつたつけ……其時分はソーニャ様まだかゝら幼少（ちつぽけ）で、さつぱり譯が解らなかつたと……さあ／＼お行（い）でなさい檀那様……（セレブリャコフ。ソーニャ。マリナ退場）

エレナ・アンドレエッナ。あゝ私隨分苦しめられて居りますわ。もう足で立つてゐる力もありません。

ヰイニツキイ。貴方を彼等の爲に苦み、あゝ我輩は自分自らの爲に苦んで、もう三晩（みばん）も寢ません。

エレナ・アンドレエウナ。折合はない不幸な家庭です。貴方のお母様は本と教授（プロフェッサー）の外は皆を憎んでゐます―。教授（プロフェッサー）は私を怒つてちつとも信じちやくれませんし、さうして無暗と貴方を恐れてゐます。ソーニャは父のことを惡く思つてゐますし、又私のことも惡く思つてゐます、もう二週間も碌に口もきゝません。貴方は又教授（プロフェッサー）を憎んで、又お親母様を明瞭と侮辱して入らつしやる。私今日はもう二十度も懊惱（じりじり）させられて、幾度も泣きさうになりました。何て折合はない家庭でせう。

ヰイニツキイ。お止めなさい、又其の哲學は。

エレナ・アンドレエウナ。イワン・ペトロヰチ様、ねえ貴方は教育のお有りなさる、發明なお方ぢやありませんか、ですから皆が恁う今、盜賊の爲でもなく、火事の爲でもない、詰らん些細のことからして恁うして憎み合ひ、仇敵のやうになつて亡びやうとしてゐます此の有樣を、よくまあお考へ遊ばさんといけませんわ、今の貴方の義務は、ぶつ／＼計り有仰つてお出でのぢやなく、皆様

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

を調和なさるのが肝心だと私存じますよ。

ヲイニッキイ。ぢや、まあ第一に我輩と懇親になすつて下さい、貴方は我輩の大事なもの……（彼女の手の許に跪つく。）

ライニッキイ。今雨が降つて來ますよ。すれば自然は皆更生つて、いき〳〵します。だか我輩ばかりは雷雨も息を吹き返へさせちやくれん、晝も夜もたゞもう自分の失つて復歸らん過去の恨みに、恰も幽靈でも咽喉を締めつけてゐるやうに自分を壓しゐる。我輩には過去の生活と云や實に馬鹿な、下らんことに費やされ、あゝ現在と云や、此の意味のない恐しい生活。まあ聽いて下さい、奈何したものでせう、何處へ片附けたものでせう、この我輩の生活と、愛とを、さて何處へ片附けたものでせう？　恰も太陽の光線が、穴の中へ落ちたやうに、我輩の感情も亡びつゝあるんです

エレナ・アンドレエウナ。お止し遊ばせ（手を取る。）彼方へお出で下さい。

エレナ・アンドレエウナ。私貴方が御自分の感情についてのお話をなさるときは、何う云ふ譯か茫然りして了つて、何と申上げてよいか解りませんわ。お許し下さいね貴方。私ほんとうに何を申上げてよいのか解りませんもの。（行かうとして。）お寢み遊ばせ。

ヲイニッキイ。（彼女の行手を遮つて）。まあ待つて下さい、然し若し貴方がてす、此の一つ家に我輩と同じ運命に生活が亡びつゝある、即ち貴方のやうな人のあるのを我輩が如何に傷ましく思つてゐるかと云ふことを知つたなら、奈何でせう！　何を貴方は待つのです？　憎むべき貴方の哲學を貴方

の邪魔をしてゐるのです。これを貴方に解つて頂きたいんです、これを……
エレナ・アンドレエウナ。（熟々とヲイニツキイの顔を見入つて。）イワン・ペトロヰチ様貴方は酔つてお出てすね！
ヲイニツキイ。ひよつとしたら、さうかも知れません……
エレナ・アンドレエウナ。醫學士は何所にお出ですか？
ヲイニツキイ。彼は彼方に居るです……我輩の所に泊つたのです。さう、ひよつとしたらさうかも知れんです。
エレナ・アンドレエウナ。今日も御酒を召上つたのですか？　奈何云ふ譯て、其れは貴方？
ヲイニツキイ。其れでも飲めば、幾分か生活が生活らしくなります……ヘレン様邪魔をなさらんで下さい！
エレナ・アンドレエウナ。前には貴方は些つとも御酒を上らなかつたのに……行つてお寝みなさいましよ、私貴方と懲うして居りますので退屈て御座いますわ。
ヲイニツキイ。（跪いて、彼女の手に縋る。）我輩の大事な貴方……無上な幸福！
エレナ・アンドレエウナ。殘念さうに）。お止しなさい。かうなつては愛想がつきて了ひます。（退場。）
ヲイニツキイ。（一人殘る。）行つて了つた。（間。）十年前に俺は初めて彼女を死んだ姉妹の處で見たのだつた。其時は彼女は僅に十七歳て、我輩が三十七歳てあつた。奈何して我輩は其時に彼女に惚れなかつたか？　奈何して彼女に結婚を申込まなかつたか？　其時なら出來たのてあつた！　さう

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

すれば今はもう彼女は自分のものであつたのだ……さうだつたのだ……而して今頃なんざあ、乾度雷雨に目を覺されて、彼女は雷鳴を恐れて我輩に齧附くだらう、我輩は彼女をしつかりと抱いてやつて、怖かあないよ、俺がゐるぢやないかなんて云つてゐたらう。何とよかつたらうな、考へる計りでも嬉しくなる。あゝ何だか頭が懊惱して來た。奈何して俺は年を取つたのか？ 奈何して彼女は俺の心を解さんのか？ 彼女の下らん倫理や、馬鹿らしい理窟が、やれ世界が亡びるの何んのと云ふ馬鹿らしい思想が、我輩に取つちや實に深く憎むべきものである。(間) 俺は今迄欺かれてゐた！此の憐むべき足痛風の教授を買被つてゐた、彼を崇拜して、彼奴の爲に全で牛馬のやうに働いて居つた。俺とソーニャとは此の所有地から有丈の利益を絞つては、自分等はパンの缺片と雖も惜んで、三厘、五厘、一錢の錢から、數千圓と云ふ金を纒めては、彼女に送金を續けて遣つた。俺は彼を以て肩身を廣くし、張合を得てあつた。彼が書く所に於て、著す所に於て、彼を秀才なるものと見て居つた……何たらことだ、今となつて見れば？ 何の、奴はもう退職して、奴の相場は極つたものだ。是からはもう彼の勞の一頁も殘りやしない。彼は全く名さへ知られんだらう、もう何も無いのだ、石鹼の泡も同樣だ！俺は全く欺かれてゐた…… あゝ馬鹿にも欺かれてゐた……

(アストロフフロツクコートに胴着もなく襟飾もなさまゝ一杯機嫌で登場、其後について、テレエギンもギタラを持ちて登場)。

アストロフ。彈き給へ！

テレエギン。皆様がお寢みだからね！

アストロフ。彈き給へ！

(テレエギンは靜かに彈き出す)。

アストロフ。君一人が、婦人はゐないか？

(兩手を腦に抱へて小聲に歌ふ)。『行けや小屋。行けや暖爐。主人に寢床もありはせぬ』……　あゝ雷に眼を覺された、好い雨だつた、時に今何時だ？

ヲイニツキイ。那樣こたあ知るものか。

アストロフ。僕は此所でエレナ・アンドレエウナの聲がしたやうに思つたが。

ヲイニツキイ。今まで此所にゐたのさ。

アストロフ。實に美人だなあ、(机の上に並んでる藥壜を見て)。藥か。甚麼處方箋だつて此所にないものは無いだらう。やれハリコフの醫者の、やれモスクワの醫者の、やれツーラのと……何所の町でもこの足痛風には手拗(てこず)つてゐるのだらう。全體彼は病氣なのか、或は眞似をしてゐるのか。

ヲイニツキイ。病氣さ(間)。

アストロフ。奈何して君は今日、元氣が無いんだ、敎授(プロフエツサー)が可哀さうなのか？

ヲイニツキイ。止し給へ。

アストロフ。それぢや或は夫人に惚れたのか？

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ヲイニツキイ。彼女は我輩の親友だ。

アストロフ。もうか？

ヲイニツキイ。「もうか」とは何がだ？

アストロフ。聞き給へ、恁うだらう。婦人が抑も男子と親友になると云ふ經路はだ、詰り恁云ふ順序だらう。初には友達、それから戀人、それから例の親友さ。

ヲイニツキイ。俗惡極まる言草(いひぐさ)だ。

アストロフ。奈何して？　さうさ……いや、實を云ふと、實際僕は俗物になつて了つた、さうして酒飲みて。此の節ぢや一ケ月に一度位は蛇度恁う飲み拔ける、其時はもう極端に鐵面皮になる、不遠慮になる。其麽ことでも容易くなつて、手重い手術でも美事に遣つて退ける、さうして未來の大なる計畫を頭で描き出す。さうなつて來ると、もう僕は自分を畸人だなんぞと思ふ所ぢやない、自分其物は宇宙に莫大な利益を與へるものと自信して來る。莫大な何か利益を……さうして僕獨特な哲學思想が頭に湧いて來る、するともう君等や他の人間は全てもう蟲螻(むしけら)か、細菌(ベチルス)かのやうにほか見えんのだ……（テレ、エギンスに）。おい彈け！　ワツプル！

テレエギン。いや君、手前は其、心一杯の喜を以て君の爲に彈きたいのですが、何せもう皆樣がアスお眠みなので！

トロフ。彈け彈け！

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

（テレエギンは靜に彈き出す）。

アストロフ。もつと君飲まうぢやないか、行かう、彼方にまだ多分コニヤクが殘つてゐたよ。さうして是から夜が明けたら、直ぐ僕の家に出掛けやうぢやないか。さう行くかな？『行く』と云へば、僕の所にゐる代診の奴だが、可笑しいのだ、何時でも『行く』とは云へないで『行ぐ』と云ふのだ、妄語者で、横着者で、仕様のない奴さ。さて奈何だらう、さう行くかな？（今しも彼方より出て來るソーニャを見附けて）。御免下さい、僕襟飾もせんで（急いで立去るをテレエギンも後について二人退場。）

ソーニャ。ワーニャ叔父様、貴方又お酒を上りましたね、あのドクトルと。それで二人はもう親友になりましたのね、だけれど彼の方はいつも那なのですから構ひませんけれど、貴方は叔父様よくないぢやありませんか、お年に似合ひませんわ。

ヲイニツキイ。酒に年なんぞが何の關係があるものか、生活の味を味はうことの出來んものには、空中樓閣でも描くより外はない。これが未だしも増しさ。

ソーニャ。草はもう皆刈つて、那して積んであるのに、この毎日の雨で腐敗つて了ひはしないだらうかと、這麽に私は心配してゐるのに、叔父様は空中樓閣を描いてお出なの、もうお叔父様つたら全で農事は棄てゝ了つたのね……　私たつた一人働くばかり、もう力も甲斐も拔けちやつたわ（ふと吃驚して）おや叔父様は眼に涙を溜めてお出よ！

ヲイニツキイ。甚麽涙！　那様ことがあるものか……　馬鹿な……だが今、お前がちつと俺見た時の

を眼色たら、何と死んだお前の母親に似てゐたらう。あゝ可愛い俺の……（ソーニヤを引寄せて饑たるもののやうに、其手に其顔に接吻する）おゝ姉妹……可愛い俺の妹……今頃は何處にゐるか？若しお前が知つたら── あゝ若しお前が知つたら！

ソーニヤ。何を叔父樣？ 何を知つたら？

ヲイニツキイ。あゝ堪えられん……よくないなあ……なに何でもないさ……後で……何でもないんだ…… どれ行かう（退場）

チエホフ作 ──未完──

圓窓より

○

見よ。女の眼は常に横に動く。

女は平面に住む。

たとへその眼がいかに活潑に世界の終邊まで無窮に走つたところて眞の智惠は得られまい。

私は女の眼を見る毎にいつも心に祈る、「あの眼が縱に眞直に内に注ぐに堪へるだけ強くなれ。そして女が立體的に生きるやうになれ。」

けれど私の最も望ましい女は矢張り平面に住む。

言ふところの平面とは立體の基底。

この意味から言へば立體的に生きるものは未だ至らざるもの。通達せざるもの。

我より行きて物を見るを迷ひと言ひ、物。我に來りて見ゆるを悟りといふ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

横に走る眼は外界を自己の外に認めて追求し、縦に注ぐ眼は外界を自己の内に收め見る。
立體の基底は内外雙び忘ずる無底の平面である。
こゝに一切は我が心内のものとなる。
私は天上天下唯一人の女の來らむことを望む。
けれど其時、女は最早女でもない。男でもない。
しかも女は女。なほも女。

○

此頃私のところへ或人が來て知つたやうな顏付でこんなことを言ふ。
あなたの性格は「かうだ」「ああだ」と。
私は大抵だまつて聽いてゐる、さもなくばほゝゑむ。
時としては私の直觀にはいつた相手の性格の幾分を以て答へとする。
私に固定した所謂性格といふやうな不變のものがあつてはそれこそ大變なのだ。
私は性格のないものである。もう自分の性格を滅却したものである。
若しかう斷言することになほ今日多少の不安があるとすれば性格を滅却せむと日夜努力しつゝある

ものだとは天下に公言して斷じて憚らない。

だから私の前に現れた相手の性格こそ其瞬間の私の性格に外ならないのだ。

私のところへ來る人は、私の上に私の中にあなた自身を見出していたゞきたい。もとより私は自分自身を隱さうとは少しも思はぬ。隱したくも隱すものを有つて居ないのだから。私は自分の總てをいつも太陽と共に萬人の前に晒しものにしてゐる。どなたでも御隨意にそこにあなた御自身を見出して下さいと大きな聲で言つてゐる。けれど誰一人として見なければ矢張り秘密である、永久公然の秘密である。

とは言へ、私の心の何處かに所謂私の性格なるものが、坩堝の底の殘留物のやうになほ澤山、こびり着いてゐることであらう。それは私がまだまだ至らないからである。さうして私は竊に心に愧ぢもする。けれど其殘留物を分析し、一々其性質を究めやうとする時代はもう私から過ぎ去つたやうに思はれる。私は自分の性格を今は知らうとは思はぬ。又知る必要を感じない。萬一なほ知る必要があるとすればそれは更により以上に性格を滅却せむとする强壓を增さしめむがために外ならない。

さりながら私は此强壓に就て何も言ふことは出來ない。何が故にこんな强壓を感ずるのがどうしても私には分らない。私自身に何の具體的の理由も見出さない。併し只感ずるのだ。性格の滅却を欲する心、解脫を願ふ心、より强くより力ある充實せる生を求むる心、これをどうして否定することが出來やう。人間の一時の物好きや、出來心とは私には思はれない。又私一個に限られたものとも思はれな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

い。

私は自から神たらむとしてまづ神を殺した、そして神を見、神となつた。

けれどこゝに自白せねばならぬ。自分のこの緊張した生活に時として綻を生じ、この無意識な眞空の祭壇を空虚が生みつける色々の美しい偶像で汚す不純な、不透明な日のあるのを心から悲しんでゐる、と。

が、今一度繰返して言ふ。私は性格のないものである。もう性格を滅却したものである。他から何と見えるかそれは私の知つたところではないが、もし私に自分の性格を今日なほ口にすることを許すならば所謂人間の性格なるものを滅却せむとする不斷の傾向が恐らく私の最後まで變らぬ性格と言へるであらう。

○

四年前のこの夜、この時（三月二十一日午後十時十五分）私はこの圓窓の自分の部屋を捨てゝ死ぬべく拔け出たのだ。

何にせよ突差のことだつたから、いよ／＼形體上の死を決行するといふことになると、私のやうな人との關係の極少ない者でもなか／＼せねばならぬことが多かつた。頼まれた速記の翻譯や、借りた書

物や自分の記錄類や、友達からの手紙や、洗濯物の仕末などゝ私の頭は俄に實際的に働かさねばならなかつた。日中は是等の雜務で殆ど忙殺された。さて總ての用事も片付いた後、家出前二時間の靜座、眞に一切の所緣を放棄したあの二時間の快い靜座、あの心ゆく思はどうしても忘れられない。其後はあれだけ深い、あんな透徹した心境を味はうと思ふと並々ならぬ骨折りを要する。

私は何故殺されるのか、何故死ぬのか、そんなことは何んにも知らなかつた。又、知らうとも實は思はなかつた。

私は只殺さうといふことに對してそれを避けやうとする念が全く動かなかつた。毎々殺すといふやうなことを聞かされてゐた。始めからきかされてゐた。が、いつでも私は死んでもいゝやうな氣てゐた。何故だか避けやうと思つたことは一度もなかつた。

何としても自分が殺される、自分が死ぬといふことは私には考へられないことなのだ。もう一度死んだ自分には、そして死から新に生れた自分には死といふものがどうも考へられない。

考へられないといふよりも實は殆ど考へに上らなかつた。

——らいてう——

編輯室より

■編輯の筆を置いてまづホッとした。と同時に豫期に反したものを出さればならないのを心苦しく感じました。

本月はどうも不幸な月でした。特別號として小說ばかりを掲載するといふので随分意氣込んでも居たのですが、當然手に入ると思ひ込んで居た原稿がメ切間際に駄目になるやら殆ど當惑するやうなことにばかり出逢つて仕舞つたのです。

■國木田さん、森さん、野上さん 田村さん、木内さんなどの御作を掲載することの出來なかつたのは殘念でした。どうぞ次號を御待ち下さい。

■此の間社員の某氏が來られて女には冥想がないから……と云はれました。私も至極同感です。人生は冥想の中に見られるもの。冥想なきものに藝術のないのは當然でせう。又しても私は立體的に生きる唯一人の女がほしいと言ひたくなります。社員方の不斷の努力奮勵を祈つて居ります。

■大變延び〳〵になりました、研究會もいよ〳〵本月第一金曜日（四月五日）から開かれることになりました。申す迄もないことですが在京の社員方は殘らず御出席のことを望みます。

社員外の婦人の聽講をも許す筈ですから御友達の方々にも御勸め下さい。社員お一人が少くもお二人づゝのお友達を御連れなる位の御覺悟で願ひます。講師、時間、場所、其他の委しいとは豫告の方で御承知を願ひます。まづ當分はあんなことに極めたのです。午後三時からとしましたのは少し遲いやうですが放課後としたのです、學校へ通つて入らつしやる方々の便宜の爲めに。今、丸善其他へ本を問ひ合せ中、追て御知らせします。

■靜岡の大村さんも東京に御住ひのことになり、近くは大阪の尾竹紅吉さんも上京されます。上野葉子さんも四月には上京するとかいふやうな御話がありました。其他來る六、七兩日の女子大學の櫻楓會大會に出席の爲め上京せられる青鞜社員もあらうかと思ひますのでこれを好機として春季の談話會を四月五日の正午から午後三時迄矢張り萬年山で開くことにしました皆さんに御目にかゝれることゝ樂しんで居ります。

■與謝野さんは本月下旬加藤大使の一行と御一緒に西比利亞線で巴里へ遊ばれるさうです。また色々の變つた御作を拜見することが出來るで御座いませう。同人等はあちらからの玉稿を受取る日を今から待たれるやうな心地がいたします。

■五月號からは毎號社員方の日記を二名位づゝ掲載したいと考へて居ります。これは社員方の離れての御希望だつたので、各地に隔つて居るお互の生活、境遇などを知り合ふことによい方法だと思ひますから實行いたします。少くも二日三日の日記を御送り下さい。田原祐子さんは其卒先者として三月號に御出し下さいましたことは皆さんも御承知の通りです。

■ポオの散文詩集は六月頃には出せやうかと思つて居ります。

■どうぞ皆さんよい御作を澤山御送り下さい。そして編輯係の者がいやでも喬ひ立たずには居られないやうにして下さい。

■初號以來幹部で御働き下さつた木内さんは御家の御事情で係を御辭しになりました。同氏は英佛和女學校選科に入學佛語を一生懸命に勉强なさることになつたのです。本月から荒木さんがかはつて御盡力下さることになりました。

■新たに松尾豐子、木村孳子の方々が御入社なさいました。

本號責任者

荒木郁

平塚明

寄贈書目

牧水歌話　三田文學

東洋時論　新婦人

婦女界　心の花

早稻田文學　劇と詩

スバル　シバヰ

歌舞伎　ホトヽギス

層雲　ザムボア

女子文壇　道案内

みづゑ　六合雜誌

短檠　桑の實

北斗　しれえね

藝文　アララギ

印象

雜誌規定

○毎月一回一日發行
○定價一册金貳拾五錢――郵稅壹錢五厘――
○原稿〆切期日は毎月十日限とす。
○前金購讀料（四ヶ月分）壹圓（六ヶ月分）壹圓五拾錢
（八ヶ月分）貳圓（十ヶ月分）貳圓五拾錢（一ヶ年分）參圓
○廣告料　（一頁）拾五圓　（半頁）八圓
○廣告は總て卷尾のこと、但し申込の順序に依る。
○振替貯金（東京口座一一六〇）に拂込まれたし
○郵券代用は一錢切手に限る（但し一割增のこと）
○本號に限り特價金參拾錢　郵稅金壹錢五厘

明治四十五年三月二十七日印刷納本
明治四十五年四月　一　日發　行

東京市本郷區駒込林町九番地
青鞜社内
編輯兼發行人　中野初

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷人　島連太郎

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷所　三秀舍

禁轉載

發行所　東京本郷區駒込林町九番地　青鞜社
（電話下谷三七七六）
振替東京口座一一六〇番

發賣所　東京市神田區表神保町三番地　東京堂
電話本局（一一二四
三三一八）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

象徴藝術

五月一日創刊

第壹號

薄命文士會

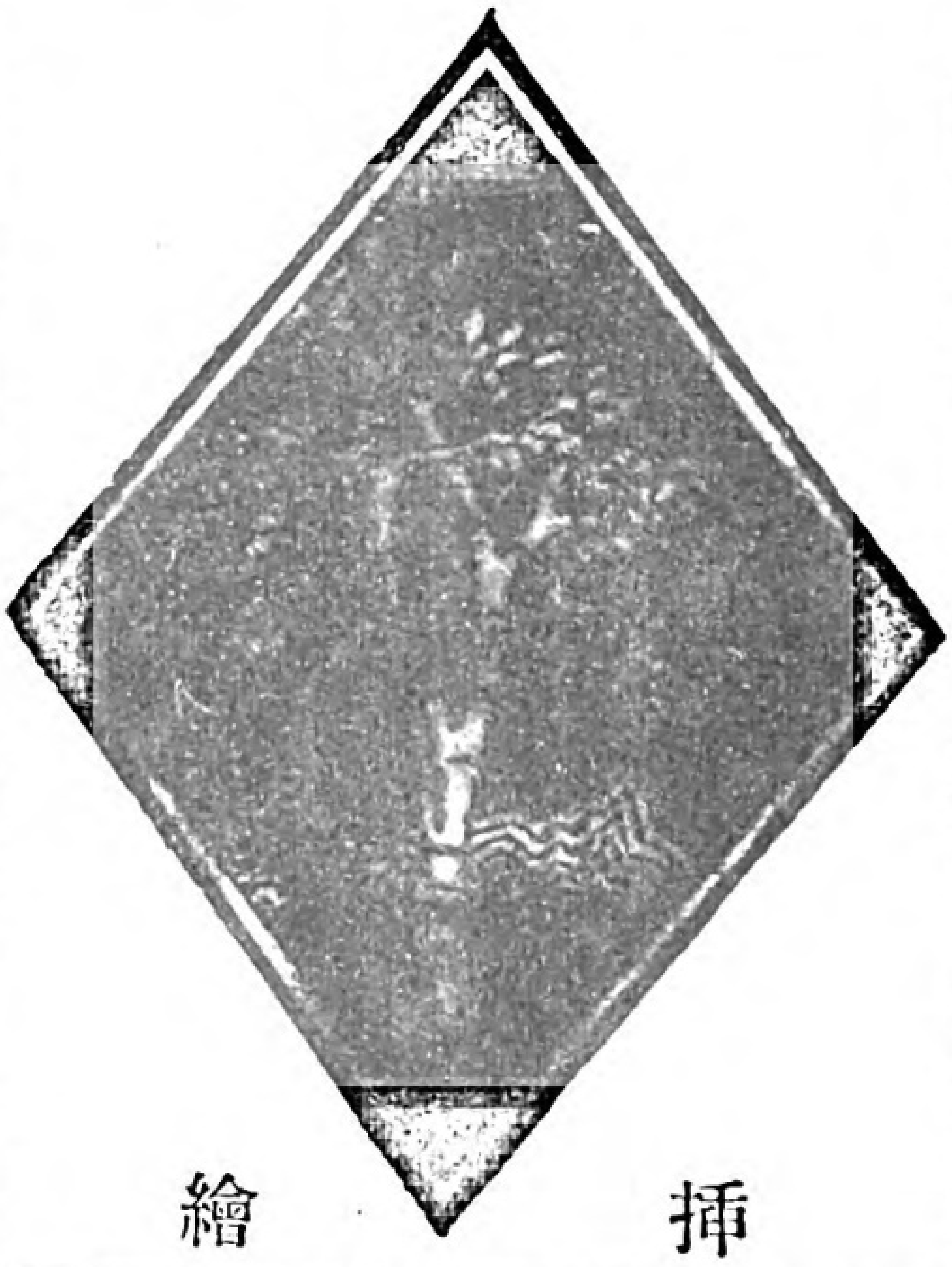
血の言葉……増田篤夫
惡魔の晩餐……三富朽葉
永遠の夜……今井白楊
ステファン・マラルメの肖像……ジエームス・ホイッスラア
ステファン・マラルメの美の感覺……パウル・デリオール
病院……マウリス・マアテルレンク
ディヰン・ボンタン……アルベエル・サメン
野鴨……ヘンリック・イブセン
冬の唄……アドルフ・ルッテエ
今日の詩人明日の詩……アレリ・ド・レニエ

發行所　牛込區津久戸町三十一　薄命文士會　電話壹八四五
發賣元　東京堂
每月壹回壹日發行　定價貳拾五錢　郵稅貳錢

初號特價四十錢

白樺

或る女のグリンプス（小說）……有島武郎
不倒翁（感想）……武者小路實篤
友達に（感想）……小泉鐵
亡き姉に（小說）……平澤仲次
腹いたみ（小說）……里見淳



挿繪

心臟（木版四度刷）
オブストフェルデル
嵐
死せる母と子供
嫉妬
臨終の部屋
自畫像
叫び（木版）
エドヴァルド・ムンヒ

幻影（小說）……園池公致
エドヴァルド・ムンヒ（紹介）……無車
ノア・ノア（ゴオガン）……小泉鐵譯
題未定（小說）……正親町公和
編輯室より……同人

東京市麴町區麴町二の二洛陽堂發行
振替口座二〇九一四

第三卷第四號

四月號

本號特價四十五錢

市內一手販賣所東京市京橋區尾張町二丁目二十六東海堂

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

文學士　厨川白村著

菊判五百七十頁　清装一冊

定價金壹圓貳拾錢　郵税小包金拾貳錢

近代文學十講

近代の文明と思潮とにはどんな特色があるか今の文學と昔のとは如何なる點に於て違ふか浪漫派や自然派象徴派・神秘派などは如何なる性質のものかまた最近歐洲文壇の大勢は如何凡て斯かる問題を大局の上から觀察してよく要領を摘み順序正しく又誰にも分り易く親切に說明したのが本書である著者は平素猥りに論議せず唯研鑽に餘念なき篤學の士であるが此類の書がまだ西洋にも日本にも無いのを遺憾なりとして本書を公にされたのである

發行所　東京銀座壹丁目　大日本圖書株式會社

振替東京二一九番　各書店雜誌店にもあり

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

四月一日發行

アララギ

第五卷 第四號

お夏淸十郎(詩) きしのあかしや
譯詩(イエーツ) 山宮允
短歌漫言 柿の村人
短歌小言 茂吉
三月の歌壇 茂吉

穴守の鳥居 坂本文泉子
强ひられたる歌論 伊藤左千夫
京都のことその女のこと 中村憲吉

詩歌

伊藤左千夫 長塚節 蕨眞 柿の村人 古泉千樫
民部里靜 土屋文明 中村憲吉 中島忠利 齋藤茂吉

價一部金十五錢 半年九十錢 一年一圓七十錢稅共

東京市本郷區茅場町三ノ十八 東京根岸短歌會

第一卷 第二號

四月號

シレエネ

四月五日發行

定價金貳拾五錢　郵税貳錢

獨逸の浪曼主義と佛蘭西の象徴主義……三富朽葉
王子と舞姫（戯曲）……齋藤青羽
野に出でゝ（詩）……堀江朔
寂しき曉（小說）……三上白夜
ペレアスとメリサンド（戯曲）……メエテルリンク
歸る忘れた人々（小品）……宇野浩二
悲しき日の爲に（詩）……齋藤青羽
夜の歌（小說）……增田篤夫
批評……堀江朔

—新刊豫告—

近代詩集

ベルレエヌ

詩集

月光と夜集

—近代詩集第一篇—

齋藤青羽
宇野浩二 譯

—五月一日出版—

四六版美裝
紙數三百頁
定價[illegible]錢

大阪市南區天王寺
北河堀町二四四九
發行所 シレエネ社

東京市牛込區
通寺町
發賣所 文好堂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

内藤千代子著

ホネームーン

チリン〳〵一大事件出來…………

……と印刷所から電話がかゝつた。『何ですか大事件とは？』『あのゥ甚だ困つた事が降つて湧いたのですが、「スヰートホーム」と「ホネームーン」の二册とも重版が多かつたものですから、紙型がこわれて役に立たなくなりました』『エー、そりや大變だ。その爲に一時なりとも品切れになつては愛讀者諸氏に申譯がありません、一日も早く組みなほして下さい』『承知しました』こんな會話あつて、今や十六版と十二版は新たに成装して出ました。どうか早くお求め下さい、

各一册六十五錢　郵税四錢づゝ

東京博文館發行

内藤千代子著

スヰートホーム

純文藝雜誌

ザンボア

朱欒四月號

每月一回一日發行
第二卷第四號
定價一冊二十五錢
送費一錢五厘
三ヶ月七十五錢

四月號

執筆者

茅野蕭々氏
小山内薫氏
蒲原有明氏
吉井勇氏

相馬泰三氏
長田秀雄氏
仲田勝之助氏
齋藤與里氏

木村莊太氏
北原白秋氏
三木露風氏
森川葵村氏

土岐哀果著

歌集 黃昏に

新刊發賣

定價金五拾錢
送費金六錢

森川葵村著

歌集 夜の葉

近日發賣

定價金六拾錢
送費金六錢

發行所 東京市京橋區傳馬町三丁目（振替東京五六一四番） 東雲堂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

月刊 藝文 雜誌

明治四十五年　四月號　四月一日發行

定價一部郵税共廿二錢。半年分一圓廿錢。一年分二圓卅錢

「藝文」は京都帝國大學内京都文學會の機關雜誌にして東西兩洋の學術文藝に對し最も謹嚴深刻の批判を下さむとするものなり

歐洲列國並立の眞相　文學博士　原勝郎
敦煌本大雲經と賢愚經　文學博士　松本文三郎
支那に於て發達したる樂論　文學士　兼常清佐
幼年の日より　エルンストハルト　出野彰夫
簡牘檢署考　王國維
袁清賦 並序　文學士　鈴木雄虎
夕暮　竹友藻風
彌天道安論　文學士　羽溪了諦
新刊西域記校訂委員に質す　荻原雲來
海まで　高橋泰
セイス老博士　文學士　青陵生
新謠曲百番　文學博士　新村出
むもれ木　文學士　藤井乙男

發行所　東京小石川原町六　振替東京一三五三　電話番町二六〇八　鷄聲堂

月刊美術雜誌

みづゑ

每月一回三日發行
一部郵税共
金二十五錢

みづゑ本邦最古にして又唯一の水彩畫研究專門雜誌なり

水彩畫をえがく人は勿論愛好せらるゝ諸君は座右に本誌を欠くへからす

第八十六號 四月三日發行 要目

口繪

ハドソン河（水彩原色版） 故 荻原守衛
アルプス山中の白雲岩（同） ジーネ
椿（同） 故 大下藤次郎
四月（同） ボートン

記事（主要なるもの）

山岳の水彩畫家 小島烏水
水彩畫にホワイトを使用する場合 石川鐵一郎
沖繩十產 中川八郎 石川寅治
海洋の描法 小神野三男四
續三郎物語（二） 鵜澤四丁
大下藤次郎氏逸事 長野菊次郎
教室から 服部嘉香
非人情記（三） 矢代幸雄
水の研究六種
其他寫眞版、木版、寄稿、評論等

發行所 東京市小石川區關口駒井町三 振替東京口座東京六九六三番 大下春子方 春鳥會

女子文壇

四月一日特號

紙數三百頁　口繪十三頁　美裝　特價三十錢　送料二錢五厘

大坂東京優劣論

●大坂の進步と東京の進步……岩野泡鳴
●大坂の婦人と東京の婦人……須藤南翠
●大坂の食物と東京の食物……村上浪六
●大坂の郊外と東京の郊外……加藤朝鳥
●大坂の結婚と東京の結婚……澤田撫松
●大坂人の性質と東京人の性質……船井梅南

▼自由に過る女學生の行動……菊地幽芳

食味の感想

○高村光太郎　○田村とし子　○水野葉舟　○三木露風　○服部嘉香　○福田夕咲
○小川未明　○森川葵村　○兒玉花外　○鈴木三重吉　○生方敏郎　○島村苳三
○木下杢太郎　○秋田雨雀　○久保田萬郎　○川路柳虹　○金子薫園

小說　▲父と妹　森鷗外

▲名取弟子　森田草平

◎黒き手套……北原白秋
◎春の地上……河井醉茗
◎繪日記……竹久夢二
◎江戶大阪風流言葉全一覽表
◎桂公爵夫人の平生……福原子夫人
◎原町の家……澤町胡夷
◎鎌倉より……磯萍水
◎元祿時代の花見……春波
◎耳袋……猿丸太夫
◎女優の情操……森律子

▼櫻の名所▲

●小說　破談……佐藤萬壽子

暗い心　明るい心

◎暮ゆく空◎死んでも放さぬ拜領の名劍◎新しき出發點◎大島の渚より◎帝劇の一夜◎黒き扉◎自然と結婚と◎世間話◎婚約日記◎親展おみくじ◎明るい印象◎銀色の翼が誘ひに來る◎月下に惱める產婦を救ふ其他

▶東京市京橋大鋸町十二　女子文壇社出版（振替貯金口座東京第壹七貳九番）賣捌各地書店◀

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

田岡嶺雲先生譯並註

和譯春秋左傳

春秋の時代は所謂武裝的平和の下にある世界の現狀と類す、春秋に齊晉楚あるは、猶今日の歐洲に英獨佛露あるが如く、而して列國國際の間に同盟あり、盟主あり、外交あり、鐵火あり、春秋左傳は當時の史實を逃べて最も詳なる者、此を以て單に三千年前に於ける一魯の史記に過ぎずとする莫れ、今猶古の如し、左傳一部を將って世界の現狀を鑑む可らざらんや。

四六版總クロース金文字入美本 上下二冊
正價各一圓廿錢 郵税各十二錢

和譯漢文叢書既刊書目

同上著者

第一編	和譯老子莊子	正價壹圓 郵税十二錢
第二編	和譯韓非子	正價壹圓廿錢 郵税十二錢
第三編	和譯戰國策	正價壹圓廿錢 郵税十二錢
第四編	和譯荀子	正價壹圓 郵税十錢
第五編	和譯史記列傳 卷上	正價壹圓廿錢 郵税十二錢
第六編	和譯史記列傳 卷下	正價壹圓廿錢 郵税十二錢
第七編	和譯七書 附鬼谷子	正價壹圓 郵税十錢
第八編	和譯淮南子	正價壹圓廿錢 郵税十二錢
第九編	和譯墨子列子	正價壹圓廿錢 郵税十二錢
第十編	和譯東萊博議	（本月中旬發行）

全十二冊

樋口銅牛先生著

碑碣法帖談

附 孫過庭書譜 和漢歷代法書

菊判總クロース金文字入美本 全一冊
正價一圓五十錢 郵税十二錢

書道の嗜なきは士人の恥也 本書は書學書道の燈明臺也

發行所 東京神田區雉子町 振替東京七九九五番 玄黃社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

▲著者の名は常に文壇より驚歎の眼を以て見られつゝあり、

▲軟弱と沈滯とを極めたる現文界の鹽の柱、火の柱、雲の柱は著者也

▲著者出づるとき、未だ血汐の濁らざる青年は歡呼の聲あげて之を迎ふ

▲著者の文學は健全の文學也、强者の文學也

▲その一として世人は猶ほ詩集「曉鐘」を記憶より去るを得ざるべし

土井晩翠君著

曉鐘

▲「曉鐘」は現代中年者の思想の一部を形作れり、中等教科書に拔かれたり

▲剛健なる第一高等學校の寮歌は毎年競を「曉鐘」より採るも多し

▲この書絶版となりて鐘は一度び水底に沈みぬ。夜の黒幕全く世を掩ひて數年を經たり

▲今や沈める鐘は再び出でゝ山上に釣り上げられぬ。改訂十一版を機として全然面白一新されたり

▲日本海戰を歌いたる「雷霆」硬骨詩人フヰールドンを詠じたる「不朽」の二大長編加はれり。而かも定價は引き下げられたり。

▲墮落の夜は明け放れんとす。若人よ夜光の杯を捨て來りて勇ましき曉鐘の第一聲を聞かずや!!!

定價金四十五錢

神田區表神保町 東京堂

郵税六錢

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

うらうらとてれるはるびにひばりあがりこころさぶしもひとりおもへば

心の花

第十六巻第四號　四月號　毎月一日一回發行

前かけ(小說)　岡部千代子
おとづれ　木下利玄
小さきアイヨルフ　草野柴二
朱鷺　長井金風
死にて生れて　角鷗東
春の日　武井大助
惡める子等も　松井恒
酛すり歌　寺田憲
櫻花と本居宣長　名越那珂次郎
鳥のこゑ〱　加藤雄吉
曾禰好忠　鴻巢盛廣
萬葉集講義　佐々木信綱

はるのそのくれなゐにほふものはなしたてるみちにいでたつをとめ

一冊拾參錢●半年七拾五錢●一年壹圓四拾錢(税共)

東京日本橋區本石町一ノ一　竹柏會出版部　振替口座東京四三〇〇番

日盛りや平たく見ゆる花の山　馬光

俳味

四月號

要目

俳句は心象……（卷頭語）
芭蕉と黄山谷……文學博士 幸田露伴
蕪村と漢學（其二）……久保天隨
俳諧七部集雜論（承前）……風雷子
妙義の思出……荻原蘿月
雨華庵の跡……高安月郊
四月馬鹿……文學博士 箕作南亭
誕生會……高峰米峰
口語體俳句と上島鬼貫……安藤和風
樹間（小說）……長尾素枝
俳諧朝鮮……野崎小蟹
心理學（詩）……佐治乖箭
ロンドン小景（詩）……靑次郎
ポオタア氏の近業……一記者
京の春……秋月秋坡
春の灯……（懸賞俳句）
智識……（懸賞文章）
通り雲……レモン法師
石稻荷幟（寫眞版）……抱一筆

附錄

去來發句集

毎月一日一回發行

定價
一部 金拾貳錢
郵稅 金壹錢
半年分前金 郵稅共金六十八錢
一年分前金 郵稅共 一圓三十二錢

發行所
東京市本鄉區西片町拾番地
俳味社
振替口座 東京參四參四番

四月一日發行
第四年第四號

スバル

價三十錢
郵税一錢五厘

小説
題未定……堀花村
昔馴染……五百歌左次郎
太陽の照らす牧場……出野青煙澤
廊下……秋庭俊彦
鈑……文米鷗外
雁……森鷗外
食注……江南文三

戯曲
結婚の期……茅野蕭々譯
岐路……天野良平
權力……後藤末雄

詩
詩二篇……長田秀雄
鞭……吉井勇
夕方のびあにし……佐々木好母
詩……出野青煙
Scherzo他二篇……本山彌太郎

歌
詩數篇……堀口大學

論文
死　山本禿坪譯
歌　雅子　かの子　大學　葭子等
椋鳥通信　無名氏

東京神田北神保町二
昴發行所
電話本局四二六四番

清新なる文藝雑誌

詩と劇

定價一部二十五錢

毎月一回一日發行

四月號要目

■福田夕咲氏著「春のゆめ」新刊發賣（定價七十五錢 郵稅八錢）

生の歡喜（評論） 片上伸
ある日（小説） 相馬泰三
微笑（感想） 齋藤與里
L'Sprit. VEILLE 仲田勝之助
幻と私（詩） 白鳥省吾
日蔭の寢臺（詩） 西宮藤朝
矢の倉物語（戯曲） 八橋有春
富士川下り（小説） 小澤久雄
鄕士の家（戯曲） 國枝史郎
死顏（飜譯） 秦豐吉
塔の話（小説） 秋庭俊彦
影の音（小品） 小川未明
春愁（詩） 福田夕咲
死（飜譯） 長澤武男
金絲鳥の眼（詩） 人見東明
表紙繪 齋藤與里
扉繪 津田青相
□三月の創作評□短歌十五頁□編輯餘錄□新刊紹介□

■小澤久雄氏著「流れ」新刊發賣（定價七十五錢 郵稅六錢）

發行所 東京小石川小日向臺町三ノ二四 詩と劇社 發賣元 東京神田 東京堂

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

每月一回一日發行

一冊二十五錢郵税一錢五厘

斯道唯一の演劇雜誌

歌舞伎

第百四十二號（四月一日發行）

六冊前金郵税共一圓五十錢

十二冊金二圓八十錢

戲曲「僧院」（エルハアレン作）……鷗外譯

帝國劇場の「熊野」について……杉谷代水

私の見た「熊野」……齋藤佳三

默阿彌著作解題（其二）……河竹繁俊

「稽古扇」を見て……ほのほ生

故團藏が「熊谷」の型……山野芋作

フランシスク、サルセイの演劇論（完結）……和田魚平

帝劇「緋櫻」について……塚原澁柿園

明治座の「伊達政宗」を見る……鈴木春浦

三月の各劇場（青々園、春浦）

戲曲「戀愛三昧リイベテイ」（フエルハアレン シユニツツレル作）鷗外譯

英國の檢稿官　坪内士行

土曜劇場の第一興行……川村花菱

土曜劇場寸評……森ほのほ

拙作「肥後守清正」……井手蕉雨

文藝活動寫眞協會……吉山旭光

本郷座新幹部四人……瀬戸閣太郎

三月の脚本界……花びし生

根越……尾上紋三郎

追善狂言の「加賀鳶」……尾上菊五郎

劇談會——劇壇時事——劇界一覽

脚本「龍を幽る女の萬歲」　川村花菱

本郷區湯島切通坂町書報社内　歌舞伎發行所　電話下谷二四八三　振替口座一八一〇六

利は元に有ばこそ　現金出して安く仕入れて

紋羽二重　平羽二重
朱子羽二重　梨地羽二重
御裏地用羽二重　造花用羽二重
刺繍用羽二重　書絹

當店は羽二重の生産地たる越前福井に[illegible]工場を有し直接の卸直段なれば他の小賣店よりは慥に二三割安價に有之候
御染物は熟練なる染屋と特別廉價の契約有れば無手數にて御便宜に調進可仕候

羽二重

東京市神田區西小川町一丁目十三番地
島田織物會社出張所
羽二重屋商店
電話本局三七八三番
（電話帳には此の部羽二重屋を御引用被下度候）

京御召
縮緬

お召は京都西陣製品縮緬は近江國長濱製品の精撰したる品を取扱居候
御用命の節は電話又は端書にて御[illegible]候へば直に持參御覧に入れ可申候

貸して小言を云ふよりも　いつも笑て入れる引金

女子大學

會員募集

家政講義

(毎月二回發行 二ヶ年修了)

● 會費

一ヶ月五十錢　半ヶ年二圓八十錢
一ヶ年五圓四十錢　全學期分十圓

新學期開講

● 入會の最好期

入會金免除四五月限

入會者の福音

將來家庭に入りて一家の和樂と生涯の幸福を望まるゝ淑女現在家庭の主婦にして更に進步改善を望まるゝ婦人の處世に切要の學藝を通信敎授によりて修得せしむるは本會講義也親切なる講述は通學聽講すると異らず如何に講述が平易懇切にして科目の撰擇解說に注意せるかは先づ內容見本によりて一斑を知られよ本會講義は獨學者唯一の修學機關にして好師友良參考書たり！

◀科目と講師▶

- ●修養談……諸名士各學校長
- ●修身講話……成瀨仁藏
- ●教育……麻生正藏
- ●實驗心理學……松本亦太郎
- ●兒童研究……高島平三郎
- ●法制大意……奧田義人
- ●經濟大意……中timed敬三
- ●社會衞生……三宅秀
- ●家庭理科……近藤耕藏
- ●家事……井上秀子
- ●作法……小笠原清務
- ●日本料理……笠木幸子
- ●西洋料理……手塚かれ子
- ●裁縫手藝……櫻楓會研究部
- ●生花……兒島文茂
- ●家庭園藝……佐々木祐太郎
- ●自然研究……大橋廣子
- ●文藝……武島羽衣
- ●文學評釋……下村英
- ●其他科外として歷史、地理、生理兒童研究

● 見本附き會則 申込次第進呈

編輯所　東京市小石川區目白臺　日本女子大學校 通信教育會

發行所　東京小石川久堅町百八　精美堂　振替東京二八三八番

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

昭和43年9月15日発行　【第2回配本】

青鞜第2巻（第1分冊）

編著者	平塚らいてう
発行者	藤原正人
発行所	(株)明治文献
印刷	江明印刷
製本	(株)三高製本

【分売はいたしません】　定価 3,800円

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ASN
PER
DL
456
S45
V. 2
no. 4

University of Colorado at Boulder

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

流行せる洋傘と

實用むきの洋傘

日本製と舶來品とを問はず、
婦人用、紳士用、小兒用とに論なく、
價は絹張二圓卅錢(婦人用)より以上種々
取揃へ居申候間、御用仰付下されたく奉願上候。

▲四月一日より 新柄陳列會開會▼

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER